

“高校卒業1年目”を生きぬく若者たち

—「世界都市」東京における若者の〈学校から雇用へ〉

の移行過程に関する研究Ⅱ —

乾 彰夫・新井清二・有川 碧
杉田真衣・竹石聖子・西村貴之
藤井吉祥・宮島 基・渡辺大輔

序 章

乾彰夫・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・渡辺大輔

若者の〈学校から雇用へ〉の移行が長期化、複雑化している。その移行の変容が若者たちの中にどのような状況を生み出しているのか。そのことを東京という地域の変容の中で捉えようとするを目的に2002年から私たちは長期的な共同研究を行っている。ここに発表する共同研究論文は、その若者の移行プロセスを時系列に追う調査2年目の報告である。

私たちの第1回目の共同研究⁽¹⁾は、三つの視座に着目して行われた。一つ目は、若者をとりまく東京の雇用構造の変容に着目し、近年の移行過程の変容が若者をめぐる雇用構造の変容とどう関連しているのかを明らかにするために、国勢調査など各種の統計分析を行った。二つ目は、高校間の序列が高卒後進路にどのような格差を生んでいるのかを、東京都内の高校全体について明らかにするために、都内全高校を対象に「学校基本調査」個票内容に準じた質問紙調査を行った。三つ目は、高校生の進路選択をめぐって、その現状や生徒の意識を明らかにするなかで、生徒自身の学校での位置や環境、社会背景などが、どのように影響を及ぼしているのかを検討するために、A(多摩地区にある「中位校」の普通科)・B(下町にある「底辺校」の普通科)二つの都立高校の3年生併せて89名を対象に、進路選択に関する聞き取り調査を行った。

私たちがこれらの研究によって明らかにした点は以下のとおりである。

統計分析結果からは次のことがわかった。学校を介した正規雇用ルートが事実上崩壊過程にあるとあって良いような状況のなかで、かつての「就職者」（および専門学校進学者）層が大学・短大進学者層と「無業者」層へ吸収されていく二極分化が進行している。また、就職者（非正規雇用を含む）が学校斡旋（正規雇用ルート）を介することなく労働市場に参入する、これまでの雇用ルートとは異なるパターンの就業形態が急速に常態化しつつある。こうした雇用形態はパート・アルバイトが中心を占める流動性の高い雇用形態であり、それは東京においてそしてとりわけ女性に顕著にみられた。さらに、東京の求人数が全国同様大幅に減少しており、その中でかつては高卒者が従事しなかった職業に高卒者が参入しているなど、労働市場における高卒者の地位の変容が示された。また、ボールらの指摘している「空間」に関して⁽²⁾、〈学校から雇用へ〉の移行を契機とした若者の地域間移動には、学歴等による格差（中卒者や高卒者は地元にとどまる傾向にある）が明確に生じていることが確認された。

質問紙調査結果からは、「無業者」（「学校基本調査」カテゴリーで「左記以外の者」）の割合が、高校間の序列中位以下では序列の下からの順に高い相関をもって現れていること、その点に関し、中位層では男子に比べ女子の進路未定者が非常に少ないなどジェンダー差が確認された。また、「無業者」の割合が序列上位の学校の回答に意外に多く、このカテゴリーの中には本来は算入されないはずの予備校等への入学者を含む「大学浪人」がかなり誤って紛れ込んでいることが確認され、「学校基本調査」にも同様な状況が生じていることがわかった。

A高校、B高校の高3時インタビュー調査結果からは、A高校においては、進路意識にジェンダー差がみられた。男子の場合、大学進学希望者が大半を占め、彼らの多くは将来ビジョンとして漠然とした「高校」→「大学」→「会社（サラリーマン）」といった「標準的な」ライフイメージを抱いていた。それは、近年の少子化にともなう大学進学容易化のもと、以前ならば大学進学が難しかった層に、大学進学が可能な選択肢として現れた「思わぬワンランクアップ」としての進学希望が将来イメージの曖昧さをもたらしたのではないかと推測

できる。他方女子の場合、やはり進学希望が大半であるが彼女らはどちらかというところ「やりたいこと」の実現という進路意識をもっていることがうかがわれ、新しい自立モデルの展開という今後の検討に値する視点を得られた。また、こうしたジェンダー差は、進路指導に関してもみられ、男子は成績と学校の進路指導に強い関連がみられ、相談者も少なく「自分が決めた」と話すケースが多かったのにたいして、女子は成績とのあまり関連をもたないかたちで、複数の相談者が進路決定プロセスに登場していた。男女に共通した点として、部活動が主要な集団生活の場になっており、進路意識の形成になんらかの影響をもたらしていることがうかがわれた。家庭が進路意識にあたえる影響に関しては、「子ども」を扶養し、「子ども」にたいして一定の期待や教育要求をもちながら経済的資本、文化資本、そして親の期待を、子どもの反発をうまく回避させるかたちで、子どもに働きかけていくような感情的な支援⁽³⁾がA高校の生徒たちの進路意識の形成に強く影響していた。

かようなA高校の状況にたいしてB高校の場合、一人親家庭が多く、その中にはフリーターや進路未定者が多い。一人親家庭のみならず家計の厳しさから進路選択の幅を狭めている生徒が多く、大卒の学歴を親に持つ生徒が非常に少ないなど経済的資本および文化資本の乏しさが進路選択に影響を与えていることがうかがわれた。また、成績上位者で経済的に余裕のある生徒は、推薦で進学が決定している(B高校の教師が家庭の文化資本を補う指導をしながら)のにたいして、家計が厳しかったり成績が下位である生徒は進学の道が絶たれている。就職希望であっても希望する職種と進路指導とのミスマッチからフリーターを選択する生徒もいる。またこれまでに赤点が多いなど卒業見込みの出ない生徒の場合、学校を介した正規雇用ルートに乗った進路指導を十分に受けられないでいた。また男子よりも女子に進路未定者が多く、進学者・希望者で男子に四年制大学、女子に専門学校とジェンダー差がみられた。B高校全体的な傾向として生徒の空間的な見通しの範囲が狭く、そのことが進路選択の幅に一定の制限を加える一方で、地元のネットワークの存在から、地元にいることの安心感を得られていることが推測された。

以上、簡略化して整理すると、マクロにみれば高卒求人率の減少にともない

就職者数が減少し、それにともない四年制大学に顕著にみられる進学率の増加と他方でフリーター・進路未定者が増加傾向にある。ミクロには、就職を希望する生徒層に進路選択の困難さがみられ、彼ら彼女らは進学かもしくはフリーター・進路未定へ進路変更せざるをえない状況に置かれている。また調査対象校の生徒にとって進学を選ぶ場合、推薦による大学進学パターンがメインであるが、一方で経済的諸問題が大きなハードルになっている。あらためて一人親家庭など階層問題が深く進路選択に影響していることが確認された。

先述の知見をふまえ、若者たちが高校を卒業してのち、各進路（「フリーター」、「就職」、「大学・短大進学」、「専門学校」、「浪人」）を選択し、そこでの生活を確立していくプロセスを確認し、そこに働く様々な要因を明らかにする目的で、私たちは2002年に引き続きA高校、B高校を卒業した若者の移行過程の実態を把握する継続調査（2年目）を行った。本調査は、前回インタビュー対象者89名（A高卒業生39名：男16名／女23名、B高校卒業生50名：男21名／女29名）のうち、継続調査に応じてくれた51名に、彼ら彼女らの友人2名を加えた53名を対象に行った。調査期間は、2003年の10月～2004年の3月。インタビュー対象者の卒業後の生活は多様であるため、彼ら彼女らの都合のいい時期にインタビューを行ったことで時期にばらつきがみられる。インタビューは一人ひとりの生徒に、インタビュアーが複数ついて（都合がつく限り2名体制）、30分から1時間程度の時間をかけて行った（例外的に対象者が複数になったケースもある）⁽⁴⁾。

高校を卒業して半年後から開始された本調査では、まださしたる大きな変化が生じていない新しい環境での生活ぶりを若者たちはインタビューで語ってくれるものと私たちは想定していた。しかし、実際のインタビューからは、まだ1年も満たない期間の中で予想以上の変化が若者の移行過程に起きていることが明らかになった。それはとりわけ就職やフリーターをしている若者たちに顕著だった。他方で、進学した若者たちに関しても、大学進学層と専門学校進学層との間に、将来展望にたいする意識の差がはっきりと表れたことも、私たちは調査を実施する前に想定していなかった。若者たちは、後期中等教育を終えたのち、こんにちの長期化複雑化した移行期間を期待と不安を胸に渡りはじめ

る。彼ら彼女らがそれぞれにどのような進路を選ぶにせよ、最初に踏み込んだ新しい世界において、新たな人びととの出会いや活動のなかで、自分自身の価値観の揺らぎや関係性構築の困難さを経験しながら、新しい世界で生きていくために、これまでとは大きく異なる方法を模索している。本論で見ていくように、こうした次のステージの生活世界へ移行していった若者たちのなかには、深く苦悩し、傷つき、葛藤しながらも、地元や仲間を支えられながら自らの道を歩もうともがいている者がいる。この彼ら彼女らの生き方は、「生きていく」というよりはむしろ「生きぬく」と表現したほうが適当であるように思われる。このように、“高校卒業1年目”というのは、これまでの比較的安定した高校生活から新しい世界に移行していくなかで、若者たちをとりまく環境のみならず彼ら彼女ら自身にもドラスティックな変化がもたらされる大きな意味をもつ期間なのである。インタビューに応じてくれた卒業後の彼ら彼女らのうち、高校卒業後1年以内にすでに進路変更をしてきた／しようと考えている若者が現れていた。「フリーター」、「就職」、「大学・短大進学」、「専門学校」、「浪人」のうち、とくに「就職」を選択した若者の多くが離職しており、その離職にいたる経緯には責任感のなさなどといった今日の若者の意識の甘さを強調した批判を見直すような高卒就職者の就労の実態が明らかになった。この離職層をふくめ、高卒以前に限らず以後においても進路を変更した若者にとって、重要な選択肢として「フリーター」が位置づいており、その実態は、進学断念と家計への援助という二重の経済的な制約を受け、若者たちは「やりたいこと」を持ちつつも実現が難しい状況におかれていた。それとは対照的に、進学者たちは卒業後1年目の段階では比較的安定した生活を送っていた。とりわけ専門学校に進学した若者たちは、実際の職業能力形成に必要な専門的な学習を修得していく環境のなかで、具体的な将来イメージを抱きながら安定した〈学校から雇用へ〉の渡りをしていった。他方、大学・短大進学者は家庭の経済的な余裕から長い時間をかけて将来について考える余裕がうかがわれた。しかしながら、A高校、B高校から大学に進学した若者たちの中には、大学進学を当初考えていなかった「新規参入層」や近年増加傾向にある「唯一学科」に所属している者、また大学進学者にみられた家族との葛藤など今後の大学生活や将来イメージに

影響する要因が注目される。浪人の場合、家族の経済的・感情的な支援の有無が浪人選択および浪人生活の継続に重要であることが明らかになった。

以下本論では、現在の進路や就労状況などのカテゴリー別に、フリーター、正規就職者、専門学校進学者、大学（四年制・短大）進学者、浪人に分けて、その状況と直面する問題などについて紹介・分析したい。なお、正規就職後に離職してフリーターになった者、専門学校を退学してフリーターになった者などは、それぞれ正規就職者とフリーター、専門学校進学者とフリーターと、同一人物を二つのカテゴリーでそれぞれ扱っている。なお、終章ではこうしたそれぞれの状況から引き取れる共通するいくつかの問題について若干の考察を加えたい。

註

- (1) 乾彰夫・上間陽子・木戸口正宏・椎林美樹・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・宮島基・芳澤拓也・渡辺大輔『「世界都市」東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究』東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第20号，2003年12月。
- (2) Ball, S., Maguire, M. & Macrae, S. (2000), *Choice, Pathways and Transitions Post-16 : New Youth, New Economics in the Global City, London*; Routledge Falmer.
- (3) 前掲(2)
- (4) なお本報告では、インタビュー対象者の名称はすべて仮名であり、本文中の聞き取りの引用は事実を損ねない範囲で若干の編集を加えている。インタビュアーの言葉は〔 〕、筆者による補いの言葉は（ ）で表記している。

付記：A高校・B高校の卒業生に対するインタビュー調査には、各論文執筆者のほか、上間陽子（琉球大学）、木戸口正宏（横浜市立大学、法政大学、都留文科大学非常勤講師）、椎林美樹（東京都立大学大学院人文科学研究科教育学専攻修士課程卒）、唐雯（都立大学大学院人文科学研究科教育学専攻博士課程）、鄭成蓮（都立大学大学院人文科学研究科教育学専攻修士課程）、芳澤拓也（新潟中央短期大学）の6名が加わった。

第1章 不安定な移行過程を生きるフリーターの実態と将来展望

竹石 聖子

1. はじめに

近年の高卒労働市場縮小のなかで、高校卒業時点でのフリーターや進路未決定者が増加しマスコミなどでも注目されてきている。こうした状況を前に「若者自立挑戦プラン」など若者に対する支援政策がうち出された。フリーターになる要因を社会構造問題としてとらえようという視点もみられるものの若者の進路意識に還元するトーンはまだまだ強い。一方、若者研究ではフリーターや進路未決定の背景にはどのような構造的な要因が働いているのかを明らかにした先行研究もいくつかみられ、社会階層要因、労働市場要因、学校ランク要因、ジェンダー要因などの影響が指摘されている⁽¹⁾が、本調査対象者のなかでフリーターになっている者にも同様の傾向がすでに一昨年の1回目調査でも見られた。

卒業後に2回目のインタビューに応じてくれた者のなかでフリーターとしてカテゴライズできる者は男子3名女子9名で計12名いた（宮本哲史，伊藤涼，相良健，竹内奈央，笹倉佳子，庄山真紀，吉川綾，西澤奈穂子，永原香織，高橋有香，浜野美帆，田辺薫）。うち田辺のみがA高校出身である。高校3年時のインタビュー時点でフリーター希望だった者は4名で（宮本，竹内，田辺，笹倉），他の者は1回目のインタビューの後，何らかの事情で進路変更した者ということになる。では彼ら彼女らはどのような理由でフリーターになったのだろうか。フリーターにいたった要因をまとめてみよう。

12名のなかで最も多かったのは何らかの目的があってフリーターになるケースである。具体的には何かをめざした進学のための準備（学費準備など）としてのフリーターであり，声優・俳優をめざす養成所か専門学校（宮本・竹内）・保育の専門学校（田辺）・調理師学校（笹倉・庄山）・測量技師になるために大学（伊藤）への進学を目的としていた。この6名はいずれも家庭の経済的理由により進学を断念している⁽²⁾。次に多かったのは，いったんは就職したが退職してフリーターにいたっている者で5名（西澤，永原，高橋，浜野，相良）。彼ら彼女らは，2章に詳しいように辞めるまでに厳しい状況に直面していた。

最後に専門学校に進学したが中退しフリーターにいたる者が1名(吉川)いた。

以上のことからフリーターの多くは、一つは経済的な問題から進学を断念せざるをえなかった者、あるいは引き延ばしせざるをえなかった者、二つ目は、一度は進学や就職をしたものの退学・離職している者であることが分かる。つまり移行過程においてなんらかのかたちで移行に失敗した者の受け皿になっているという特徴が見出せる。いずれにしても進学や就職をとってフリーターにいたる場合も家庭状況の厳しさは共通してみられた。

これらの傾向は家庭の経済状況が厳しさや親の階層など不利な社会的背景をもつ者ほどフリーターになるといういくつかの先行研究が明らかにしてきたことと重なっているように見える。ではこうした構造のなかにいる若者たちは実際にどのように移行プロセスを生きているのだろうか。また労働市場がますます二極分化しフレキシブルになっていくなか、フリーターとして生きていくということは青年期から成人期への移行の新しいモデルになりうるのだろうか。本章ではケースを、(1)やりたいことをめざしてフリーターになっている者、(2)バイト体験が進路展望とつながってきている者、(3)バイト先以外のネットワークに特徴が見られる者に類型化し、彼ら彼女らの語りをフリーターになった経緯、家族関係、実際のフリーター体験、ネットワーク、将来の見通しの五つの視点でまとめ、フリーターで生きる若者の移行プロセスについて検討を行なうものである。

2. やりたいことをめざして

1) 進学・養成所資金のためにフリーターへ

自分のやりたいことをめざすためにフリーターを選択し卒業後もその生活が続いていた竹内(女)、笹倉(女)、宮本(男)について見ていくことにしよう。

1回目のインタビューでフリーター選択の理由について、それぞれ「中学の頃から声優になりたいと思っていた。フリーターでお金を貯めて声優になる学校に通うつもり」(竹内)、「将来は俳優です。フリーターでお金を貯めて、それから専門学校とか劇団とか、演劇を勉強するところに入ろうと思います」(宮本)、「将来的には料理の仕事をしたい。店で修行するのは嫌なので、バイ

トしてお金を貯めて調理師学校に」(笹倉)と語っていた。また見通しについては「まずは30万貯めて」(田辺),「1年くらいでどうにかなるんじゃないかと(笹倉),「1, 2年くらいかな」(宮本)と話していた。

このようにフリーター選択の主な理由としては目標の実現の手段として語られている一方で、三人ともそれぞれに家族背景の厳しさ・困難さを抱えていた。竹内は父, 母, 弟と本人の四人家族。父はトラック運転手。母は専業主婦だが内臓疾患があり, ここ4, 5年, 状態が悪くなっている。弟は中学生。家計状況は厳しく高校のときにも養成所のために貯めていた30万を家にいれている。卒業後も不定期に家にお金をいれている。笹倉は, 母と本人の二人暮らし。両親は本人が生まれたばかりの頃に離婚している。上に年の離れたきょうだい三人いるが父に引き取られたため一緒に暮らしていない。母親は一時無職の時期があり, 現在は清掃会社に属し病院の清掃をしている。宮本は母, 弟二人と本人の四人家族だが, それ以上のことについて本人は語ることを拒んでいる。

ここで取り上げる三人はこのように, 「やりたいこと」を明確に持っている⁽³⁾一方で, 親からは経済的な支援だけではなく, 相談に乗ってもらったり励ましてもらするなど感情的な支援も乏しいなかでフリーターに進んでいるのである。

2) 夢にむけて情報収集とアルバイトに追われて (竹内のケース)

卒業後の彼女のフリーター生活は声優になるという夢の実現にむけて情報収集と資金かせぎの毎日である。彼女が声優になるという目標を持ったのは中学生のときだった。以前は声に特徴があるためにいじめられたことから自分の声にコンプレックスがあったが, その声の特徴を生かすことを考えるようになり声優という夢を抱くようになったという。中2の時にオーディションに応募しており, この頃から高校へは行かずフリーターをしながら声優をめざすつもりでいたが親に説得されるかたちで高校に進学した。卒業後はフリーターではなく就職をしてお金を貯め養成所へという道も考えていたが, 出席率が悪かったため就職試験を受けることができなかった。

卒業後のインタビュー(2003年10月)では, すでにアルバイトをしながらオーディションもいくつか受けており, 3月に受けたオーディションの一次審査が通って次の審査の結果待ちという状況にいた。卒業してからのことを次のよう

に話している。

「(高校時代にやっていたアルバイトを) 4月に辞めて6月に今のバイトをはじめ、その2ヶ月間はボーっと暮らしていた。その間に卒業してすぐにオーディションを受けて…… [何もやっていなかった時期っていうのは?] オーディション自体がなくて、まゝ身の回りの整理とか日常生活のうえの部屋の片付けとか」

アルバイト先変更については、以下のように話していた。

「[前にやっていたホームセンターはどうして辞めた?] ちょっと業務が増えたというか……レジのときはレジだけでよかったんですけど、(サービスカウンターを任されるようになり) 返品処理とか電話取次ぎとか配送とか、そういうこまごましたものをやらなければならなくて……アルバイトには重いよと思って」

こうして近所ということと仕事が楽そうだとということでドラッグストアに変更し、オーディションを受けるなど、着々と夢に向かってフリーター生活をスタートさせている。

アルバイトは週5日で、1日5時間半～8時間のペースで月に10万くらいになる。アルバイトについては「おもしろくないですね、まゝ、こんなもんかって感じです。楽なんですね」と話しており、職場の人間関係も特に厳しさもないかわりに、とても居心地がいいというわけでもない様子であった。

アルバイトのある日もない日も8月に購入した自宅のパソコンで声優のオーディションの情報を「毎日チェックしています。インターネット三昧。ねてもさめてもって感じです。バイトに行く前に見て、帰ってきてからも見て」とチェックは欠かせない。

休日は月に一度くらいは友人と買物やカラオケなどに出かけ、カラオケなら地元、買物なら都心方面へとだいたい決まっている。買物は「一人でも行きま

す。服とか小物とかいろいろ買うし」と一人でも行動範囲が比較的広く動いている。友人関係は中学高校時代の友人を中心に幅広い一方で困ったことがあっても、

「誰かに相談ってないんです。今までもなかった。……私は自分で解決できない問題はないと思ってますので。弱い自分を他人には見せたくないっていう気持ちがいっつもあって。むしろ逆に人から相談されることが多くて」

と話しているように一人で問題を解決してやりぬく面をもつ。このような傾向は家族関係でも見られた。月10万の収入のうち半分は家の生活費にし家計を支え、ときには病気がちの母にかわって家事をすることも少なくない。弟の将来についても「経済的に厳しいので……私が弟の大学費用くらい出せば余裕が生まれるかな」と家族の稼ぎ手としての自覚ものぞかせていた。

このように彼女は家計を支えながら夢の実現のためにもオーディションを受けるなど具体的な行動をおこしていた。親戚にたのまれて市議会議員選挙の選挙カーのうぐいす嬢を経験したことなども重なって、声優以外の道も考えるということは「それはない」ときっぱり言いきりプロの声優になるという希望を強く持っていた。オーディション会場で一緒になった養成所に通っていたりプロとしてやっている人たちを目の前にして「もっとやらなくちゃと」思った。家を出て一人暮らしも考えていて実際に不動産屋めぐりをはじめてもおり、経済的にも不利な状況のなかどうにか次のステップに渡っていこうしていた。

3) アルバイト先を転々として (宮本・笹倉のケース)

宮本は俳優、笹倉は小料理屋をもつという夢をそれぞれもち進学準備としてフリーターになった。宮本は卒業後からインタビューを行なった12月末までに少なくとも6箇所のアルバイト先⁽⁴⁾を転々としていた。笹倉は卒業後いくつも面接を受けては落ちるを経て11月末にようやくアルバイトが決まった。このように二人はアルバイトを決めるという段階で困難に直面していた。具体的にどのような困難があったのかをまとめてみよう。

①人間関係のトラブルのなかで転々とするアルバイト先

宮本はインタビュー時の12月には9月からはじめたスポーツジムのインストラクターと7月からはじめたテレアポの派遣の仕事をかけもちしていた。それまでに、高校卒業後すぐにはじめた居酒屋を3日で辞め、次のドラッグストアを3ヶ月で辞めている。その後途中でホストクラブや引越しのアルバイトを経験していた。居酒屋を辞めた理由については次のように話しており、いじめなど職場の人間関係上のトラブルをあげていた。

「すごいいじめにあったんですよ。すごい腹立って……。なんか明らかに年下だからって感じで……。社会の厳しさに比べたらたいしたことないって言われるかもしれないけど、あまりにも度がすぎるって感じたから。(仕事を) 教えてって言ってもそこにメニューあるから自分でやれって返してきて。店長いないときに。店長いるところではいい顔しやがってさぁ」

ドラッグストアについても次のように話している。

「仕事をやるの一生懸命で、あんま人間関係とか考えてなかったんですよ。居酒屋に比べてこれは続けられそうだなって思ってやっていたのに。そのバイトの人たち前から店長の悪口言い合ってたみたいで、店長にも聞こえるように。俺そういうの嫌いだから加わらずにいたら……。話し合わせてれば上手くいったのかもしれないけど。そのうち直接なんかやってくるようになって。なんで俺がとか……。いろいろ考えちゃって」

現在は、午前中3時間週に5日派遣の仕事、午後はスポーツジムへいく。派遣について「30代とかある程度の経験を踏んでいる人たちだから、その分たぶん、……仕事んときはちゃんとしてるし、……休憩中とか話しかけると普通に返してくれて対等に話を聞いてくれる」と話している。かけもちをするなか、月の収入は全部で16万くらいになるという。

②アルバイト先決定の困難

笹倉はインタビューをした1月時点で「バイトを見つけて、お金を貯めてい

る最中です。やっとこさ見つかりました」という状況だった。それまでに面接は6, 7箇所受けておりハローワークや求人雑誌で情報収集をした。面接の様子を次のように話す。

「アルバイト結構大変ですね、普通に落とされたりする。バイトって、いま面接が人事の人じゃないんですよ。人事の人なら一から十までそういう人材のことを把握しているからいいけど、ただの平社員にけなされたくないですね。自分の人生を知っているわけじゃないのに。……あなたみたいな性格ではどこでも仕事なんてできないって」

こうした乱暴な対応に2, 3ヶ月仕事を探すことができなくなった時期もあったという。

彼女は高校を一度退学している。家の事情でアルバイトをしながら高校に通っておりアルバイト先の仕事が休めないことが続いたため、結局卒業間際で退学となった。中退後は求人雑誌をみてアパレル関係で洋服やアクセサリ販売に就職したが、実態は高価なジュエリーの電話販売で、ローンを組ませて高く売りつけるという内容だった。そのためそこは辞め、その後高卒資格を求めて高校に再入学している。こうした経験から仕事選びには条件や仕事の内容などを慎重にみて、面接のときも確認しながら選んでいた。

11月から始めたアルバイトは携帯電話販売店であり、インターネットで募集を見つけた。週5日朝から夜まで拘束されていて、現在の時給は800円で研修あけに900円になる。月15万の収入。現在のアルバイト先も満足しているわけではなく「ろくな会社じゃない。でも一緒に働いている人たちがいい人たちだから続けられている」という。また直営の販売店でないため店のセキュリティーがないなどをあげながら、

「くだらないことでキレたりとか、酔っ払いとかも多くて何度も警察呼んだり。そうすると精神的に耐えられなくなるんですよ……だからもっと違う仕事をして時給が高いところに行ったほうがらくかなと思うんだけど、きっかけが

なくて」

と話しており、現状に満足しているわけではなかった。そのため辞めたいとも思いつつ、

「面接のときにおかしいなって思ったこともあるんだけど、そこで断るより、働いてからの方が……やっと見つけた仕事だから、ちょっとは続けようって思っ」

と話しており、あれだけ仕事の内容や条件に慎重だったものの半年間アルバイトが見つからない状況での体験は本人にとっては大変厳しいものだったことがうかがえる。

③将来の夢より目の前の生活に追われるなかで

二人とも収入のなかから生活費として家にいくらかいれている。特に笹倉は母親も仕事をしていない時期があっただけではなく休みなく重労働をする母親を気遣うなど、家族のなかでは経済的支援のみならず感情面でも「子ども」である笹倉が担っていた。

休日については、笹倉は精神的体力的な疲労のため「家でぼーとしたりとか、好きなゲームしたりとか」一人で過ごすことが多い。友人は中退前の高校時代の友人や再入学後の友人が多く、地元で買物などを楽しむこともあるという。宮本は土日が休みで映画を観に行ったり友人と会って話をする事が多く、次のように話していた。

「基本的に話すのが好きで、なんか表現するのが好きなんです。電話とかじゃ表情までわかんないじゃないですか、だから会って顔見て、いろいろ話したい」

また暖かい時期は高校のときの先輩と公園などで演劇の練習をすることもあった。「常に映画観たりとかして感情豊かにしてないと、上手く表現できない」

と、演劇に直接かかわる活動は活発ではないながらも意識して過ごしている。こうしたなか、宮本は演劇の夢を持ちつづける一方で「(養成所は) ちょっと遠い話だね。1年後とか」「家族とかできたらそれはそれで考えるけど、今はとにかく、生活をしてって」と話しており、未来の見通しよりも現実の生活をどうやりくりしていくかに関心が向いている。

笹倉も専門学校で資格を取る希望を抱きつづけるが、100万以上かかる学費を貯めるためには「3年以上働かないと」と、やはり先の見通しよりもお金をどうするかが本人にとっては重要な問題となっている。さらに「金を貯めたら専門学校とかいっている場合じゃないんだ。とりあえずいま住んでいるところを脱出したい」と話していて、専門学校に行く具体的な見通しや準備をもっているわけではなかった。現在は都営住宅に住んでいるが近所づきあいが良好ではないため、引越しを考えている。また母親の面倒は自分が見なければならぬと思っており、余計に自分のためにお金をつかえる状況にないのが現状だ。

宮本と笹倉は、バイト先を固定するまでに数ヶ月かかっており、やっと安定しても、今の生活をどうやりくりしていくかに追われ、将来の見通しが具体化していかない傾向が見出せる。一方、竹内はバイト以外の時間を進学準備のための情報収集にあてるなど二人に比べればいくらか具体的に目標にむかっているように見える。しかし、三人とも収入は10数万円で、さらにそこから生活費を出しており、客観的条件をふまえると順調に見える竹内でさえも今後は不透明な状況といえるだろう。

3. アルバイト体験から将来展望へ (田辺, 伊藤)

1) 家庭の事情で進学を断念しフリーターへ

ここでは、進学を希望してのフリーターがアルバイト体験を通して将来展望に変化が見られた田辺(女)と伊藤(男)について述べる。

田辺は高校3年時には保育の専門学校進学を希望していたが、経済的理由により断念した事情を次のように話していた。

「(フリーターを決めたのは) 9月くらいに。なんかそうなりそうな雰囲気

はあったんですけど、あたしは嫌だったんで、専門に行くって言っていたんですけど。……まぁ家庭の事情で進学できなくて。親に考えなくていいって言われてて、(でも)一番上のお兄ちゃんに『フリーターやってみないか』って言われて」(2002年11月)

田辺の家は父が小さな工務店⁽⁵⁾を経営しており母が事務をしている。兄が二人と妹がおり、兄は大学中退しフリーターとして家の仕事を手伝っていた。田辺自身も高校のときのバイト代をほぼ全額家にいれている状態だった。そうした事情をふまえて「本当にやりたいことかどうか1年自由に考えてみるのもよいかと思った」とフリーターを選択している。

伊藤は、父はトラック運転手で母はパート、定時制に通う姉との四人家族である。進路について高校在学中のインタビュー(2002年12月)では測量の仕事につくために勉強ができる短期大学に推薦希望を出していた。しかし父親に反対され、1年浪人しながらお金を貯めるためにフリーターを選択した⁽⁶⁾。

このように二人とも家庭の事情でそれぞれ進学をひとまず断念し、学費を自分で稼ぐという理由でフリーターになっていた。当面1年がんばってみるとスタートしたフリーター生活は本人たちにとっていかなる体験だったのだろうか。

2) アルバイト先の就労体験から将来展望へ

伊藤は高校卒業後「近めのところで面接」したバラエティストアで週に5～6日アルバイトをしている。そのほかに日曜日には高校時代にやっていたファミリーレストランでも「くされ縁で辞められない」とアルバイトに出かける生活を送っていた。バラエティストアは「人がいないから」ということで即採用になる。

このバラエティストアは、食品をメインに雑貨などを安く販売している店で、店舗を拡大中であり毎週どこかで新規オープンをしている。社員は5店舗くらいを担当し店にはほとんど顔を出さないという。そのためアルバイトであるにもかかわらず伊藤は商品管理など任されている。「時給も安いし仕事の量も多い」ため「従業員の入れ替わりが激しい」ことから労働条件は良好とはいえないことが想像されるが、伊藤は自分が仕事を任されることについて「好き勝

手やれるから楽しいしやりやすい」と話している。社員がいないから気楽というだけでなく、次の語りからは仕事の内容そのものに面白さを感じている様子がうかがえた。

「(商品名が見えないような陳列では) 見えるように向きを変える。読みやすいようにとか。そういうの考えていると、やっぱり商品の流れがぜんぜん違う。そういうのを考えてやって。社員もそこまで求めるんですよ。バイトだからみたいなそういうのは関係なしに」

将来イメージは測量の仕事から次のように変化を見せている。

「1年後はきっと就職してるのかな、もしちゃんとやりたいことが決まって、(たとえば) 今だったら、自分のお店を持ちたいとか、スーパーとかそういうのをやってみたいと思っているから、10年後だったら自分でいろいろ経験つんで店を持てたらいいな。1年後はどっかで勉強してるか、就職してるか」
(2004年2月)

こうした変化の背景には仕事内容だけではなく、アルバイト先の間人間関係も良好であることや高校時代のバレーボール部の仲間の存在、地元のママさんバレーチームの練習に参加するなど地元を中心に良好なネットワークがあることも支えになっていると考えられる。

卒業後すぐに新しいアルバイト先での生活が安定した伊藤とは異なり、田辺は卒業後しばらくは面接をしては辞めを繰り返していた。その理由について以下のように話す。

「私、学校とかに通ってないから、あんまり友だちと会う機会がないから、ストレスのはけ口がないじゃないですか。だからあんまり耐える生活したくないなと思って」(2003年10月)

彼女は「耐えうる」アルバイト先を求めて、たとえば「弁当屋のおやじはものすごく気持ち悪くて。言葉のセクハラだったねあれは」など少しでも不快感をもてば、いさぎよく次のアルバイトを探していた。

インタビューをした時期にはコンビニエンスストアと介護のアルバイトをしており、しばらくは続けられそうだと話していた。どちらもタウンワークなど無料の求人雑誌で見つけ、「近い」「時給がいい」という理由で面接に出かけている。コンビには週4、5日時給は800円、介護は週に3日時給が1500円。1日にかけてもちする日もあるため両方あわせて週に4、5日働いている。介護は一人暮らしの障害者の介護で、具体的には食事、掃除洗濯、着替え、車椅子の移動、トイレの介助まですべて行なう⁽⁷⁾。

アルバイトについては、

「(コンビニのレジでは) おばちゃんって何でも知っているじゃないですか。結婚もして出産もしていろいろ人生乗り越えて。そういう人と仕事していると楽しいなと思いますね」

「(介護については) 介護しているひとが……『心の詩』って本を出すみたいで。そういうの読ませてもらったりすると、障害者でも心はちゃんとあるんだなとか思って。そういうのでは勉強になるなと思って」

と前向きにアルバイト体験をとらえていた。将来についても保育関係の学校へという気持ちもまだもつ一方、次のような見通しをもちはじめていた。

「最近迷ってて。保育もやりたいんですけど、このまま介護の勉強してもいいかなと思って。その人の介護を3年くらいやってれば、介護をやって介護の勉強を通信ですれば(介護実習免除で)資格が取れるらしいんですよ」

ほかにも通信でいろいろな資格が取れることを最近知り、興味関心が広がってきてもいた。しかし「1年後どうなっていたいか」という質問には「生活を自由に動かしたい。今も自由だけど、今は家にお金いれなくちゃいけないから、

きつい言い方だけど拘束されている」という感覚もあり、実際、バイト代も家計にまわってしまっている状況である。田辺自身は家族経営とは離れた場所でアルバイトをしているが、実際の生活では家計を支える柱の一人でもある。またきょうだいは仲がよく近所の体育館でバドミントンをするなど、良い面でも悪い面でも家族に埋め込まれた生活を送っているという側面が強い。

田辺は家庭の経済的状況は厳しいものの愚痴は母親に聞いてもらい、休日は兄たちと過ごすという面では家族の感情的支援はまったくない状況ではない。また友人についても、そこに行けば誰かがいるような「場所」はないものの、「私が集合かけるかんじです。中学の友だちは同じ市にいるじゃないですか。だから会おうと思えばすぐ会える」という。しかしその一方で「学校に行っていないから」友人に会えない分、はけ口がないとも話していた。A高校はほとんどの生徒が進学するために孤立感を持っている可能性もあるが、フリーターであるということは、不安定な就労状況や社会的ポジションゆえに生活するうえでの基盤を見出しにくいことの象徴ともいえるだろう⁽⁸⁾。

いずれにしても田辺も伊藤も今後、フリーター生活を抜けることができるかどうか、自分の希望通りに進むことができるのかは不透明な側面も強いが、当初は「近さ」「時給」などの条件重視で選んだアルバイト先で将来展望とつながるアルバイト体験をしている点に共通点が見られた。

4. 家族や職場以外の場に支えられて

1) 就職・進学から離脱して

これまで述べてきた者たちは、アルバイト先や家族以外に中学や高校時代の友人、特に「地元」の仲間と休日を過ごすことでフリーター生活を支えている面を持っていた。フリーターにとってこうしたネットワークの有無はどのような意味をもつのだろうか。

インタビューからは、一度就職や進学をしたものの何らかの事情で辞めた後にフリーター生活に入っている者に、家族や職場以外の場についての言及が多く見られた。特に女性に顕著であった⁽⁹⁾。彼女たちは進学にしろ就職にしろ、そこを離れるまでに相当の葛藤・苦悩に直面していて、それを乗り越える際に

そうした仲間関係が大きな支えになっていた。以下では専門学校退学後フリーターになっている吉川（女）と就職退職後フリーターになっている西澤（女）を取り上げ、それぞれがもつネットワークがどのような場であり、彼女たちにとってどのような意味をもつものなのかを検討することにしよう。

2) 地元ネットワーク（吉川）

吉川は保育士志望で、医療も学べ保育の資格も取れるという専門学校に一度進学した。しかし実際は、「保育の授業が全然なくて、それで医療ばかりで」「先生に聞いたりしても態度が曖昧とかで」といういくつかの理由で9月頃に退学している⁽⁴⁰⁾。

家族は母と妹と本人の三人。姉がいるが結婚していてすでに家を出ている。両親は離婚していて、父親は小さな会社を経営しており家にお金をいれている。母は専業主婦。学費は両親が出していた。

退学後は9月から家の近くのスーパー内に店舗をかまえていた花屋でバイトをはじめますが11月には辞めている。

「なんか本社に異動になって、本社が近いといえば近いんですけど（少し遠くて）……なんか花屋じゃなくて工場だったんですよ。それでおばさんだけで、いやで辞めちゃった」

その後、高校時代の同級生のエミと一緒に日給の食品倉庫のアルバイトをはじめますが、インタビューをした2004年1月の時点では「ぜんぜんやってない」状況だった。

花屋のアルバイトは月に5万円程度、日給のアルバイトは1日6,000円ほどで「知らないうちになんとかつかってた」とつかい道は明確ではない。携帯料金などは親が支払っていて「結構お金に困ったらくれる」。また「知らないうちに」つかうお金は、買物につかうことが多く「親と出かけるときは一切自分は財布もっていかなくて」と、今まで見てきたフリーターの者と比べると家計に余裕が見られた。

彼女の生活は、アルバイトというよりは高校のクラスの友人との時間が主要

な時間になっていた。アルバイトを一緒にやっていたエミと連絡をとるほかに、

「(休みの日は)遊びに行ったりしてますね。岸田とか志保とか、エミ。カラオケとか、最近。オール(ナイト)しました。京子とは毎日連絡とっている」

と高校時代のクラスメイトと頻繁に会っている様子うかがえる。彼女たちは「いっぱいお泊りしている」「この前もオール(ナイト)だった」「カラオケもいった」という具合に頻繁に往き来をしており、「彼氏」や「元彼」のを中心としたおしゃべりを楽しむ関係である。

遊ぶときは「何か地元の駅前が多いかな。自転車で」と、地元が拠点になっている一方で、買物は同じメンバーで池袋や北千住、渋谷まで足を運び、「こういう遠出をするときは絶対みんな1万以上は持っていく」。

地元でオールするときは「大勢いるから平気」だが、「1回歌舞伎町でオールしたときに……そのときはでもやっぱり怖かったですね。……怖いですが、歌舞伎町は」と話している。このことから都心などは「遠く」、地元は安心という認識が垣間見られる。また母親同士で仲がよく中学のときは家族ぐるみで出かけていたなど地元密着のネットワークのなかで生きている様子うかがえた。

将来について吉川は、当初は保育士志望だったが、1年後あるいは5年後について「うーん、わかんない。たぶんフリーター。働いていて欲しい」と話していて、具体的には地元でオープン予定の「大手スーパーの花屋さんでエミと一緒に働きたい」という希望をもっている。10年後については「ぜんぜんわかんない。結婚しているかな、結婚したら専業主婦やっている。結婚したら絶対に働きたくない」と話し、保育士については「よかったら来年また受験するかもしれないけど、でもあんまりなんか働いた方がいいかなとか思ってきた」と将来展望も変化してきている。

両親は吉川がアルバイトもしていないことについて、父は「働かないでもいいよ」と、母は「焦らずゆっくり見つけな」といっており、経済的支援も受け

ていた。また高校時代の友人を中心に地元のなかに強いネットワークがあって、そこを拠点にしながら生活をしている。こうした背景が吉川を「何かしなくては」という焦りとは異なって、今の地元で仲間と一緒にいるという生活の延長に将来イメージを抱くようになってきているのである。

3) ビジュアル系バンド

次は退職後フリーターをしている西澤について見ていくことにしよう。彼女は父、母、妹の四大家族。高校時代は手話に興味がある一方で、バンドなど音楽関係のスタッフになることも選択肢にいれており専門学校を希望していたが、いろいろ考えた末に叔父の会社へ縁故就職した。仕事の合間に手話サークルに行きながらお金を貯めて音楽関係の仕事につくことを希望し、バンドのスタッフもしようとしていた。

「でもそういう時間もないし、会社にいったら。スタッフやりながら機材の勉強とかもしたかったんだけど、ライブ自体に間に合わないから、ライブにいったら無駄みたいなかんじだったから。それじゃ意味ないなと思って」

と、当初自分がイメージしていた生活と現実にギャップがあったことを語っている。

仕事を辞める日までには精神的にかなり追い詰められていた様子がかげえた⁽¹¹⁾。退職してからも朝4時くらいに目がさめてしまうなど精神的に張り詰めた状況が続いていたが、高校時代から「1日中一緒にいる」と話すほど仲がよかった庄山が「(彼女は)フリーターなんですよ。だからちょくちょくうちに遊びにきてくれたり」していた。しばらくして落ちついたところに同じように高校時代の友人である浜野も「うちに来るようになった」。その後は三人でライブに出かけるようになった⁽¹²⁾。

庄山は料理をするのが好きだからと調理師の専門学校を希望していたものの、学費の工面が難しいためにどうするか迷いながらも、やはりお金の工面ができなかったことと、料理の世界は下積みもあって厳しいだろうし、自分だけでも「何料理がやりたいとかもないし」といろいろ考えて、「とりあえず1年考えよ

うと」思いフリーターになっている。母と二人家族で、母は水商売をしている。彼女は、現在は近所の弁当屋で週6日アルバイトをし、月に19万くらいの収入があるが、卒業後しばらくはできるだけ稼げるようにと夜は中華料理屋やキャバクラに勤めていた時期もあり、キャバクラは西澤と一緒に始めている。

現在は「(料理という)自分のやりたいこともできていてパートのおばさんたちもいい人だから」満足をしてるが、「自分は頑張っているのに、頑張っっていわれるのがすごいいやで、なんで私はこんなに頑張っているのに」頑張れがんばれといわれなければならないのかと重荷になって辞めることを考えたこともあった。庄山が追い詰められているときは、西澤が話し相手になり今にいたっている。

浜野の家庭は母子家庭で、母親は昔化粧品会社に勤めておりメイクで賞をもらっている。そうした母親の影響で小さい頃から化粧道具をいじっていた。母子家庭ということで金銭的に専門学校進学が難しく、卒業後のインタビュー時(2004年2月)には美容室に就職しながら通信で資格を取る方向で動いているところだった⁽¹³⁾。

「仕事はきついのは覚悟していたんですよ、人間関係とかも。でもきついって言うよりファミリーチックなんですよ、お店自体が。で、余計なことまでずけずけ入ってこられるのがすごく辛くて、最近も悩んでいるんですけど。手も荒れててドクターストップとかもかかってて。……いろいろ考えてて辞めたいなって。今日が決断の日だったんですよ……で、そうやって辞めたいって気持ちもあるけど、教えてくれててそれで辞めるかたちで裏切りたくないっていう気持ちもあるし……もう少し頑張ってみようかなって」

しかしその後退職し、西澤と庄山とライブ通いを中心とした生活を送っている。もともと高校のときに彼女たちは週3日のペースでライブ通いをしており、西澤が浜野に音楽を聴かせたことをきっかけに浜野も加わるようになった。そのためライブ通いは浜野が退職する前からしており、次のように話していた。

「バンドのライブとかにもよく行くんですけど、スタッフとしてメイクしていくのも一つの勉強の手段かなって思っていたりとかもしてて」

西澤にとってはライブがうつ状態から脱出する大きなきっかけだったことを次のように話している。

「ライブに行ったんですよ。それまではどうでもいいかんじだったんですけど。なんかこう、いろんなバンドが出るじゃないですか。バンドごとで友だちがいるんですよ。で、一番友だちの多いバンド入ったときにみんなすごい、久しぶりーとかになって、あ、ここだ！ 居場所はここだって。すごい癒されて。そのときはわけわかんなくて泣いて」

これをきっかけに、現在平日の昼間は親の仕事を手伝ったり、ライブの衣装を作って過ごしており、基本的にはライブ関連の活動を中心に毎日を送っているといえるだろう。

将来については西澤と庄山は次のように話していた。

「ライブハウスとかで働きたいんだけど、そうすると時給が500円とかだから。それなら自分のこうお金のいっぱいもらえるところで働いてスタッフやってもいいかなって」

「ライブハウスを経営したい。でも子どもも欲しいな」(西澤)

「結婚が向いているんじゃないかなって。……ばりばり仕事をするより結婚してこういう時間にパートしてっていうほうが向いているかなと思って。23歳のバイトしている人が今彼と同棲中で幸せそうで」「将来はパートしながら専業主婦」(庄山)

西澤が当初やりたいと考えていた音楽関係の仕事を模索しようとしはじめているのに対して、庄山は調理師になるという希望は薄れ「専業主婦」へと将来

展望が変化していた。浜野を加えた三人は、いずれも職場やアルバイト先でのプレッシャーから相当精神的に追いつめられていたが、ビジュアル系バンドのライブ通いという共通の居場所を通して互いに支え合っていた。またそうした居場所があることで、一度は「どうでもいい」と感じていた将来のことについても動きはじめるのを可能にしている点は重要だろう。

進学就職離脱者のなかで唯一の男性である相良は、岸田と結婚を前提に互いの家を往き来するスタイルで生活をしているが、現在は岸田がアルバイトに出かけ相良は失業中。岸田のアルバイトの送り迎え以外は家にいることが多く、肩身の狭い思いをしながら次のアルバイトを探しているところだった。高校時代や地元の友人などとの往き来などは、2回目のインタビューでは何も語られなかった。こうした生活スタイルは上述の女性グループとは大きく異なっている。このような両者の比較からは、地域にしろライブにしろ、何らかの居場所の存在は不安定なフリーター生活を支える重要なファクターであることがうかがえる。

5. まとめ

以上見てきたように、フリーターの実際の生活は非常に多様である。しかしいくつかの共通する傾向も見られた。まず、高校卒業時点でフリーターを希望していた者は「やりたいこと」を語りながらも、その背景には家庭の経済的理由が存在し進学を断念していた⁽⁴⁾。またいったんは進学や就職をした者も離脱後フリーターになっていることから、なんらかの事情で移行過程に困難がある場合の受け皿としてフリーターがあることが分かる。このことは逆にいえば、他に受け皿が乏しいことをあらわしている。

次に、家族内の彼ら彼女らのポジションを見てみると、吉川以外はいずれもアルバイト代をいくらか家計にいれており、親に養われている「子ども」というよりはその家の「稼ぎ手」の一部分としての地位にあるという共通点が見られた。経済面だけではなく、進路についての相談など感情的な支援を「子ども」として親から受けているケースはほとんど見られなかっただけでなく、家事をしたり親の健康を気遣うなど親に対して感情的な支援をする側にいる者も見

られた（たとえば竹内や笹倉）。

一家の「稼ぎ手」であり、目的をもってフリーターとなった彼ら彼女らのアルバイト収入は10万から働きづめの状態でやっと20万に届くかどうか。その中から家計を負担しており、目標だった学費や一人で暮らす資金をつくるには厳しい。またそもそもアルバイトがなかなか見つからない状況も見られた。こうしたなかフリーターをしながら「一人前になる」ことそのものが困難であるという実態が浮き彫りになっている。

このように、社会的に不利な状況、経済的に厳しい状況は共通してみられたが、その一方で、そうした厳しい状況をどうにか乗り越えようとしている若者の姿も見られた。たとえば伊藤と田辺はアルバイト先の仕事そのものに興味を持つようになり将来展望につなげていた。また、吉川、西澤、庄山、浜野は地元やライブを拠点としたネットワークの中で自分を取り戻し、あるいは将来に向かってまた一步を踏み出そうとしており、その集団内で生きることによって若者の移行をめぐる困難から抜け出す可能性も感じられた。しかし「パートしながら専業主婦」に象徴されるように、伝統的なジェンダー構造を変革するのではなくそこに乗っかっていこうとする傾向も見られた。フリーターが若者の移行過程においてどのような期間と機会を提供することになるのかは今後、検討すべき大きな課題である。

もう一つ残された課題としてジェンダーの問題がある。たとえば家事を担うことや親の健康を気遣うなどは特に女性に見られる傾向であり、「稼ぎ手」であると同時に「家事は女性が担う」というジェンダー要因が働いていると推測することが可能である。こうしたジェンダー要因は、たとえば吉川の、両親に「働かないでもいいよ」「焦らずゆっくりと見つけな」といわれながらフリーターをしているケースのように、家庭の経済状況が緊迫していない場合に顕著である。さらに女性に見られる傾向としては、地元つながり、ライブつながりのようなグループを形成しながらフリーター生活を送っている点である。これらのグループを形成していたのはいずれもB高校出身の女性であった。これはB高校の教員集団が意識的に人間関係づくりをしていた影響もあると考えられるが、同時にジェンダーによる差異あるいは女性固有に見られる特徴であるのかは今

後の検討課題としたい⁽¹⁵⁾。

註

- (1) たとえば、荻谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也「進路未決定の構造—高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37巻, 1997年, 荻谷剛彦・濱中義隆・千葉勝吾・山口一雄・筒井美紀・大島真夫・新谷周平「ポスト選抜社会の進路分化と進路指導」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻, 2001年, 日本労働研究機構『進路決定をめぐる高校生の意識と行動—高卒フリーター増加の実態と背景—』研究調査報告書No.138, 2000年, 本田由紀「トランジションという観点からみたフリーター」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第55巻第2号, 2004年など。
- (2) ただし伊藤は四大でないなら浪人するよう親に反対された経緯もあった。詳細は5章を参照。
- (3) 日本労働研究機構『フリーターの意識と実態—97人のヒアリング結果より—』（研究調査報告書No.136, 2000年）では、フリーターには1モラトリアム型（①離学モラトリアム型②離職モラトリアム型）・2夢追求型（③芸能志向型④職人・フリーランス型）・3やむを得ず型（⑤正規雇用志向型⑥期間限定型⑦プライベート・トラブル型）という類型を用いてフリーターの意識と実態を分析している。「やりたいことが明確である」という点では「夢追求型」ともいえるが、どちらかというところ「学費を貯めるためにひとまず」という点では「期間限定型」に近いといえる。
- (4) インタビューで語られた限りの回数であり、実際はそれより多い可能性もある。
- (5) 本人によれば「なんか工事したりしているんですけど、何の工事かわからない」。
- (6) 伊藤が大学進学を断念する事情については5章を参照。卒業後のインタビューでは自らを「フリーター」と位置付けていた。
- (7) 本人によれば、介護資格は特に必要なく、障害者数名で協同生活をしながら事業をしており、そこになんらかの助成金がおりにいる仕組みだという。
- (8) 人間関係についての認識の仕方に男女で差が見られるという可能性もあり、ジェンダー要因が人間関係を形成する仕方や志向にどのような影響があるのかなど今後の検討課題としたい。
- (9) フリーターになる率が女性に多いことが反映している可能性もあり、こうしたネットワークを形成することが女性に見られる特徴かはここでは判断ができない。
- (10) 辞める経緯の詳細は3章を参照。
- (11) 退社の経緯については2章を参照。
- (12) 高校時代に西澤が「私インディーズっているんだけどいって見ない？」と二人を誘ったのがきっかけ。

- (13) 家庭の事情で専門学校進学を断念した経緯は2章で詳しく扱っている。
- (14) ただし、2回目のインタビューができなかった者のなかには、経済的な理由とは別に就職希望だが未履修などの関係で就職試験が受けられなかった者もいた。
- (15) 本論で扱った以外にも「アニメ」グループも存在していたが、それについてはインタビューがとれていなかったため今回は扱わなかった。こうしたサブカルチャーとの関連で形成されているグループが移行過程においてどのような影響を与えているのかも今後の調査課題である。

第2章 正規就職者の進路選択と就労・離職の現実

宮島基・新井清二

1. はじめに

本章では高校卒業時に正規就職を進路として選択した人たちの動向について検討を行う。こんにち、フリーター問題や正規就職者の早期離職などが指摘されているが、調査対象とした就職者の分析を通して、こんにちの高卒正規就職者が具体的にいかなる状況にあるのかを明らかにすることが本章のねらいである。昨年の調査報告で明らかにしたように、例えば都内の高卒者求人数がこの10年間で約10分の1にまで減少しているなど、高卒就職者をとりまく環境は大きく変化している。今回の第2回調査に応じてくれた対象者の中で、高卒時に少なくとも一旦は正規就職した者は12名いたが、彼ら彼女ら⁽¹⁾は具体的にどのようなかたちで就職をし、実際にどのような就労生活を送っているのだろうか。

本章での分析は具体的には二つの視点から行われている。一つは高校卒業段階で彼ら彼女らが正規就職という進路をどのように捉え、実際にどのような経緯で就職していったのかということ、もう一つは実際の就労の実態を彼ら彼女ら自身がどのように捉えているのかである。今回の分析対象とした12名のインタビューからは、高卒正規就職者の就職経緯、仕事意識、そして高卒者就労の状況について、いくつもの特徴を指摘することができる。それらを本人の言葉を通して描き出すことで、こんにちの高卒就職者の進路選択意識の特徴と高卒者労働市場の実情について検討を試みたい。

2. 就職という進路選択

本節では高校卒業時の進路選択に際して、彼ら彼女らがどのような経緯で就職という進路を選択し、どのようなかたちで労働市場に参入していったのかについて具体的に描き出すことを主眼とする。ここでは進路選択時の意識から就労の継続・離職の原因を分析することが目的ではなく、あくまで彼ら彼女らが就職に際して仕事に何を求め、何に直面していたのかということを経験者の言葉からとらえたい。なお、本節に関しては前回のインタビュー記録も主な分析対象になっている。

1) 「やりたいこと」と進路選択

はじめに高校在学中の進路選択に際して、自分の卒業後の進路を就職と決めたプロセスについてみていくことにする。その際、調査対象者の高校3年時のインタビューについて確認しておきたいのは、調査グループが以前分析をした「自分のやりたいことのあり／なし」、及び「やりたいことと関係のある進路／関係のない進路」と「就職／非就職（進学＋浪人＋フリーター）」との関係である。そこで明らかになったのは、就職者のほとんどは「やりたいこと」が「特になし」か、あるいは「やりたいこと」があった場合でも自分の「やりたいこと」を基準に仕事を選んだのではなく、むしろ「やりたいこと」とは「無関係」に就職を決めているという傾向であった⁽²⁾。具体的には、前回のインタビュー調査時点での就職内定者及び希望者18名についてみると、自分の「やりたいこと」について言及しながら実際に就職を決定していた8名のうち、「やりたいこと」に関係した仕事についてとみられる者は1名であり、残りの7名は「やりたいこと」と仕事内容の間に明確な関係がないこと、またそもそも「やりたいこと」は「特になかった」という就職内定・希望者が10名いた。つまり、一般的な言説においては「やりたいこと」の欠如や、あるいは逆に「やりたいこと」に固執することで生じた現実とのギャップが、正規就職者の減少や早期離職者を生み出しているといわれる⁽³⁾のに対して、高卒就職者の実際の意識としては、むしろ「やりたいこと」との関係があまり明確でない者の方が着実に就職をしているのである。逆に「やりたいこと」に沿って進路を選んだ者の大多数は進学であり、また「やりたいこと」に向けての進学費用を貯める

ためなどからフリーターを選ぶ者も少なくなかった。以上を踏まえた上で本節では、そうした彼ら彼女らの進路選択の傾向を分析し、より具体的に彼ら彼女らが求めたものについて検討を試みたい。

①「やりたいこと」と就職

B高校の手塚豊（中規模印刷会社・作業員）は、就職することを決めた経緯について次のように述べている。彼はビル掃除などの清掃業にも興味を持ちながら、1社目に染色会社、2社目に印刷会社を受けてともに失敗、その後10月頃には3社目の印刷会社に就職が決まった。最終的に今の会社を選んだ理由について次のように述べている。

「いや、えっと、なんて出したんだろ？ 最初は印刷会社っていうあれでもなかったんだけど、いや別にこれだっていうのではなかったんだけど。自分でもよく覚えてないな。最初、染色会社って言って、なんか布を染めるような、そこにしようと思ったんですけど、いろいろ事情があってそこはやめたんですよ。学校の先生側からちょっと、そういう会社がちょっと、悪いっていう。で、どういう理由でか印刷会社になったんです。うん、印刷会社でもいいかなと思って、働ければ」

このように手塚は、必ずしも印刷会社に就職をしてやりたい仕事があるというイメージを持って今の会社に就職したわけではない。そもそも進路として就職を選択した経緯については次のように述べている。

「進路は就職だっていうのは決めたのは？ えっと、それはもう最初から決めてましたよ。もう、入る前っていうか、中学校のころからずっと。俺の場合はそんな、もうこの学校を出て、また勉強をしたいっていう感じのキャラクターでもないし、頭よくないし、もう勉強はいいかな、と思って」

彼は進路決定に関して「やりたいこと」を明確に持たず、そのため先に述べたように仕事内容との間に明確な関係が見出せない顕著なケースといえる。そ

の一方、彼に関して指摘できるもう一つの点は、高校を出たら就職すること自体を早くから自分の中で決めていたということである。

こうした進路決定の仕方は、弁当惣菜販売店への就職が決まったB高校の内田玲奈（弁当製造販売・製造及び販売）にも見られる。内田は両親とも「ちょっと体をこわして」いるため働いておらず、卒業後は彼女が家計を支えることも考えていた。父親は様々な職業に就いてきたが、母親は主婦である。その親は彼女に対して「自分の人生なんだから好きにやれ」といっているという。彼女も自分が就職を希望すること、そして自分の就職先を選ぶ段階について次のように述べている。

「〔就職志望はいつから?〕3年からだよ、先生に話をされてから。大体2, 3年のあたりからですかね。〔それまでは進学を考えていた?〕いやもう就職しかないかなと思って就職を選んで。大学に行っても多分お金があればだからって。……なりゆきだな、と思うんですけど。どれに就きたいかとかいうのがなくて、先生に勧められて、ああ良いんじゃないかなって思って受けたんです」

また内田は就職先を選ぶ際には進路指導室に通い、仲の良かった三人の友達とともに就職試験を受けたという。その時の様子について、同じ会社に就職した永原香織（弁当製造販売・製造）も次のように述べている。

「就職資料室のバインダーを見て、先生が『こんなのはどう?』って指して。会社は同じだけど、店舗が違うからみんなで受けてみたら、ってことで。先生から勧められて、私たちは『あ、はい』みたいな」

このように彼女の場合にも、手塚と同様に自分の「やりたいこと」と仕事内容との間には明確な関係がみられないが、就職か進学かというレベルでの進路選択に関しては、はじめから就職を希望していたのである。それではこの〈はじめから就職希望〉でありながら、「やりたいこと」を明確に語らない、ある

いは「やりたいこと」を意識していないように見える彼ら彼女らは、なぜ他の進路ではなく就職を選んでいるのであろうか。彼ら彼女らにとって「就職すること」はどのような意味を持つものとして受けとめられているのだろうか。

②「一人前になる」ための就職

考えられる可能性としては、家計援助のための就職という進路選択があり得るだろう。実際に今回の分析対象となった人たちの中には生活保護家庭も含まれており、仕事内容を選ぶよりも給料を得るために就職が先決という進路決定スタイルが想定できる。また確かに彼ら彼女らの進路選択には「あまり家にお金とか負担かけたくなくて」というような言葉もみられ、進路決定の際の経済的要因は一つの特徴として指摘することができる。

だが彼ら彼女らにみられるのは、単純に「お金のため」だけの就職ではない。この点に関して注目したいのは5年後、10年後の将来像についてたずねている2回目のインタビューの中で表れてきた、自立に関する言葉である。まず、自立を経済的な自活とみなしている内田のケースをみてみよう。彼女は先にみたように、1回目のインタビューではつきたい仕事を「なりゆき」と述べ、その後の2回目のインタビューの中では次のように述べている。

「でもやっぱり、一人暮らししないわけにはいかないですからねえ。自立できるようにならないとまずい。いつまでも親に頼っていただけませんかからねえ。ずっといるわけじゃないんで、親も。〔逆に内田さんが一人暮らし始めたらお父さんとお母さんが心配、とか〕そうですね。親ですよ、問題は。〔一人暮らしをしたいと思ったのはいつ頃?〕高1ぐらいだった。結構自立心高いほうなんです。まあ、うすうすは中学のときから、高校卒業して働いたら一人暮らししたいとか思っていましたけどね」

このように、内田にみられるのは家族から離れて暮らすという自立像である。そして職種については「なりゆき」と述べているように、仕事の内容を問うよりも仕事につくということ、それによって両親に頼らなくなることが彼女にとっては重要であると指摘できるだろう。この点は同じくB高校の高橋有香（化粧

品製造・製造)のケースに、より具体的なかたちで表れている。彼女は家族や親戚から大学や専門学校に進学することを勧められていたが、「お金作るっていつでも限度があるでしょう、て怒って」と次のように述べている。

「私が大学とか専門学校行きたいっていったら、絶対、金銭面で無理じゃないですか。だから、じゃあ別に、やりたいことがあったわけでもないし。専門学校行ったとしたらやりたいこともあったにはあったけど、それも別に続くかどうかわからないし、……親にお金払ってもらおうと、今も、高校もそうなんですけども、払ってやっているんだから行け、みたいなそういうのがいやで。だから進学はあきらめて」

専門学校に進むことにも興味があったが、同じく進学を希望している妹と弟にお金がかかるため、進学はきょうだいに譲り、自分は就職を選んだという。その上で就職をすることについて次のように述べている。

「就職しちゃえば親も一人の大人として見てくれるじゃないですか。だから、お金入れるし。そういう面で、お金ももらえるし、保険もキチンとしっかりしているんだったら、学校の斡旋を受けて社会人になった方がいいかなと思って」

このように、彼女たちの言葉にみられる就職という進路は、自分の「やりたいこと」を実現するために選ぶものではなく、「大人として見てもらえる」ためのステップとして位置づけられているのである。つまり彼女たちが持っているのは、就職をすることによって「払ってやっているんだからいけ」といつまでも親に指図される立場から離れ、一人前と見られるようになれるという意識である。彼女たちにとって仕事とは、その中身によって自分の「やりたいこと」よりも、就職をして一人前になるステップとして意識されているのである。

つまり彼ら彼女らに共通してみられるのは、学校を卒業してまず一人前になるために就職をすることを重視し、職種や仕事内容にこだわるのではなく自分の生活を築いていくことを仕事の意義ととらえる自立のあり方である。言い換

えれば、彼ら彼女らは就職を一人前になるプロセスとして意味づけながら、それは仕事内容や仕事の具体的な中身を通して達成される以上に、一人前の稼ぎ手になること、そしてそれによって「親に迷惑をかけ」なくなること自体が重要な目的なのである。だからこそ進学との比較では就職は消極的選択肢として位置づくものではなく、むしろ彼ら彼女らは一人前になるために積極的に学校に寄せられる求人から就職先を選んだのである。そのために彼ら彼女らにとって仕事の中身は選択の基準としてはあまり語られないのである。

2) 進学から就職への変更

他方、今回の分析対象となった11名すべてが就職すること自体を目的としていたわけではない。一部の人たちは当初は就職よりも進学という全く別の進路を志望していたのであり、進路変更の末に就職をした人たちである。例えばB高校の村岡秀一（中堅ドラッグチェーン・販売）は、前回の調査時には推薦入試で私立四年制大学への進学が決定していたが、親戚から借りられるはずだった学費を工面することができなかつたために急遽就職へと進路変更し、進路指導担当の教員のはからいによって2回目の調査時にはドラッグストアに就職し販売員として働いている。村岡の事例に限らず、こうした進学から就職への進路変更のケースに共通してみられるのは、経済的な制約という側面である。そこで次に、このように進学から就職へと進路変更した人たちについてみていく。

①「やりたいこと」と関係ない職種への就職

B高校の下川彩乃（弁当製造販売・製造及び販売）のケースをみてみよう。彼女は小学生の頃から漫画家になりたいと思っており、現在もアニメが大好きで、声優という職業があることを知ってから将来は声優になりたいと考えている。この間の経緯について下川は次のように述べている。

「私も声優希望で。私は今まで、専門学校しかないと思ったんですよ。声優になるには。でも養成所っていうのがあって知って、養成所のほうが安いし。専門学校って高いじゃないですか？だから養成所がいいなと思って。……お金がないから正社員になって、せいぜい2、3年働いてお金ためて、その学校に行こうかなと、養成所に。〔お弁当屋さんは決まったの？〕一応そうですね。

フリーターだと保険証が効かないし、親にも心配かけたくないし、親には相談できないんですよ」

就職者の場合にもすべてが「やりたいこと」を持っていなかったり、「やりたいこと」を経済的事情で将来にわたってもあきらめているわけではない。1章で分析したように、フリーター志望のなかには、専門学校等の学費を貯めるためなど「やりたいこと」のための手段としてフリーターを位置づけている者が少なくないが、就職者にも同様のタイプの者が含まれている。また、下川が進学希望から就職へ変更した背景には「お父さんは、お前の好きにすればいい、俺はお金も何も出さない、お前がやれって」「(母)親とかとも話していても、それは絶対に無理だって、夢はあきらめろみたいな、お金にならないことをするなと……親はいろんな意味で活用できるから正社員の方がいいって」という言葉にみられるように、両親の意見とのズレが生じており、特に下川自身が自分の「やりたいこと」を追い求めるよりも「正社員になって働く」ことを重視する両親の意識が読み取れる⁽⁴⁾。そのために彼女は、まずは学費を稼ぐことができる就職をしようと、「やりたいこと」に向けた準備ができる就職先（弁当製造店）を選んだのである。その際の判断の基準について彼女はこのような述べている。

「朝早いし終わるのが早いんですよ、3時に終わるんですよ。その時間帯に声優とかいろんな活動ができるかなと。(早朝)5時から(昼の)3時くらいまでなんです。忙しいと4時5時くらいになるらしいんですよ」

このように下川の進路選択は確かに自分の「やりたいこと」とは無関係に就職をしたケースではあるが、彼女の場合は、フリーター志望の多くにみられるように、就職は進学などその後の別の進路のための手段として位置づけられているのである。

また下川のケースと対比すると、先の村岡のケース⁽⁵⁾は「やりたいこと」が明確でないまま進学を決定し、かつ経済的な事情から「やりたいこと」がやは

り曖昧なまま就職へと進路変更をしたといえる。ここにはB高校の進路指導が男子生徒に進学を勧めるという傾向とともに（4章参照）、その一方で本人の意識が明確ではなかったというズレが指摘できるだろう。

②「やりたいこと」を保ったまま就職への変更

最後に、先の調査報告の中で唯一「やりたいこと」と就いた仕事内容に関係があるとみられたB高校の浜野美帆（美容院チェーン・美容師見習い）のケースについて検討したい。彼女のB高校在学時の評定平均は4.2。現在は母親との二人暮らしで、化粧品会社でメイクアップのデモンストレーターをしていた母への憧れから、小さい頃からメイクの仕事をするのが夢であったという。

「今は美容系に、行きたいなって思っていて、専門学校を受けて、まあ受かったんですけどいろいろ家庭の事情で、それを蹴って、それで美容室に就職して。芸能界のヘアメイクとかやりたいから、それを全部やってからそういう世界に行こうかなって。……入学金ってあるじゃないですか。100万とかあっていって。それを1週間以内に払わないといけないんで。福祉の人とかと、お金出せることは出せるけど、後々のお金がギリギリになっちゃうって。余裕を持ちたいんだったら、それをやめて違う所を受けた方が良いつて。……うちんち母子家庭だから、親もちょっと働けない状態だし、そっちの先生とかも、美容院に勤めながらやっておいた方が、やり方としてはそっちの方が偉いつて、すごい技術もつくし、いいつていわれたから、半年しか、卒業するのに変わらないつていわれたから」

このように浜野は、当初は専門学校への進学を希望していたが、学校の進路指導だけではなくケースワーカーと思われる「福祉の人」とも相談をしながら、その後希望を変更して学校の進路指導室に来ている求人票を元に「やりたいこと」と関係した就職先を決定したのである。すなわち「やりたいこと」の実現に際して経済的な制約を受け就職へと進路転換をしていながら、実際的には「やりたいこと」と就職先を一致させることができた極めてまれなケースである⁽⁶⁾。

3) 小括

調査対象となった就職者11名の聞き取りからは次のことが明らかになった。第一に彼ら彼女らの多くが進路決定に際して何らかの経済的要因を抱え、その多くが自分の「やりたいこと」とは無関係な（少なくとも本人の「言葉」としては明確にならないかたちで）仕事についていることである。だがそこで彼ら彼女らに特徴的なのは、仕事内容以上に「就職すること」自体を目的として進路を選んでいるということであった。つまり家族からの経済的独立や「親の保護」からの自由などさまざまなイメージはみられるものの、彼ら彼女らにとっては仕事内容を問う以上に「一人前になる」ための手段として就職が位置づいているのである。また「やりたいこと」を一方では持ちながらも、経済的理由から進学をあきらめたり一旦保留して、「やりたいこと」とは無関係の仕事を就職している者がいるということも特徴の一つであった。また進路変更において経済的事情とともに親の意向が小さくない影響を与えているケースもあった。

一方で次の事実にも目を向ける必要がある。学校に来た求人から就職先を選ばざるを得ない彼ら彼女らにとって、企業から寄せられる求人数・職種は明らかに縮小しているものであり、「やりたいこと」をまず念頭において進路を選ぶのではなく、就職することそのものを一人前になるための手段として意識している彼ら彼女らは、より限られた窓口においてそれを実現することが迫られることになるといえる。逆にいえば「この仕事がしたい」という人たちのほとんどは（とりわけ学校への正規求人がほとんどないと思われるファッション関係やアニメ関係の仕事の場合）フリーターになるか、あるいは進学をするしかないのが現状である。

3. 就職後、その1年目の生活のなかで

自分自身が「一人前」になることを求めて就職し、あるいは「やりたいこと」のために就職した彼ら彼女らは、卒業後1年の間にどのような事柄を経験することになったのだろうか。2回目の調査に応じてくれた対象者のうちで高卒時に正規就職した12名中、インタビュー時点ではすでに4名が離職し、インタビュー

後2004年3月までにさらに1名の離職が確認された。卒業後1年以内に4割を超える離職という数字は、高卒就職離職者の全国平均値を大きく上回っている。ではいったい彼ら彼女らは、どんな状況と事情で離職したのだろうか。本節ではその辺りも含めて、就職後のインタビューを中心に彼らの前に現れた就労の現状とその現実への対応、そして将来の見通しなどについて彼らの声に耳を傾けていきたい。

1) 離職者のケース

①西澤奈穂子

B 高校出身の西澤奈穂子はもともと進学希望で、とりわけ手話に強い興味をもち福祉関係の専門学校にいくつもりであったが、学校見学で手話通訳という職業の不安定性と学習継続への不安から急遽2学期に入り就職活動をはじめた。就職先は父親のきょうだい、つまり血縁のある会社へ縁故採用で決めた。高校3年間の一番の思い出は最後の文化祭。はりきっていたが、クラスの店番を押しつけられ、その不満をみんなの前で表明しながら「もっとみんなで楽しくやっていこう」と呼びかけた結果、クラスがまとまったことがいい思い出になったという。

家族は両親と妹、祖母。家族全員のことを「すごい大好き」で離職後もなるべく早く再就職をしてお金を貯めて、ドイツに行きたいという祖母の希望をかなえたいと考えている。

就職先は家から1時間半ほどの大手事務用家具および事務用品会社の製造下請け会社で、彼女以外はすべて男性従業員であった。仕事内容は始業前の清掃から従業員帰宅後の整理、業務時間内ではコピー、お茶出し、従業員の昼食買出しなどを含む長時間にわたる雑務であった。朝6時に家を出、8時に出社、ゴミ出しなどをして9時から業務。帰りは5時に業務は終了。しかし、その日の後始末などをして帰宅は夜8時か9時。

インタビュー時に、質問者が下唇のピアスに気づき質問したところ、6月28日と離職1週間前にあけたと答えた。

「もうムカついて。ストレスが溜まると何かしたくなるんですよ。で、眉毛

を全部剃ることがストレス発散なんですよ（笑）。……やってみたら、ストレス発散になった。でもその時はもう眉毛がなくて、剃るとこもなかったから（笑）」

「何やっても痛くないって感じで。なんか音楽とか聴いて気を晴らそうとかってしたんだけど、全部聴く曲聴く曲クラ～イやつばかりで。だからたぶん、通勤してる人は、周りの人はなんだコイツみたいな感じで、帽子はここまでかぶってたし〔深々と?〕、ほんとうこういう感じで〔うつむき加減?〕。誰も見ないでって感じで」

夜8時過ぎに帰宅。疲労のため夕食をとらず、そのまま就寝。また翌日6時には朝食をとり家を出る。

「高校卒業する前からアルバイトみたいな感じで行ってて、で、正式に4月に社員みたいな形に。最初の1ヶ月ぐらいは覚えること大変、ま、そういうのはどこも一緒じゃないですか。で、1ヶ月目終わって2ヶ月目ぐらいから、もう、疲れた、どーんって寝てて」

会社の経営状態は悪化していた。

「で、この辺（5月頃）から会社がうまくいってなくて、それで社長がすごくあたってきて、なんかウチのお父さんの会社の下の会社なわけじゃないですか。……仕事がなくて、そのことをグチグチいわれても、お父さんにそういってたよっていえるわけもなくて。だから、はぁ、はぁ、って聞いているだけで。……すごい嫌みをいう人なんですよ、……なんかもう、仕事がうまくいってなかったんですよ。ぶっちゃけ。……で、やることやることに対して、『そんなことやってても役に立たないんだけどね』ってことをぼろっと言いながら人に頼むんですよ」

長時間労働と職場での不快な待遇とが蓄積されていき、次第にうつ状態になっ

ていく。

「精神的に参ったっていうか、寝れなくて、毎日。だから4時に起きるのもだいたいウトウトし始めるのは2時とか3時だから寝れなくて。でまた、その時付き合ってた人がまた連絡が取れなかったりとか。いろいろ重なってて、で、うつ病っぽくなって、毎日親に死にたい死にたいばっか行って……自分ではうつ病だと思ってないですよ。自分は普通だと思ってるから。でも周りから見ると、考えてみればおかしいっていうか。なんかこう、真っ暗闇の中に独りでいたいんですよ。電気とか消してて。それでもう何も考えたくなくて。ずっと死にたいとか、死ぬこと考えてた、みたいな」

長時間労働や職場での待遇などについて不満すら語る機会は彼女にとって残念ならなかった。

「〔じゃあ、全部自分で溜まっちゃうんだ？ 吐き出すとこないんだ？〕なくて。だからって友達に実はとかって、別に話通じないと思って。〔職場には誰もそのこと話せる人は？〕女の子が私しかいなくて。〔でもなんかわかってくれそうな人はいなかったの？〕なんか、もう、会社がうまくいかなかったあたりから、仲みんな悪くて。もなんか、朝会社に行くととりあえず机の上に缶ビールがばぁーっとあって、それを片づける作業から始まるの」

経営の悪化によって職場内の雰囲気の殺伐としたなか、離職までの2ヶ月彼女はうつ状態でありながらも出勤を続けていた。

「7月7日あたりで最高潮にうつだった。〔うつ状態のときどうしてた？〕……リストカットまでは行ってないんですけど、見えないところに傷を、みたいな」

「(会社から) もう辞めろみたいなことをいわれてたんですよ。親にもいわれてたし。胃が痛くて、ずっと吐いてたんですよ。で、病院行ったら、レントゲンみたいの撮るじゃないですか。そしたら胃潰瘍とかいわれて、ずっと薬飲

んでたんですよ。で、それをうちの親が会社に言ったらしくて。会社のせいとはいわないけど、ちょっと具合悪いらしいから、みたいなこといってて。……会社も危ない状態だし、後半はもう働く気力さえなくて、『そんなんでも来られても困るから』っていわれて」

西澤は自分の体の変調、自傷的行為までいたりながらも生真面目すぎるほど出勤をつづけ、ついに離職した。

②永原香織

B高校出身の永原香織は就職3ヶ月目で退職した。内気な性格の女性で人と接するのを苦手としている。彼女の家庭生活では両親が離婚しており、父とともに住んでいるが仕事で帰りが遅く、中学3年の妹の世話を含め、炊事洗濯にわたり彼女が家事労働を担う。惣菜等調理販売会社への志望理由としては、家で料理をするということからそれに関連するような仕事につきたい旨を前回インタビューで述べていた。

仕事の内容は弁当など店舗で販売される食品を本社工場で調理する食品製造である。本社は社員は合計で男女合わせて10名ほどで、パート・アルバイトが主な労働力で多くは3年、4年と働いている。社員とパート・アルバイトの仕事は調理に関してはほとんど同じ作業工程だが、書類操作や商品の発注、値段をつけたりするなど責任の伴う作業が社員の仕事とされている。

「朝は4時、早くて、それで午後2時までっていうことになったんだけど、『社員だからもっと早くないとダメよ』ってこともいわれて、……パートさんがいないときとかはもっと（出勤が）早くて……（残業として）2時までを3時までやったり、でも時間はちゃんと2時までしか手当つかなくて……帰ってきて、2時とか3時までやっているから疲れちゃって、寝て、朝になって、みたいなのが続いて」

この時期、永原は十分に食事をとれず、入社、帰宅、就寝、そしてまた朝出社というサイクルで生活を送る。

「2ヶ月くらいから落ち着いてきて、仕事のなかで食品のパックに詰めるときに落ちていてもそのまま入れなさいとか、虫がすごい飛んでいたりとか、掃除するときにも『適当に掃けばいいのよ』、みたいな感じで…。…ご飯にねずみの糞とかが入ったものとかがきたりして」

職場での昼食も、このような衛生状態で厭うようになる。家でも疲れて自分で料理する体力もなく、朝起きて入社、仕事場でも弁当が出されるが、虫などが入っていて返品された弁当であるため昼食をとることができず、その結果体調をくずし入院する。1日入院して、翌日から通院していた。

「1日入院してあとは通院していたんです。3日くらい休んで…、(職場から)電話で『もう来れるわよね』みたいなこといわれて、でも医者は仕事しないで休養してくださいっていったからそれを伝えただけど、大丈夫みたいなこといわれて。……3ヶ月目で辞めたんです」

彼女が離職するにあたっては、友人への相談よりも、会社側の対応を彼女が親に相談し、そのうえで親が判断した。ここにいたるまで、同期の3人と頻繁に会社の待遇、環境について話していたようである。

結局、残った同期3人のうち2人が9月頃には離職してしまう。

③高橋有香

B高校出身の高橋有香は就職3ヶ月目で退職。彼女の父親は専門学校卒でサラリーマン、母親は専業主婦。両親の関係は円満で父親が母親を大切にしており、また彼女の結婚願望は強く、彼女の両親が彼女の結婚のモデルになっている。またきょうだいは双子の弟と妹がいる。彼女が中学生の頃、男の子からいじめられ、その中学校から男の子たちが行かない高校ということでB高校を受験。就職理由は、彼女自身進学をはじめのうちは希望していたが、1歳年下の双子がともに進学希望のため学費の問題があり、もう一つは「払ってやっているんだから行け」といわれたくないから、という二つだという。

彼女自身接客業にたいして苦手意識があり、「一つの物事をしていられると

ころがよかった」という理由から、職場は化粧品などの容器の加工と塗装工場
でベルトコンベアーのある流れ作業である。

仕事自体は嫌いではなかったが、同年代の女性労働者がいなかった。やはり
この職場でも単純労務作業工程を主とする多くの中小企業と同じように年配の
女性を中心としたパート・アルバイトを主な労働力としている。

「最初の1ヶ月くらいはおばさんもやさしかった。……それで1ヶ月くらい
して、おばさんのイジメがきつくなってきた。最初はやさしかったんですよ。
最初だから様子を見るってかんじだったみたいで。[おばさんって正社員なの?]
パートさんでも責任者みたいなかんじで。勤めて20年とかの人で。自分ができ
ることは他人もできるって感覚で。検品の仕事とか梱包の仕事とか……それが
そのおばさんは早いんですよ。……私は入ったばかりで1ヶ月しかたってな
いのに、それを(同じように)やれっていうのは無理で、二人でやってなんと
か追いつけるってかんじで。それでいやみをいわれまして」

高橋の担当部署では彼女の前に8人の若い女性が離職しており、彼女が9人
目だという。もう一つの隣接した工場では若い女性が働いているのだが、高橋
の工場に若い女性がいないのは過去にこの年配の女性からのイジメでみんな辞
めたからだという。

その女性の高橋へのイジメはあからさまだった。しかし、周りの年配女性は
そのときは沈黙するが、しばらく後で「気にしちゃだめよ」と声をかけること
もあったという。

「たとえば、おしんことかもってくるんですね、お昼にそのおばさんが。そ
れで周りの人にはあげるけど私にだけはくれないとか。しかも私の前を横切っ
て。[まわりの人は何もいわないの?] いえないの、こわくて。……わかっ
ているんですよ、自分もいじめられるかもしれないですから」

その年配女性の振る舞いには多くの人気づいていた。ある男性職員は彼女

に声をかけたが、彼女はその男性に状況を説明することすらできないほど職場の人間関係に不信をいただいていた。

「でも、そのおじさんはわかっていたらしく、『そのおばさんがいやなの?』とか聞いてきて、わかっているんならとめろよって思いつつ、『いえ違います』ってこたえて」

彼女の中学校時代のイジメ経験では学校に行けないほど苦痛ではなかった。彼女も語っていたようにはじめの1ヶ月間は問題なく入社、勤務できていた。しかし、2ヶ月目に入った頃からこの年配女性のイジメはあからさまになり、ついには入社できなくなった。

「ほんとに怖くて行かなかったんですよ……ちゃんと連絡はしましたけど。風邪ひきましたとかいって、外にいるんですよ、私。親は会社に行っていると思っているんですよ。だけど結局私は会社に行けないんですよ。電車に乗るんですけど、その駅で降りれないんですよ。あと、おなかが痛くなって。……毎日自分自身が電話するんですよ。風邪が治らないんですよってうそついて」

高橋は「登校拒否児のきもちがよくわかる」と、つらいと体調が本当に悪くなるのだと知ったという。

「その1週間休んだあとに、もう辞めるって決めて。……〔職場の愚痴とかは誰に相談していたの?〕 犬とか。ちょーやなんだけど、と思いながら。でも犬にあたっても仕方がないし……だから彼氏にいうか、同じくいじめられている人とか。……(下川) 彩乃ちゃんもいえばわかってくれるだろうなって思うし。〔同じ職場の人ってわけではないのね?〕 同じ職場の人は信用できない」

彼女は退職を決意するのにあたって2ヶ月間、職場の誰にも相談できなかった。

2) 就労継続中のケース

①手塚豊

B高校出身の手塚豊は就労を継続している。家庭の状況は中学校卒業直前に両親が離婚しており、彼は、母と姉と妹の住んでいる家、つまり離婚前までは家族で住んでいた家のすぐ近くの部屋でタクシー運転手の父と生活をしている。彼は高校在学中のインタビューで、10月の時点ですでに印刷会社に就職内定していた。3回目の印刷会社で合格。就職への動機、あるいは決定要素としては既に中学卒業時くらいから、学習に対する意欲も低く、高校を卒業したら就職するというイメージを持っていた。仕事場は自転車で通える距離、4階建ての印刷工場で彼の階の担当部署の人数は4名、会社全体の社員数は50名ほどだという。比較的定刻で仕事を終え帰宅でき、夏期、冬期休暇も問題なくとれる労働環境である。

趣味はミリタリー関係、特に兵器などのプラモデルを制作することが好きなのようだ。また、就職活動中に相談を家族や友人に特にしたということはなく、学校の先生に相談しながら自分で決めた。

配属先では当初、先輩社員1名が主に指導していたが、その先輩社員が転属になってしまって、それ以後その人とはあまり話す機会がないという。

自分のことを「暗い」と評する彼にとって社交生活はあまり重要性が高くないようだ。

「[会社の人も休みの日には会わない?] うーん、ほとんど会わないですね。会社帰りに出かけるとかってありますけど、それ以外は、うん会ったりしないですね。うん、一人でいますよ。[無理に人と一緒になったりしない?] ああ、俺はそういうのが好きかもしれない、一人。……うん、まあ、人と一緒にいるの、集団行動とかちょっと苦手かもしれないですね。一人でいた方が気楽でいいやって考えてるんですけど、でも何かたまにちょっと寂しくなる。つらい時は、そうですね。……この先のことを考えたら、ちょっとこれからいったいどうなっていくんだろうなって、俺は、ま、それでちょっと心が寂しくなります、うん。……ま、何にもなければだいたい、ほとんど会社でもそんな人と話すこ

とはないです。〔自分で考えるの?〕え、なに、ああ、たぶんそうですね、あんまり人に話さない、うん」

彼は高校生活でも同じように、同級生との交流が彼にとって重要ではなかったという発言をしている。入社後しばらくして、高校3年生の時の同窓会があったが、そのときも輪には入れず「何かもう、こいつら会わなくていいなと思って」、途中で帰宅した。

インタビューの前の週、職場では1歳年上の先輩社員が辞めることになったという。

「〔嫌な人が辞めたんだよね?〕そうですね、良かったですよ辞めてくれて。……まああんまり話さなくていいかなって感じの人だったんで。……突然辞めるってこと知ったんでね、やったぁとか思って、うん。ああ、ありがたい、ありがたいと思って」

就職して、彼の仕事に対する具体的な実感とはどのようなものだろうか。

「そんなに残業もないし、仕事もハードじゃないし、うん。……まあ、やっぱりまだ何か俺は、まだ不満があるっていうか。〔どんな不満?〕うん、馴染めないっていう、うん、まだ。それが一番かな。みんな話さないで1日終われば良いんですけど、……〔休み時間とか?〕うん。〔同じ所にいたら、集まらないのもおかしいよね?〕嫌でも、そうですね、はい。一応は軽く話して、って感じなんですけど。〔話せなかったことがくやしかったりする?〕え、ああ、何か思わないんですけど。まあ、それよりも何か、仕事が終わったっていう時点でもう、結構嬉しくなっちゃって、そんなこと考えないですね。……でも明日からまたあんのか、と思ったら嫌になっちゃう。はい」

彼の休日の過ごし方は秋葉原、神保町に行きミリタリーの趣味に関する書籍やモデルガン、使い古しの装備品などを販売している店を回ることだという。

このミリタリーグッズとの出会いは、このインタビュー直前にも立ち寄ったという彼の母方の叔父からの影響だという。

内気な、一人でいることをよく好み、「暗い」という彼にとって、これまでの彼の生活における人間関係は非常に限られたものであったようだ。社交生活は高校時代も放課後友人と遊ぶということもなく、また自分で誰かに電話をかけたりメールをしたりするということは非常に珍しい。電話がかかってくることはあっても自分からかけることはまずない。彼の就職後の社会生活でもそれは変わらず、自分から率先して会社内での人間関係をつくるということはあまりないようである。

結婚はという問いには、両親が離婚していることをあげ、あまり積極的ではなかった。3年後何をしているか、という問いには、「俺はたぶん会社辞めますね。うん、でも3年もいるかわかんない」と語っている。

彼の日常の行動範囲はおそらく、同年代の青年よりは限られており、さらに社交関係も限られているようだ。彼の世界観は狭い空間移動の中で形成されている。

「〔将来はこうしたい、とかある？ やりたいこと、とか〕あ、夢と希望ですか。あんまり何か、そういうこと考えられないんですよ。そういう余裕がないっていうか、自分がそうできるんだったらいいけど、何かそういう風でできる立場でもないし、自信もないから、何かそういうことも考えられない。なんか、頭も良くて、何でもできるような、人間関係もうまくいくようだったら、そういうことも考えると思うんだけど、あんまりうまくいかないこと続きだから、そういうことも何かあんまり考えたりとかしなくなりますね」

このように手塚は仕事を続けていくためには毎日を「やりすごす」ように生きて、明日へとつなげている。

②内田玲奈

内田玲奈は高校卒業後、現在も就労を継続している。前節でも述べたが、家族三人で団地住まいで、両親とも病気がちで、父は定年を迎え、母は以前から

心臓を患っており、働ける健康状態ではなく自宅療養中で収入がなかった。それに加え、前節で述べたように彼女は「親に迷惑をかけ」ないために「一人前になる」という意識を持って就職という進路を選択した。職種は惣菜・弁当等の製造・販売業だが、この会社には学校の部活動、委員会活動のなかで仲のよい女の子の友人二人と一緒に就職相談室に行き、三人で同じ会社を受験し、就職を決めた。放課後は友人たちと日が暮れるまで空き教室で「おしゃべり」、休日はたまに漫画・アニメ系の趣味を持つ友人とつれだって中野、秋葉原へ出かけるというような高校時代を過ごした。

チェーン展開している惣菜・弁当会社の店舗での惣菜詰めという仕事内容で、入社してすぐに副店長というポストで店舗に配属される。基本的に三人で店舗を運営、パートは40歳代、アルバイトは20歳代後半と彼女とは歳がいくらか離れているが、職場の雰囲気は明るいいという。普段はシフト制で朝シフトでは7時から16時、夜シフトでは11時から20時までの勤務だが、「9時から8時までとか。それは人がいないんで頼むよ、ぐらいい感じ」でしばしば11時間の長時間労働に従事している。多くの若年労働者層と同じように、定刻で入社・退社という状況ではない。実際の仕事内容は長時間にわたる立ち仕事で、店舗運営する人員が三人ということもあり、時間に追われる毎日であるようだ。

「ずっと立ちっぱなしの仕事じゃないですか。足痛いんですよね、腰にきますよ。……立ちっぱなしで、朝から晩まで。最初の頃なんて、全身筋肉痛。足なんてぜんぜん痛くて歩けなかった。……帰ってきて、座って、たまに足つりますよ、寝てる時とか。痛くて起きちゃうんですよ。それが夜中だと、また腹立つんですよね。まだ夜中だよ、寝なきゃ、って。時間との戦いなんで」

内田はほぼ一日中仕事で、家事労働は、インタビューをした時点では母親は癌の摘出手術のために入院中だったので、父親が引き受けている。

「〔(入院) すごく大変だね〕 でもいま働いているのは私だけなんで。家にお金を入れないとまずいで。〔じゃあ去年から結構大変だった?〕 どうですか

ね。……まあ仕方がない。仕方がないっていうのもおかしいんですけど。普通に生活しています。大変だとは思ったことないですよ。〔じゃあ小さい頃からそんな感じ?〕そうですね。もう中学のときから就職するって決めてたからそんな抵抗感なかったんで。まあ大学も行きたいなあとも思ったんですけど……〕

給料の半分は家計に入れ、3万円は定期代と携帯代と月のこづかいとして、残りは貯金に回している。

高校時代仲のよかった友人と同じ会社ということもあり、職場のことに関して悩みなどを互いに共有しているようだ。

「〔相談で、やっぱり職場のこと〕ですね。今日こんなことがあってさ、みたいなの。〔たとえば最近とかどんなの?〕最近うちの店の店長が代わるんで、その話とか。社長何考えているんだよ、とか」

「結婚の話とかしないですけど、なんか彼氏欲しいねとか、そんな話しますね。ま、なるべく早く、結婚したいな—とかずっといっていますね。……でも、今はそんなこといっている場合じゃないんで。自分が精一杯なんで。まだいっぱいいっぱいなんで」

自分が「いっぱいいっぱい」で、1年後が想像できないながらも、漠然とだが一人暮らしをし、自立したいという希望をもっている。

「やっぱ自立できたらいいですよ、っていうかんじですよ。〔経済的にも〕そうですね、経済的にも自分自身もそうですし。気持ちしだいですよ。〔今はまだ親とかに自分が頼っているっていう〕頼っていますね、だって、一緒に暮らしているわけですから、頼りっぱなしですよ」

幼い頃から、家庭の経済状況が思わしくないなか、そのときそのときを「仕方がない」とやり過ごしてきた。両親が高齢ということもあり、彼女は自身の人生について、これまでの両親の苦労している姿からそれなりの直観的な不安、

乗り越えなければならない現実を感じている。

現在、同期で入社した他の二人は既に退職しているなか、彼女だけが働き続けている。他の青年労働者が次々に離職していくなかで彼女は困難を「仕方がない」とこれまでやりすごしてきたように、就労を継続していくのだろうか。月3万円のこづかいと、残りを自立のための貯金に回す生活を、「楽に貯金しています」という。貯蓄という中長期的な計画的な行為と次の発言のアンビバレントな姿が浮かびあがる。

「〔自分が5年後とか10年後とかどんなことしてるっていうイメージとか〕ないですね。まったくないですね。もう、今が精一杯なんで。毎日精一杯できるだけのことをやっていけばいいな。なんか先のことなんてぜんぜん考えていないですよ。……10年後の自分なんて想像つきませんよ。1年後の自分ですら想像つかないんで」

③大野千冬

大野千冬はA高校出身で、不況により求人が前年より半減している中、首都圏を中心に規模の比較的大きいチェーン展開をしているスーパーへの内定が高校3年の9月中旬に決まった。

卒業前のインタビューでは、約束の10分程前に来室し、インタビューには要点を手短かに答え、言い間違いなどはきちんと訂正をし、受け答えをするなど、とても落ち着いた様子に感じられた。母は専業主婦、父は大工で一人っ子である。

進学は特に考えていなかった。塾・予備校へは通ったことがなく、部活動に一生懸命とりくんでいた。高校時代の成績は評点平均が5段階で4.2で、定期テストには1週間前から備えて勉強しており、1年生の頃はクラス通信に成績上位者として名前が載ったこともあった。

この高校では専門学校を含め進学が多く、高校3年の春の初めの就職ガイダンスには10名ほどしか参加していなかった。そのため就職という進路選択をしている生徒自体が少なく、就職選択者同士で励ましあいながら就職活動をすすめた。また、高校1年の時から仲がよかった四人と同じ部活だった一人と六人

の女子グループでよく遊んでいたが、彼女だけが就職だった。

「〔進路決定の上で友だちと相談した?〕あ、友だちとは同じ就職の人とかは悩んでることとかも結構一緒なんで、そういうのを話していると、自分だけなんか、一人で考えてると、なんかすごい深く考えすぎちゃって嫌とかもあるんで。同じ立場の人とかと話していると気が楽になることもある」

7月いっぱいまでは実習生（仮採用）、8月から本採用で働いている。しかし8月に入り、突然期日の3日前に言い渡され埼玉へと異動になった。そのスーパーでは高卒就職者がレジ業務につくことになっており、よって彼女の主な仕事はレジのチェック業務である。

店舗勤務では四つのシフト時間帯があり、最初に配属された店舗ではほとんど朝10時から夜7時半までのシフトで働いていた。職場の雰囲気は人間関係もよく、現在の店舗よりよかったという。彼女が転属になったときもアルバイトや他部署を含めて送別会が開かれるほど居心地がよかった。同期は売り場担当に一人、他には23、24歳ほどの同僚と仲よく仕事をしていた。

しかし、現在の店舗では「フードはフードで仲よくて、ハイパーはハイパーで仲よくって、こことここは仲よくない」という雰囲気で、また、同じシフト制であっても、開店準備を社員がすることになっており、交代で9時に出勤することになっている。通勤時間は2時間近くで、以前よりかかるようになった。遅番の時は12時に出勤して、退社は9時、帰宅は11時を過ぎる。

「あんまりいっちゃだめかもなんですけども、前のお店の方が好きだったんです。人間関係でも前のお店の方がなんかよかったかな。……ほんとにすごい前のお店は仲よかったですね。一緒に帰ることとかも結構あったんですよ。帰りの方向が一緒で。あと仕事以外でいろいろしゃべったりとかもあったし。今はあんまり。一人同期の子がいるんでその子とよく話すくらいで。歳が上の人とはあんまり話さない。前のお店は上の人とかとも話しましたね」

実際に就職してみると、やはり思っていたこととは違うようである。パートの主婦やアルバイトの学生、フリーターたちに社員という立場から関わることになり、高卒直後ということもあって、関係が難しくなることもある。

「私と同期の人のほうがバイトさんにいわれますね。(上司にいけない苦情などを) リーダーさんとか一つ上の先輩とかにいうよりはこっちにいつてくるんですね。でもいけないこともあるじゃないですか、上の人に。バイトさんとかからいわれるんだけど上に伝えられないっていうのもかなりあって。[ちょうどあいだで] そうなんですよね。バイトさんとかはいいやすいらしいんですよ。年も一緒の人もいますし、来たばかりだから」

現在、実家に両親と同居しながら通勤している。給料の内から4分の1ほどを食費として両親に渡している。あとはこづかいを除き月3万円ほどを彼女は貯金している。

「なんかやっぱ、不安なんですよね。[目標があって貯めているわけじゃないの?] ないですね。なんか、不景気不景気っていわれてるから。なんかそんなにすぐ何かあるってわけじゃないですけど、何かあったときに出せるくらいは持ってないと」

将来のことについては、未来に対する漠然とした感覚や不安、離職可能性への予感というものを感じているようだ。

休日は週に原則として2日である。有給休暇もあるが、実際はとれるような雰囲気ではない。休日は、以前の店舗で付き合いようになった同期入社の大卒の男性と一緒に出かけることが多い。

「[結婚はしたい?] そうですねえ。このまま働いていくのもなんかやなかなじですしねえ。20歳前半で結婚して、多少は仕事しててもいいかなあくらいで、今の会社でもいいですけど、1年くらい働いてそれで辞めちゃおうかなあ

て」

彼女の将来像のなかで結婚は多少のあいまいさを伴いながらも具体的な離職の契機として描かれているようだ。

3) 小括：「仕事をやり続ける長期の展望」

これまで離職者と就労継続者を見てきたが、学校から職場へのトランジションを経て、それぞれが特徴をもった困難に直面していることがわかった。それらがある一つのフレームワークで語ることはそれほど意味をなさないように思える。しかし、彼ら彼女らの直面した現実のなかで、とくに離職に至った西澤奈穂子、永原香織、高橋有香たちが抱いた、ケースによっては自傷行為にも至るような極度に追い詰められた切迫感は、文字通り「死ぬほどに」厳しいものであったことは理解されるだろう。卒業後1年以内で4割あまりという離職率の背後には、「安易な離職」というよりも、このようなぎりぎりのがんばりと、とうとう耐えきれなくなっていれば「自分を守る」ため仕事を辞めるという状況が隠されていたことをここから確認できる。この三人にとって、もしそれでもそれらの困難を乗り越えることが仮にできるとすれば、そのために必要だったものの一つは苦楽を分けあい、労働を支えあえるような人間関係、つまり職場への包摂機能を果たすようなソーシャルネットワークだろう。就労継続中の大野千冬はそのネットワークが形成されているケースだった。宿泊も含む新入社員研修という、同期集団として自分たちを認識する、あるいはネットワーク形成を要求されるような機会が企業によって用意されており、またその同期集団の中で恋人もみつけているが、同時に可能性として結婚によって離職するという展望をイメージしている。他方では、就労継続中の手塚豊は人間関係に非常に苦手意識を感じて、それを避けることでどうにかやりすごし、出勤を続けており、長期的展望を描くことは彼にとって困難と感じられているようだ。

離職者は離職後フリーターとして生活をし、本節で語られた極度の精神的疲労を「癒す」ために自分の趣味や高校時代の友人と時間を共にしている。一方で就労継続中の者の多くは就職1年目の日々の現実の中で、「いっぱいいっぱい

い」であると感じており、毎日を「やりすごす」ように生活をしている。

4. まとめ

本章では高卒後の進路として就職をした者たちの傾向を分析し、二つのことを明らかにした。一つは「やりたいこと」と就職先とが無関係であると見られた就職者の多くが、経済的要因を背景にしながら、そもそも「やりたいこと」を実現するために就職活動をしているというよりは、むしろ就職すること自体をいわば「一人前になる」ための進路と認識していることである。また進路選択においては進学を希望しながら、あるいは時には進学先が既に決まっていながら、経済的事情によって就職するケースも見られた。一方で実際に企業から寄せられる求人数が大幅に減少していることを背景として、就職することそのものを目的化している人たちにとってはその選択肢が次第に狭められていることが指摘できる。つまり、自分の「やりたいこと」の実現にこだわる者は進学やフリーターという選択肢に進むしかなくなっているのに対して、今回の分析対象となった就職者の多くは「一人前として認められる」という目標のために、狭められつつある労働市場へと参入していつているのである。

だが二つ目として、そうした形で実際に働き始めた彼ら彼女らは、極めて厳しい困難に直面しているといわざるを得ない。例えば身体的にも精神的にも消耗した者や、いじめにあう者、あるいは職場での人間関係を結ぶことができずはじき出されるように離職する者がいる。そしてその背後には例えばそれぞれの困難な状況を支えるネットワークの欠如が指摘できるのである。また就労を継続している者たちもまた、離職せざるを得ない者たちと同様にそれぞれの仕事に困難を感じており、その多くが離職を意識した生活を送っていることが明らかになった。

そうした中で卒業後1年での離職率が約半数に迫っている状況とは、彼ら彼女らの就労意識の未熟さに還元されるものではなく、むしろ高卒就職者の中でも一定の層は離職せざるを得ないような労働市場へと流れ込んでいる現状、そしてそれでもそれぞれの限界まで踏ん張りながら最終的には極めて困難な状況の中で離職していく現状を見出すことができるのである。

註

- (1) なお本稿においては紙面の関係から12名すべてに言及することはできない。本文で言及する者に関しては、初出時に（就職先・職種）を示している。
- (2) 乾彰夫・芳澤拓也・木戸口正宏・上間陽子・竹石聖子・西村貴之・渡辺大輔・唐雯・杉田真衣・椎林美樹・宮島基・信雅之・原貞次郎「大都市圏高校生の進路選択実態とその過程にみられる要因—インタビュー調査を通じて—」（2003年日本教育学会大会報告，2003年8月早稲田大学）
- (3) 例えば日本労働研究機構『移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査（中間報告）—』労働政策研究報告書No.6，2004年，など。
- (4) 実際2回目のインタビューにおいては、彼女は専門学校への進学資金のため家に給料は入れておらず「〔声優の勉強のための貯金だったよね？〕そうです。いま一応50万になりました。……〔家に入れなさいといわれたい？〕お父さんはいわないんです。お母さんが遠まわしにいうんですよ。入れないと本当はまずいんですよね」と述べている。このように就職後も彼女は一家の稼ぎ手となっているわけではない様子から、進路選択時にも必ずしも家計のために声優の道を反対されたわけではないといえる。また下川が声優を実現する上でフリーターではなく正規就職をしたのは、フリーターでいるよりも同居する親からの理解を得やすいという理由が考えられる。
- (5) 昨年の調査報告（本章註2）において、村岡（B男15）はく「やりたいこと」がない・はっきりしない」というカテゴリーに分類されている。
- (6) なお今回の調査事例の中にはこの他に、1回目調査時にはバンド活動（ドラムの演奏）を認められ音楽プロダクションからの誘いを得ていながら、2回目調査時にはそれを断り、独自の音楽活動のために家族が経営する会社に就職しているケースが見られた。だが今回の分析においては家族が有する資本、実際の進路等が他のケースと比べ極めて特異なケースであるため、本稿では扱わなかった。

第3章 専門学校進学者の学校生活と将来展望

西村貴之

1. はじめに

高校卒業後の進路として専修学校⁽¹⁾（以下「専門学校」）への進学率は10年前をピークに、大学進学者の増加とは対照的に減少する一方で、学校の多様化が進んでいる⁽²⁾。専門学校進学については、東京都内の高校全体の進路状況に関する私たちの昨年の調査からも、偏差値が高くなるほど専門学校進学率が低

くなるという傾向がみられた⁽³⁾。少子化時代に入り、大学が生き残りをかけて推薦枠を広げ、偏差値がそれほど高くない高校の生徒にも大学進学が開かれるようになったこんにち、専門学校に通う青年たちは、単純に大学進学するには学力がないが、かといってすぐに就職したくはないといった消極的な選択をしている者ばかりなのだろうか。むしろ「やりたいこと」「なりたいもの」といったはっきりした意識があり、実現可能な手段として、その専門技術者の養成を目指す専門学校に進学するケースも少なくない。本章では、2回目のインタビューに応じてくれた調査対象者のうちで専門学校に進学（入学したのち退学した者も含む）した青年（12名）へのインタビュー結果（高校3年時および専門学校1年時）をもとに、彼らの専門学校での生活がどのようなものなのか、そして進学以前に抱いていた将来展望にどのような変容がみられるのか（またみられないのか）を描いてみたい。なお、インタビュー対象者の多くが、労働市場においても安定した需要がある職業に必要なスキルを身につけられる、公的職業資格の取得のための養成施設の認定を受けている専門学校⁽⁴⁾に通っている青年たちであったため、専門学校全般を網羅した分析になっていないという限界がある。

インタビュー対象者一覧

名前	性	専門学校（*は養成施設認定学校／学科）	高3時進路希望	高校3年時の受験校
加藤久美子	女	公立看護学校*	看護師	看護系短大，専門不合格
人見加奈	女	都立看護学校*	看護師	希望通り
小玉勇人	男	都立技術専門校（自動車整備学科）*	整備士	希望通り
根本 浩	男	理工系専門学校（自動車整備学科）*	整備士	都技専，他の専門不合格
小林俊介	男	理工系専門学校（自動車整備学科）*	整備士	都技専不合格

市川利明	男	都立技術専門学校 (メカトロニクス科)	あいまい	四年制大学を数校不合格
山田 剛	男	工学系専門学校 (建築学科)*	建築士	公務員試験不合格
坂本和孝	男	福祉系専門学校 (保育福祉科)*	保育士	保育系専門不合格
岡本祥子	女	芸能系専門学校 (俳優専攻)	声優・舞台役者	希望通り
足立英之	男	公務員試験を目指す専門 学校(行政学科)	あいまい	公務員試験不合格
深川陽一郎	男	料理専門学校* 集団調理 の会社に10月内定	調理の仕事	希望通り
吉川 綾	女	医療福祉系専門学校 (保育コース)* 9月中退	保育士	短大, 2つの専門不合格

2. 進路意識と学校生活

1) 学校生活にたいする生徒たちの感想から

各専門学校によって多様であるものの、職業に必要な能力を1～3年の間に育成するカリキュラムは質、量ともに濃い。専門学校進学1年目のインタビュー対象者たちには、ときに必死になりながらついていく姿がみられた。

「9時には(授業が始まる)。……技術とかも自分で勉強しなきゃいけないから、学校終わっても、なかなかすぐに帰ることができないんで。この学校では6時半まで学校にいれるんで、そのくらいまで練習したり。図書室行ってレポートとか書いたり」(加藤)

「学校は午前中学科、午後実習みたいな感じで、[1年終わってみての感想は?] よくここまで続いてきたなって。学科とか、想像していたよりも結構つらい。私立(の専門学校)と違って追試というものがなくて、単位を落とすとす

ぐきられてしまう」(小玉)

インタビュー対象者のなかには、根本のように専門学校の生活をそれほど大変だとは口にしない者もいるが、その根本でも無事卒業するため、そして卒業後の就職のために、必要な技能を身に付けることを自覚しながら学校生活を送っている。

「〔予習・復習はしている?〕正直いってしてないですね、わかんないときはテスト前に友だちに教えてもらうんですよ、それでできるようになるんですよ一応……今度(後期試験)は、本体を使って部品名称と、ちょっといじくって分解して組立てて、組立てられたら試験合格で……時間がきたら次の(人)ってなって帰らされちゃうんです。〔留年になるの?〕補講があって……補講やる人は春休み返上ですね……整備に関しては、どれだけ早く要領よくうまくできるとか、あとは決められた時間内に……45分車検とか……そういう実績がないと給料が上がらないみたいですね、ただだらだら働いてると上の人にも使えないから営業に回そうとか思われちゃう」(根本)

実習試験などで不合格になると補講を受けなければならないことや、2年間のカリキュラムを履修することによって二級自動車整備士の受験資格(実技試験免除)を得て、卒業後にその資格試験に合格したとしても、就職後も整備士としての技能のレベルを向上させなくてはならないといったことを自覚している。また就職活動の際、専門学校での成績と出席率が重要であるため、インタビュー対象者たちのほとんどは欠席せずに通学している。

2) 学校生活と進路意識・将来展望

① 学校生活を支える進路意識・将来展望

12名のインタビュー対象者のうち、高3の調査時にすでにはっきりした進路意識が形成されていた生徒は9名(根本, 小玉, 人見, 加藤, 岡本, 小林, 坂本, 吉川, 深川)いた。彼ら彼女らの多くが、その学生生活を、早い時期に形成してきた将来展望に結びつけ、それを維持・強化しながら送っている。

〈小林のケース〉

高校2年の半ばくらいから、高校の教師に卒業後の進路を質問されたことがきっかけで進路を考え始めた。小さい頃からバイクの玩具をいじるのが好きで、高校1年の終わりころにバイクの免許をバイトで貯めたお金を使って取得した。その頃からよりバイク（自動車整備）に興味を持ち始めた。高校3年のインタビュー時、専門学校卒業後の将来展望を、「整備とか、そういう工場に行くか、もしくは、自動車のディーラーに就職したりとかして、……いじれるところにとりあえず行きたいなって思って」と答えていた。

自動車整備専門学校に進学して約半年過ぎた彼の言葉には、専門的な知識の習得が整備士という自分になりたい職業に一步ずつ自分を近づけているという実感を得ていることがうかがえる。「(専門学校の授業の)内容は、おもしろいすね。なんか、自分が行きたくて入ったわけじゃないですか。車のこと知りたくてその学校に入ったから、やっぱ最初の頃はいろいろ自分の知りたかったことが身についたりとかして嬉しかった。座学なんかもそうですね。あ、こうやって計算して出すんだーとか、あーこうなってるんだーとか。で、自分がどんどんプロの整備士に近づいているような気がして」。

勉強にたいするイメージも、「なんか高校んときは嫌々やらされてんじゃないってのがあったけど、今は、なんだろ、自分からやろうと思うから」とプラスのイメージに変わっていた。また、1年のうちから就職活動をする生徒もいると就職活動の話題が提供されると、彼も就職のことを気にして髪の毛を黒く染め直したり、就職先もまだ具体的には絞っていないものの、二輪と四輪の両方の整備をまずはできるようにして就職活動に備えようとしていた。

また、このなかには進学して1年も経たないうちにすでに卒業後の将来展望をリアルに描いている者がいる(加藤, 人見, 小玉, 根本)。

〈小玉のケース〉

小学生の頃から自動車に興味を持ちはじめていた小玉は、整備士になりたいという思いを抱いていた。高校卒業後都立の技術専門校の自動車整備学科に進学し、「よくここまで続いてきたな」とインタビュー時(2月)、1年間の学校生活をふり返っていた。彼の学校ではこの時期にはすでに就職活動が始まって

いて、彼も大手ディーラー2社（トヨタ・日産）の就職説明会に行っていた。彼は「ディーラーに5年間勤務→民間→独立」という卒業後の将来展望を描いていた。「大きな所（ディーラー）で基礎を教えてもらって、それから今度、民間の方に入って、……けっこう最初から何もわからないで民間に入るよりも、経験がありますって感じで（民間に）……。 （ディーラーに勤めて）だいたい5年くらい。（それから）民間には（独立資金を貯めるために）。自分の店を開くのにはすごいお金がかかると思うんですよ」。

②進路意識・将来展望の具体化を促す学校生活

高校3年時、進路意識があいまいなかたちで形成され、そのまま専門学校に進学した生徒のうち、入学後の学校生活をとおして、具体的な職業イメージ、将来展望を形成しはじめている者もいる（市川、足立）。

〈市川のケース〉

高校3年のインタビュー時、市川の第一希望は大学進学だった。母親の母校の私立大学を親に勧められたことがきっかけだった。学部は経済学部。これも親のアドバイスを受けてである。とくに予備校には行かず、独学で受験勉強をしていた。大学卒業後の将来展望については、「（希望は）ないです。とりあえず大学に行ってから。経済で勉強したことを活かせるような……。でもどんなんかはわからないですねえ」とあいまいに答えていた。

彼は翌年度、都立の技術専門校に進学していた。入学してからおよそ1年が経つ頃のインタビューによれば、彼は四つの大学を受験して不合格になり、高校卒業後に進路変更をしての入学だった。中学時代の友人から授業が無償で、就職率が100%だという専門校の情報を聞き、まだ応募が可能な専門校を高校の担任に探してもらった。この段階でも進路意識は「とりあえず、いってみよう」レベルであった。自動販売機のメンテナンスをする自販機科を考えていたが、担任に「ためにならないからやめろ」といわれ、メカトロニクス科に進むことに。

学校生活は、高校よりきついという。朝9時から16時半まで1コマ90分の授業は自由に選択できず、本人もよくは理解していない電気関係や材料力学などの専門的な授業をはじめ、フライス盤を使った機械加工やプログラミングの実

習もある。こうした授業を日々こなしながら、彼の将来展望はよりクリアになっている。卒業後どんな職業についているかという質問に、彼はこう答えている。「機械加工（をする仕事）。[どのような企業に就職するのか?] わからないですね。大きくはないですね、中小。町工場」自分が卒業後どのような進路を歩むのかについてこのような具体的なイメージを抱くにつれ、いま学んでいることにたいして「がんばるしかない。もう1年くらいやってますからね。ここでやめてもしょうがない。[進路変更の予定は?] ないです。それ一本で」と述べるなど、高校3年時、受験時点での進路意識のあいまいさは、この1年を通してなくなっている。

③漠然とした進路意識・将来展望が継続した学校生活

しかし他方で①や②のケースとは対照的に、かえって将来展望に不安を覚えている生徒もいた（山田）。

〈山田のケース〉

高校2年の頃から公務員になろうと考えていた。父親が公務員(郵便局員)で、進路相談時に「何となく話をしているときにそんな感じに」公務員試験を受験することになったそうだ。高校3年の9月に国家三種と特別区の中級の試験を受験したが不合格。その受験直前の夏休みに、たまたま母校の中学の自然探検部顧問だった理科の教師のところに遊びに行ったとき、進路のことを聞かれ、「公務員よりも専門的なものを覚えて、自分の好きな職業につけ」とアドバイスを受けた。受験に失敗したのち、家を建てたいという小さい頃からの夢を実現するために建築士を目指す。大学は数Ⅲをとらないと入れないといわれ、無理だと諦めた彼は専門学校を推薦受験して合格。

専門学校（建築設計科）の授業では製図の書き方や建築学や建築構造の種類などを学んでいる。インタビュー時、「ある町の公園で子どもたちが遊べる建物を設計する」という課題が出されていた。授業は自分の想像していたとおりのだったかという質問に、彼は「いや、思ったよりシンドイですね。……なかなか（設計の）アイデアが出てこないっていうか。他人を見てると何でそんなの思いつくんだらう。自分は何もできないじゃないかって」と自信をなくしている。勉強にたいする意欲はあると言いながらも、1年間の学校生活への評価は、

本人の自信につながらず、「何をすればいいのか不安に、何をすればいいかわからなかった」という消極的なものになっている。クラスメイトとの就職情報の交換も担任への進路の相談も気後れしてできずに、学校生活を「なりたいもの」のために十分に活用できないでいる。建築士になりたいという夢はまだ抱きつつも、「いやー、なれるのかってほうがどんどん大きくなってきましたね」と将来展望は揺らぎつつある。

④進路意識・将来展望を閉ざす学校生活

教育施設、カリキュラム、講師および学生数、資格試験の合格率、就職率、学費などが一様でない専門学校。自分が思い描いていた学校生活とのミスマッチで、進学以前に抱いていた進路意識や将来展望が失われその進路を断念せざるをえなかったケースも1名見られた(吉川)。この女性のケースでは、中退後フリーターに進路変更していたのだが、その際、親の女性労働にたいする消極的な意識に後押しされていた⁽⁵⁾。

〈吉川のケース〉

吉川は、高校2年の頃から保育志望で進学を考えて進路相談室の教師に相談していたものの、学校見学はしなかった。短大と専門学校を2校受験して失敗したのち、医療福祉系専門学校に合格。医療を学べる学校ながら保育の資格も取れるということで、保育コースに進んだ。しかしながら、現実には保育の授業が全くなく、医療の授業ばかりで、講師にクレームをしたが曖昧な対応をとられ、9月に退学した。「[辞めるときに後悔した?] いや。でもなんかやっぱり友だちとせっかく仲良くなったのに、辞めちゃうのはちょっとやだったけど、でもそこにいるのも絶対いやだったから別に後悔してない。なんだろ、なんかやっぱり先生とか全然信用できないし、あとやってることが違うっていうのがあんまり」。その後、退学して5ヶ月経ったインタビューのとき、彼女は働いていなかったが、それにたいして父親は「働かないでもいいよ」、母親も「焦らずゆっくり見つけな」と無職でいることに寛容で、彼女は保育士になるために別の学校に進学することも考えていない。

3. 学校生活を支えるファクター

1節では、高校3年時まで抱いていた進路意識や将来展望が進学後の学校生活のなかでどのように維持・発展するか、あるいは揺らいでしまうのかについて描いた。ここでは、将来展望を見据えた学校生活を支えるファクターとして、家族関係、学校での人間関係、授業、の三つに焦点をあてて検討したい。そして、それらがどのように多くのインタビュー対象者に見られた積極的な学校生活の送り方に影響しているのかについて描いていく。

1) 家族関係

専門学校の授業料は、無償（公立の技術専門校）から年間100万円近くまでばらつきはある。高校時代からやっているバイトなどで貯めた自分の金で入学費、授業料を納めている母子家庭の岡本をのぞき、授業料等通学にかかる費用は、基本的に親が負担していた（深川のばあい姉が勤務先から借金をして学費を工面している）。

また、経済的な支援のみならず、入学以前の段階から、親が子どもの選ぶ進路を応援する態度を表明しているケースがみられた（岡本、小林、根本、小玉、坂本、深川、加藤、人見）。都立の職業技術専門学校に進学した小玉の場合は、小学生の頃から自動車に興味があり、6年生のとき父親に山のなかで自動車を運転させてもらったり、高校2年から父親の自動車を改造したりなど、親は息子の興味関心が自動車にあり、高1の頃から明確になりはじめていた整備士になるという夢にたいして早くから賛成していた。

さらには親と同じ職業を目指す（その職業にたいする具体的な将来展望を親の生き方をモデルにして描く）といったケース（加藤）、また親の助言を子どもが受け入れるケース（足立、深川）⁽⁶⁾もみられた。いずれにしても、学校生活をポジティブにかつ円滑に送るうえで、家族の経済的、文化的、感情的な支援は重要なファクターになっている。

〈加藤のケース〉

彼女は、高校2年の進路を考える時期になったとき、父のように設計士になるか、母親がしている看護師になるかで迷っていたが、自分にあっている看護師の道を選んだ。両親に相談したとき、父親は「この時代になると資格もっていたほうがいい。きょうだい一人はお母さんと同じ仕事についてほしい」とい

う希望を抱きつつ基本的には、「自分の好きなことをやんなさい」と看護師になる道を応援してくれたそうだ。教育実習で高校に戻ってきた先輩が通っている看護系短大の話聞いて、オープンキャンパスに行き、受験を決める。受験勉強をしている間、彼女は母親との会話のなかで、母親の勤務先の病院でその日起こったことなどを聞いたりしていた。結果的には、志望していた短大2校および専門学校を不合格になり、滑り止めのY県立看護学校に進学する。

隣接する県に一人暮らしをしている彼女に、両親は新車を購入し、家賃光熱費等含め月額10万円の仕送りをしている。帰省すると姉二人は自炊していることをほめてくれるなど優しく接してくれるようになったそうだ。また、看護師をしている母親の影響は、高校時代から病院の様子を聞いているだけでなく、母親の情報で彼女が夏休みにボランティアを母親の知り合いが勤務している病院で行ったことにも表れている。今その病院の奨学生制度に応募しようと考えている。また、彼女の看護師としての将来展望は、まずは大きな病院や大学病院で若いうちは経験を積んだのちに、歳をとってから小さい病院に勤務するというものである。母親のアドバイスが直接にあったかどうかはわからないものの、母親がいろいろな病院で勤務したのち、いま普通の規模の総合病院で勤務しているということを語る事ができる彼女にとって、なんらかの母親の看護師としての生き方がモデルになっていると考えられる⁽⁷⁾。

2) 専門学校でつくられる人間関係

「やりたいこと」「なりたいこと」の意識を維持し、その上で学校生活を自己実現のために活用できる生徒たちの多くが、豊かな人間関係を形成していることに気づく。専門学校で知り合ったクラスメイトと交流し、一緒に試験勉強や実習に取り組んだり、定期考査終了後飲み会を開いたり、専門分野の情報を交換するなど学校生活をお互いに支えあう関係がインタビューのなかでうかがわれた(小玉, 根本, 小林, 深川, 加藤, 人見, 市川, 岡本)。

〈加藤のケース〉

Y県の看護学校では、九州や佐渡をはじめ各地から進学してきたクラスメイトも彼女同様に一人暮らしをしている。彼女は仲のよい友だちと夕飯を一緒に食べたり、勉強したりしながら「みんなで助け合って」いるという。基本的な

ベッドの作り方、ガーゼの渡し方などの技術を放課後学校に残って練習する場合も誰か仲間と一緒にやっている。テスト60点以下は再試、それに不合格になると来年再履修になる評価システムのなかで、「それで（再試）落ちちゃったりした子は、やっぱ勉強、もうしたくないっていう子」も出てくる。そのなかには半年過ぎる頃になると学校を辞めたいという友だちもいて、酒を飲みながら、彼女たちの話を聞いてあげることもあるという。彼女自身、「自分で今もわかんないんですが、向いているのか向いていないのか見えない」と感じるときがある。そのときに、一緒に実習をしているクラスメイトをみて「あーこの子いいなあって、練習の中で援助とかされたりしてると、ああ、やっぱこういうところが気遣っててうまいなあとか思ったり……ちゃんといろんな人を気遣って話しているから、ああ、こういう人ならいい看護師になれるんじゃないかなーとか、自分で思う」と常に「なりたい看護師イメージ」を周囲の人から想像し、自分もがんばろうという気持ちになっている。

また四大や短大と比較して専門学校では、異年齢層によってクラスが構成されているケースが多い。高校卒業してすぐに進学したインタビュー対象者の多くも、試験終了後の打ち上げなどで年上のクラスメイトと交流をしている（クラスのイニシアティブは年上の者がとっているばあいが多い）。その交流で礼儀などの社会的スキルを学んでいるだけでなく、年上のクラスメイトはいろいろな経験（何年か働いていたり、失業の経験があったり）を語ってくれる。そうした年上のクラスメイトは、学校生活を送る上でとても頼りがいのある存在として重要な位置を示している。「相談とかすると、同い年だと『そうだよー』で終わるところが、年上の人だと『でもこうじゃない？』とか『いきがってるよ』とかはっきり言ってくれるんで、ああ、すごいなーって。〔相談をするんだ？〕してますね。26、27歳で、高校卒業してバイトしながら準看の免許取ってやってたんだけど、正看取ろうって入ってきた人で、経験豊富な人です」（人見）。

3) 授業

①関係性を生み出す授業

クラスメイトとの関係性はインフォーマルなかたちで作られるだけでなく、カリキュラムのなかに互いに関係づけられる授業があるかどうかもまた学校生

活を送る上で重要になっているように思われる。看護学校でのガーゼの渡し方やベッドの作り方（加藤）、自動車整備学校でのエンジンの組み立てなどは、実際の作業は個々人で行われるものだろうが、同じカリキュラムで実習が行われることにより、作業過程を互いに目にすることができ、それぞれに不得意な部分や理解できなかった部分に関して実習後に語りあったり、クラスメイトと練習を行ったりできる（加藤の場合は放課後学校に残ったの練習であり、小玉や根本の場合は友だちの所有する自動車やバイクの調子をみたりすることなどである）。また、岡本が通う俳優などを育成する専門学校の場合、実技の授業が必須であり、俳優志望のクラスメイトと夜遅くまで一緒に練習をしたあと（インタビュー時、パフォーマンス学科全員で文化祭で喜劇をやるための準備中だった）、一緒に夕食をとったり、演技の勉強のために芝居を観に行ったりしている。

それと対照的だったのが、山田と足立のケースである。公務員試験を目指す専門学校に通っている足立の場合、その学習スタイルは個人学習である（詳細は5章を参照）。建築設計関係の専門学校に進学した山田の場合、製図作成という実習がむしろクラスメイトの設計している姿を目にするなかで、アイデアが思い浮かばない自分に自信をなくしていく方向に機能してしまっているのではないか。彼らが通う学校においては、クラスメイトとの関係（一緒に目指す職業にむかってがんばっていこうという志向性をもつ関係）を生み出す共同性をもつには弱いと考えられる。

②職業イメージを具体化する授業

専門学校のカリキュラムは生徒の職業イメージを具体化し、自分が卒業後どのような仕事の世界に入っていくのかの見通しをよりクリアにもたせる機能をもっている。とりわけ技能実習のある専門学校のばあいはそれが顕著である（根本、小玉、市川、人見、加藤、岡本、小林）。

〈人見のケース〉

人見は、幼い頃入院していた祖母を担当していた看護師がてきぱきと仕事をしながら、看病していた母親の精神的苦痛を理解した接し方をしていたのを見て、困っている人の役に立ちたいという強い気持ちをもったことがきっかけ

で看護師になりたいと思った。

都立の看護学校に進学し、インタビュー時には彼女は載帽式を済ませていた。「ああ、看護婦さんになるんだあーっ」そういう実感を少しずつ抱きはじめてきたという。その後1週間ほど病院実習を体験した。「なんか大変でした。初めての实習だったんですけど、一人の患者さんを受け持って介護をしていく……患者さんの病状に合わせて、やるべき世話とかが違っていたりして、それを考えていくのが大変」だったそうだ。入学から8ヶ月経って、これまで抱いていた職業イメージとの比較を質したとき、彼女はこう答えた。「看護婦さんのイメージって、常に『優しい』だったんだけど、実際は患者さんにはすごい優しいんだけど、学生には厳しくて、『邪魔』みたいな感じで、冷たいんですよー。それがショックだったっていうのとか」。彼女は病院という臨床現場で学生でありかつスタッフとして、指導的立場にある看護師にくっついて看護の補助をしながら学んでいる。実際の現場がどのように動いているのか、どのように看護師は立ち振る舞っているのかを肌で感じながら、先輩の看護師から学びとっているのである。「カルテとか全部英語とかドイツ語じゃないですか。読めねー、って思って、勉強しなきゃって。……かなりきつたない字で書いてあるのにそれを読めちゃう看護婦さんがすごいなーって」。なりたいから多少辛くても何とかしようという彼女の、看護師イメージは次のように具体的になっていた。「必修とかで患者さんと触れ合う中で、援助をしてあげるんじゃないかってさせてもらうんだなって実感するようになった。あと、患者さんの病状とかをちゃんと知ってないと、援助もできないし、何もしてあげられないっていうか、大事だなって」。

4. まとめ

高校卒業後の進路として専門学校を選択した青年たちの専門学校での学校生活1年目の様子をインタビューから浮かび上がらせることを本章の目的とした。まず1節において進学以前に抱いていた「やりたいこと」(進路意識)が、学校生活を送る上でどのように変容していくのかについて描いた。彼ら彼女らの語りから、「やりたいこと」をはっきり持つ青年ほど、ハードな学校生活に適

応している様子、また「やりたいこと」があいまいなまま進学した青年においても、実際の職業能力形成に必要な専門的な学習を修得していく環境のなかで、自分が卒業後歩むだろう道がはっきり見えてくる様子がかがわれた。しかしながら、「やりたいこと」を抱いていても、それによって充実した学校生活を送れるとは限らないケースも見られた。そこで2節において、「家族関係」「専門学校における人間関係」「授業」の三つのファクターに注目し、それらが青年たちの「やりたいこと」を実現可能なものにしていく積極的な学校生活をどのように支えているのかを描いた。積極的な学校生活を送っている青年たちは、家族の経済的、文化的および感情的な支援に恵まれており、クラスメイトとの間に形成される「専門学校固有の関係性」(後述)に支えられ、技能実習をふくむ専門的な授業を通じて「自分が卒業後つくだらう職業世界のイメージ」を形成していることがわかる。以上、かような描写から、専門学校進学者のうち、とくに養成施設に認定されている公的職業資格取得を目的としている専門学校、およびカリキュラムに技能実習のある学校に通う青年たちは、進学した1年目から比較的安定した「学校から仕事への渡り」をしているように思われる。

最後に、今後さらに丁寧に深めていきたい論点を提示したい。

イ) 「やりたいこと」と専門学校への進路選択

インタビュー対象者のなかには、最初からある特定の職業につきたいという希望をもち、その実現のために最初から専門学校進学を選択した者のほかに、四大や短大を受験し不合格になった者もいた。とはいえ彼ら彼女らは、専門学校進学を単純に「大学に落ちたから専門学校に」などと悲観していない。「やりたいこと」に必要な技能や資格を身につけるために、結果的に専門学校であろうと、そこに積極的な意味づけをしながら通っている。また、短大か専門かという選択時においても、例えば「あの短大ではミュージカルが主だから、演劇が主のこの専門を選ぶ」(岡本)というように各学校のカリキュラムが自分の「やりたいこと」に適っているかどうかという基準で選ぶ者もいるため、「学力はないが、卒業後すぐに働きたくもなく経済的には進学できる条件」をもつ生徒が専門学校へ進学しているというまなざしは修正される必要があるのではないか。

ロ) 専門学校と正統的周辺参加

市川のケースのように、進路意識があいまいなまま専門学校に進学した者が、技能実習のあるカリキュラムを通じて、「職業的アイデンティティ」を形成し、卒業後の将来展望を抱いていく状況をどう理解したらいいのか。自動車部品の組立てなどの技能実習や看護学校に顕著な実習を通じて実際の職場に接し、一従事者として仕事に携わるといった経験が、生徒にとってどのような変容をもたらすのかを丁寧にみていく必要がある。その際、「新参者が円熟した実践の本場に広くアクセスし、協同参加することにより、十全的实践者になりたいという欲求によって、動機づけられていき、熟練した古参者になっていく」という正統的周辺参加理論⁽⁸⁾による説明が可能かどうか検討する価値はある。

ハ) 専門学校における人間関係の特異性

「職業世界」へ入っていくためのスキル修得の場である専門学校において、自分がその職業に向いているかどうかを考える機会は少なくない。とりわけ技能実習をしている際に、「やりたいこと」として抱いていた職業イメージと現実とにズレを生じたときなどに。加藤のケースが示すように、実習上の迷いや悩みを共有しともに乗り越えていくクラスメイトの存在が大きい。その関係性はどのようなものなのか。友人関係のような私的なつながりを前提にした関係性とは異なった関係性を有している。学校において「その仕事につきたい」という思いを共有した者たちの間に形成される関係性を丁寧に確かむ必要がある⁽⁹⁾。

ニ) 専門学校進学女性の「自立」に関して

看護学校に通う加藤と人見はそれぞれに、国家資格取得後の将来展望を、「看護師」をベースに考えているため、結婚はまだ考えていなかった(加藤は、大きな病院→中小の病院、将来的には助産士に。人見は、都立病院に10年間勤務後、海外で看護師をすることを漠然とだが考え、ターミナルケアにも関心をもっている)。親もまた、そのような「手に職をもつ生き方」を支持している様子だった。本論で取り上げなかった視点だが、公的職業資格の取得を目的にしている専門学校に通っている女性は、その「やりたいこと」を実現していこうと努力していく過程で、「結婚」よりもまずは職業的自立を果たしたいという思いが強いという仮説が成り立ちうるかどうか検証する価値はある。

ホ) 多様化された専門学校の把握

今回の分析対象者の多くが、養成施設の認定を受けている公的職業資格の取得を目的にしている専門学校に通っている青年たちだった。私たちが継続している調査の対象者のなかで、今回インタビューの機会がなかった違うタイプの専門学校（とりわけ近年増え始めたアニメ制作やゲームソフト制作などのクリエイター養成学校）などに通う学生の学校生活と将来展望について追跡調査したい。

註

- (1) 専修学校の専門課程，一般課程および各種学校を一括りに「専修学校」とした。
- (2) 文部科学省『学校基本調査報告書』。
- (3) 木戸口正宏・竹石聖子・杉田真衣「都内高校卒業生の進路状況にみる高卒後進路の構造－「高校卒業者の進路動向」に関するアンケート調査より－」東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第20号，2003年12月。
- (4) 植上一希「専門学校の分類－公的職業資格の視点から－」『高校生活指導』161号，2004年。
- (5) 中退後の生活については，1章を参照。
- (6) 足立と深川の親(ともに母親)の助言には，以下のような子どもの適性を鑑みるかどうかという点で差異がみられた。深川の母親は，就職を考えていた子どもに事務職よりは手に職をつけたほうが合っていると助言し，子どもが希望した調理専門学校進学に賛成したのにたいして，足立の母親は「安定した職業イメージ」で公務員を目指す道を子どもに提示し，子どもの公務員試験を目指す専門学校進学に賛成した。
- (7) この点に関しては，ある看護学校講師の話では，「教育機関として最初の就職先を大規模の総合病院にするほうがよいという情報は先輩後輩のなかで流通している」という。したがって加藤の場合，母親の影響だけでなく，学校での人間関係のなかでかような将来展望を形成した部分もあることは無視できない。
- (8) ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウェンガー著，佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』，産業図書，1993年。
- (9) 筆者が他県の看護学生から聞いた話によれば，実習を通じて「クラスメイトお互いの患者との人間関係力や実力がわかり，看護の展開，無駄なく必要なことを実践していく力と知識があり，日々努力している者たち同士が必要に応じて対等に応答(提供)し合えるかどうか」が重要な関係性の基準になっていて，そういうグループがクラスの雰囲気を作っているということである。

第4章 大学進学者の進路選択の背景とその後

有川碧・杉田真衣・藤井吉祥

1. はじめに

高卒労働市場の大幅縮小にともない就職することが困難となっている現在、高卒後に非正規雇用労働者となる者と同時に、大学進学者も増加している⁽¹⁾。18歳人口が減少するなか、大学が学生確保のため推薦枠を拡大したり、AO入試など入試形態を多様化させたりしていることもまた、特にB高校などいわゆる中堅以下の高校からの大学進学を容易にしている。

本章ではこのような状況において、本調査における四年制大学・短期大学（以下「四大」「短大」）進学者18名（表1参照）が、どのような経緯と背景から大学に進学するにいたり、大学入学後はどのような生活を送っているのかを検討することを通じて、現在の大学進学者のありようを浮かび上がらせることを試みる。

2. 大学へ進学した経緯と背景

ここでは、四大・短大進学者が大学という進路を選択するにいたった経緯とその背景を見ていきたい。

1) 学費の負担と入試形態

まず多くの場合、親が学費を負担している。奨学金利用者は3分の1以下であり、受給の可否には成績が関係するため、希望してもできなかった者もいるが、その場合でもアルバイト代を学費にあててはいない。つまり全体的には、家庭に経済的な余裕のある者が大学に進学しているといえる。このことは、大学に合格しながらも経済的な事情で進学を断念し、就職したケース（村岡，2章参照）があることからわかる。

また、推薦試験で入学している者も多く、一般試験で入学している者は5名（うち四大2名）のみである。

2) 大学進学を考えた時期・経緯

次に、大学進学を考えた時期と経緯に注目すると、大きく二つの層にわかれ

る。一つは高校入学前から大学進学を考えていた層であり、もう一つは高校入学後に大学進学を考え始めた層である⁽²⁾。以下、それぞれの層について詳述したい。

表1 四大・短大進学者

名前	高校	学部	入試	父学	母学	兄弟学歴	大学進学を考えた時期・経緯
桑田泰宏	A	中国語中国文学	推薦	高卒	高卒	姉大学院	中学の時に始めた中国語の勉強を大学で続けたいと思った。
下田洋平	A	経済	指定校推薦	大学中退	不明	姉二人専門卒	中学に入った頃から教員になるというイメージがあった。
原島智史	A	電気工学	指定校推薦	専門卒	高卒	弟高校生	中学の時は公務員、高校入学後は技術者・電気関係を希望。
和田亮	A	経済	一般	不在	短大卒	妹高3・妹中3	高3の夏休みまで何も考えず、考え始めたらすぐに決定。
山口里沙	A	体育	推薦	別居・大卒	専門卒	弟中学生	中学の時から体育教師を志望。成績から専門進学も考えたが体育大に。
福島珠希	A	日本語日本文学	指定校推薦	大卒	専門卒	弟中学生・妹小学生	中学の時から海洋生物に関わる職業につきたいと考え、高2で専門学校をみつけるが、やめて大学に。
木村ちはる	A	体育	推薦	高卒	高卒	妹高2	時期は不明。小学生の時からしているバスケを続けたかった。
窪田千秋	A	生物工学	指定校推薦	大学中退	不明	専門	特にやりたいこともなく、父親に勧められてなんとなく決めた。
川辺聡子	A	動物	一般	大卒	大卒	姉大学生	中学の時に飼い犬が死んで、獣医になって治したいと思った。
松井由里	A	短大・保育	指定校推薦	大卒	大卒	姉大卒・姉大学生	小2の時から保育士になりたかった。高1の時から行きたい短大があった。
君島朋子	A	短大・経営	一般	大卒	専門卒	兄専門	看護志望だったが、海外旅行がきっかけで高3で旅行関係志望に。専門進学を親に反対されて短大に。
神崎晶子	A	短大・保育	一般	専門卒	短大卒	兄高卒	小学生の頃から保育士になりたかった。
大島準	B	中国語中国文学	推薦	大卒	別居・非大卒	姉短大卒	高2の中間あたりから行きたいと思った。
川本裕	B	福祉	推薦	高卒	高卒	姉二人高卒	中学の時は就職を考え、高校に入ってから大学を考えた。
平川信一	B	環境	指定校推薦	高卒	高卒		高2までは就職を考えており、高3になってから大学を考えた。
石津和義	B	商	推薦	不明	不明		家業を継ごうと思っていたが、親の意向などから大学に。
丸川真一	B	短大・運輸	一般	不明	不明		就職試験が不合格となり、短大へ。
若林理絵	B	短大・英語英文学	指定校推薦	別居(継父)	高校中退?	妹高校生・弟中学生	就職か進学かで迷った(友人談)。B高校に入って勉強が好きになった。

まず、高校入学前から大学進学を考えていた層である（桑田，下田，山口，福島，窪田，川辺，松井，君島，神崎の9名。みなA高校）。この層の家族の学歴を見てみると、父親が四大卒あるいは中退の者が7名，母親が四大・短大卒の者が4名と，多くの親は高学歴であることがわかる⁽³⁾。また，進路選択に関して親から「今の時代は（大学に）行かないと就職もろくにできない」（桑田），「専門学校より短大の方がいいんじゃないか」（神崎）などといわれていたり，親が大学に進学するよう勧めているケースが見られる。さらに，窪田の父親が大学の資料を集めたり，福島の母親が子どもと一緒に大学見学に行っているというように，意見をいうだけでなく具体的な支援をしているケースもある。またこの層には通塾している者が6名おり，これも家庭に経済的な余裕があるためではないかと考えられる。これらのことから，この層が大学進学を選択した背景には，家族が高学歴であること，親の意向や支援があること，そして大学進学を可能とする経済的条件があることが見受けられる⁽⁴⁾。

一方の，高校入学後に大学進学を考え始めた層（石津，川本，平川，丸川，若林の5名，みなB高校）は，以前は就職を考えていたり，就職か進学かで迷っていた者たちである。この層の両親は，学歴不明の2名以外高卒後に進学しておらず，上述の層よりも低学歴である。また，この層には塾に通う者もいない。では，この層が大学進学を選択した背景には何があるのか。顕著であるのは担任など高校教員からの勧めや働きかけがあったことである。平川は就職を考えて無遅刻・無欠席だったところ，高3になって担任に「成績がいいから大学に行ってみれば」といわれて大学進学を考え始めた。生徒会役員の川本の場合も，推薦試験の願書を出す直前まで受験校をしぼることができずにいたところ，「校長先生とか全部出ていらっしゃって」どうするのかという話になり，教員たちに体験入学に行くようにいわれた大学へと進学している⁽⁵⁾。1節で述べたような就職の困難さと大学進学の易化は，以前ならば正規就職していた層が一定数大学に流れるという状況を生んでいるが，教員に働きかけられて推薦で家族初の大学進学者となっている平川や川本のケースは，いわば「新規参入層」の進路選択過程のあり方を表しているといえるのではないだろうか。

3) ジェンダー

大学進学という進路選択にはジェンダーも影響していることが見受けられる。B高校の大学進学者は、短大の若林以外みな男性である（進学を断念した村岡も）。また下田の姉は二人とも専門学校卒、川本の姉は二人とも高卒である。これらのことから、本人たち自身の選択意識とともに、教員や親が女性よりも男性に大学進学を勧める傾向があるのではないかと推測される。事実、B高校で教員の勧めで大学進学を選んだ者はみな男性で、女性では専門学校進学希望を教員のアドバイスで大学に変更したA高校のケースがあった程度である。

その他、女性は男性に比べて浪人避ける傾向にあることが私たちが行った別の調査からわかっており⁽⁶⁾、四大が不合格となって短大に進学した君島は、男性であれば浪人していたかもしれないと推測できる。また、川辺と窪田は、獣医学・薬学の大学が不合格となり、理系で分野の異なる学科に進学したが、男性であったら浪人していたことも考えられる。

4) 小括

大学進学者が高卒後の進路を選択するにいたった背景を見てみると、まず大学進学を可能とする経済的な条件があり、また高卒労働市場の縮小と少子化による大学の推薦枠の拡大という状況があるなかで、推薦入試で入学している者が多いという全体的な傾向があった。さらに、大学進学者は高校入学以前から大学進学を考えていた層と考えていなかった層とにわかれた。前者は親が高学歴であったり親の意向・支援があったりしていたのに対して、それらがほとんどない後者には高校での好成績と教員による働きかけがあった。さらには、ジェンダーの要因が進路選択に作用していることも推測された。

3. 大学進学後の状況—「大学種別」ごとに見るそれぞれの生活・将来展望

それでは、大学へと進学した者たちはその後どのような生活を送り、またどのような展望を持っているのだろうか。個々のケースを追っていくと、四大と短大、また学部・学科といった大学の種別によって大学生活や将来展望に違いが見える。ここではその種別ごとに見ていきたい。その際、本章で扱うケースは18名と多く、紙幅の関係から全ケースを記述することはできないため、典型例をあげていくこととする。

1) 四大一文学・工学・経済学部系へ進学したケース

まず、「大学で学ぶ学問」と聞いて比較的多くの人がイメージするであろう、「文学」、「工学」、そして「経済」の方面へ進学したケースを見ていきたい。

桑田は、中学の頃から中国語に興味があり、中国文学の専攻に進んでいる。進学後の聞きとりでは「中国語が楽しくてしょうがない」と答えており、わからないところなどは教員に質問するなど積極的に学び、成績はほとんどの科目がAである。自分の興味と大学での授業が結びついており、授業を通じてその興味をより深めようとしている。また彼はアルバイト先でも客や仲間とのかかわりを楽しみ、友人と都心に買い物に出かけもするなど、多方面で活動している⁽⁷⁾。将来展望に関しては、高校のときから中国語をいかせる「スチュワード」を志望していたが、報道関係も考えはじめるなど選択の幅も広がってきている。

一方、和田は進路自体について考え始めたのは高3の夏休みからで、それまでは何も考えていなかったと語り、経済学科へ進学しているものの経済に興味を持っているわけでもない。将来の職業に関しては、「大学に入ってから決める」と高校時には話していたものの、大学1年目の調査時にも車関係（F1ドライバー）・料理人・按摩士などと話しており、およそ大学の授業との関連は見られず、かなり漠然としている。

桑田は自分の興味が授業や将来展望と強く関係しているのに対し、和田は興味と授業との間に関連がない上に将来展望はあいまいであり、両者のケースは対照的であるが、いずれのケースにおいても、大学で学ぶことと関連するかどうかは別として、4年間の大学生活の中で徐々に進路を明確にしていこうとしている点では共通していると思われる。

2) 四大一体育大学へ進学したケース

次に、体育大学へ進学したケースを見る。

山口は中学時代から体育が好きで、体育の教員、もしくはスポーツトレーナーを志望し、体育大学に進学した。大学では、高校時代から続けているハンドボールを部活で継続している。その活動時間は授業を除いた朝7時半から夜10時頃までであり、部活が大学生活の大部分を占めている。時間的に拘束されているだけでなく、肉体的にも疲労し、上下関係や規則（提出書類を書く際に使うボー

ルペンの指定など)も厳しい。授業に関しては、講義は体育に関する新たな発見ができ、実技はレベルが高いということで、両方とも楽しんでいる。将来展望については、「できれば体育関係の仕事につければ」といい、教員免許を取得する予定である。一方で就職活動は部活で忙しくできないため、引退後もしくは卒業後にするのが通例なのだそうだが、就職できるのかという不安があると語っている。同じく体育大に進学した木村からも同様の話を聞くことができた。

このように体育大学進学者は、まず学校に拘束されているような状況にあるといえる。その大きな要因としてあげられる部活動は、先輩の姿を通じて学年ごとの生活など在学中の4年間の道程を明確に見通すことを可能にしていると同時に、在学中の就職活動を困難にしている。その結果、卒業後の展望となると途端にあいまいとなる傾向がある。

3) 四大一その他の学部・学科進学者

次に、近年新設された、「全国で唯一の学科」(以下「唯一学科」)のケースを見ていく。

その前に「唯一学科」について述べておきたい。学部の新設改組は、設置基準が1991年に大綱化されてからより容易になった。1991年の時点で約100あった学部は、2002年には273と3倍近く増加しており、学科は1400種類ほどになっている⁽⁸⁾。そしてここ数年、「唯一学科」が毎年新設される学科の約3割を占めている。この「唯一学科」の名称には、大きく二つの傾向が見られる。一つは「環境機械システム工学科」のように分野を表す単語が複数つなげられるか、「リベラルアーツ学科」のようにカタカナ一語で大きくくりにされることによって領域が広がる傾向であり、もう一つは「アニメーション学科」のように分野が限定され、専門学校の学科名称とも似る傾向である⁽⁹⁾。いずれにしてもこれらの学科は、受験者にアピールできる名称を掲げるなど、学生の確保のために設立された面が大きい⁽¹⁰⁾。

川辺は獣医を志望していたが、獣医学系の大学を不合格となった後に、理系の大学の動物関連の学科に進学している。彼女が進学した学科は2002年に新設された「唯一学科」であり、ある程度分野に特化された名称であることから、

上述の二つ目の傾向にあるといえる。資格取得が可能であることから、専門学校に近いといえるだろう。彼女は学芸員の資格取得を「なんとなくあった方がいいかな」と希望しており、そのための特別講義を受けている。またドッグトレーナーと動物看護師の資格もとる予定である。その他にペットフードの会社への就職も考えており、最終的に何をするかは「まだ決まってない」という。

このようにまだ将来展望ははっきりしていないが、その要因の一つには「唯一学科」の内容やねらいのあいまいさがあることが推測される。

4) 短期大学進学者

最後に短大進学者のケースを見ていく。

神崎は、短大の地域保育科の2部（夜間部、在籍期間3年）に通っている。保育士の免許を取得する予定であるほか、試験を受けてケアヘルパーの資格も取得したいと話している。カリキュラムには1年次から図画工作などの実技科目が入っており、2年次の後半には児童館や養護施設での実習、3年次には保育園での実習があるという。2部には保育園で働いている年上のクラスメイトたちがおり、保育士の仕事について具体的な話を聞いている。2部に進学したのは「(昼間)保育園で働きたいってのが一番大きかったから」とのことで、実際に私立保育園でのアルバイトを自分で探して見つけ、朝から午後までそこで働いてから大学に行くという生活をしている。保育園でアルバイトをすることで、彼女は現場が「思ったのと全然違う」こと、保育士の仕事は「子どもが好きだけじゃできない」ことに気づいている。卒業後は、現在のアルバイト先に就職する予定である。

神崎は、四大進学者と比較すると、かなり明確な将来展望を描いているといえるだろう。彼女の場合、先輩の話やアルバイトを通じて保育について具体的に学んでいるが、大学が資格を認定するために専門的・実技的なカリキュラムを組んでいることも、卒業後の職業についての具体的なイメージを描きやすくしているのではないか。また、在籍期間が短いために、四大進学者よりも早く卒業後について具体的に迫られていることも考えられる。このように、資格認定のための専門的・実技的な科目を通じて、短い在籍期間のうちに将来展望を明確にしていることがうかがえることから、短大は四大よりも専門学校に近い

といえるのではないだろうか。

しかし、短大と専門学校との間には大きく異なる点もある。神崎は、学校での勉強についてたずねられた時に「役に立つ（図工などの『実技的なもの』）のもあるけど」、「なんか、なんだ、発達とか、健康とか、他はなんなんだろう、んと、何があるかな、障害児保育とか、そういう環境問題とか、そんな感じ」のものはあまり役立つと感じないと話している。発達や環境問題などは理論の授業であり、なかでも環境問題は、保育の理論というよりは教養教育の授業であることが推測される。短大と専門学校では設置基準が異なり、短大では教養教育の授業も多く受講しなくてはならないが⁽¹¹⁾、そのことが上述の神崎の語りからうかがえる。

もう一つ、短大と専門学校が異なる点として、外からの評価の問題を指摘しておきたい。短大は四大に近い教育機関であり、専門学校よりも「ステイタス」が高いとみなす「世間的な評価」が親や教師を中心に存在する⁽¹²⁾ことが、短大の経営系学科に進学した君島のケースから推測される。彼女はツアーコンダクターなどの仕事がしたいということで四大への進学を希望していたが、その後旅行関係の専門学校に行きたくなったという。しかし母親は専門学校への進学を反対し、四大を受験するが不合格となり、四大に編入するならよいといわれて短大に進学した⁽¹³⁾。希望する進路とは異なる学科に進学したため、「(短大には) 行っている意味がない」といい、卒業後専門学校に入り直すことも考えている。彼女は母親が専門学校への進学を反対した理由について、「親のなかでは、うちの娘はどどこ大学にとかそういうのがある」と話している。また高校で教員に相談した際にも、一人には「専門の方がやっぱり専門的だし就職率も100%だから」といわれたが、担任教諭には「大学の方が伝統があるから」「やりたい仕事に向いているのは大学じゃないか」といわれたという⁽¹⁴⁾。

5) 小括

以上見てきたケースについてまとめると、まず四大進学者に関しては、大学、学部や学科とも様々で、それぞれに異なる生活や将来展望をうかがうことができたが、共通していることは、「仕事への移行」までに少なくとも4年間という期間が与えられていることである。その間に、自らの興味を深めたり、将来

の選択肢を広げたりしながら、時間をかけて将来展望を明確にしていこうとしている様子が見られ、総じて「まだ先は長い」という意識があるように感じられる。

それに対して短大は在籍期間が短く、職業教育も行っているところが四大以上に多い。また将来展望に関しても四大進学者に比べ明確であり、基本的には大学でありながらも、四大よりは専門学校に近いといえるだろう。

4. 大学進学者が抱えている困難

前節では、大学進学後の状況を大学種別ごとに追った。その際、比較的「順調に」大学生活を送っているケースを扱うこととなったが、中には「順調」とはいえないケースも見られた。本節ではそういったケースに注目し、その背景を考察することを試みる。

1) 困難を抱えているケース

まず、大学生活において困難を抱えているように思われる3人のケースをとりあげて見ていくこととしたい。

①丸川真一の場合

丸川は、運輸系短大に一般入試で合格し進学した。ただしこの大学はほぼ全入であり、彼はもともとは就職希望で、販売系を希望して受けたが落ち、「あとは自分に似合った仕事がないから」「やりたい仕事が見つからなくて、じゃあ大学行ってから決めようと思って」進学を決めた。短大だと「期間が短いから仕事を早く見つけられる」という言葉も聞かれた。迷っていた時はフリーターも考えていたといい、大学合格を知る前の第1回目の調査では、もし大学に合格しなかったら「今のバイトを続けて、バイトあがりの社員に」と話している。当時、アルバイトはカラオケ店で週6日やっており、月10万円程度稼いでいた。

大学進学後は、「体育が一番楽しい」、それ以外は全部面白くない、簿記が難しくて全然わからなくなったといい、1年で卒業単位66のうち26しかとれていない、と話した。大学の授業は午後からだが、アルバイトを夜から早朝までしていて、後期の授業には「全然出てない」「来年は、ま、死ぬ気でやります」といい、サークルも入っていない。将来に関しては、「(大学を)出たいという

か、就職できりゃいいよっていう感じ」「なんか社会人になればいい」、職種については「今は特に何も考えていない」ということだったが、彼の話からは、卒業後のことよりも前にまず2年で卒業することが難しい様子であった。

②窪田千秋の場合

窪田は薬剤師を志望して薬学系の大学の一般推薦試験を受けるが不合格となり、高校の教師から薬剤師に近い仕事につけると勧められるなどして、工学系の大学に指定校推薦で進学した。

その学科について彼女は、「新しくできたところなので行っててもよくわからない」「コンピューターと生物とか物理とかそういうのを一緒にした感じ」と話している。彼女はもともとの志望であった薬学系に近いということでこの学科に入学しており、生物や化学を勉強するものと思っていたが、予想外に物理の授業が多いので「大変」と述べている。また高校ではとっていない科目習得も前提とされて授業が進められるため、そういう学生のために「補講みたいな」ものもある。前期試験はぎりぎりながら単位はとることができたということで、「困難」というほどのものを抱えているとはいえないが、比較的難しい状況にあることがうかがえた。

なお就職については、その学科を卒業すると「なんかいっぱいなんでもできるみたいな感じで、そのそういう道（薬学系）にも進めるし、またもし他にやりたいものができた時に幅広くできる」というように、選択肢の多様さについて語っている。「一応医療系か、環境の方も迷っていて」といい、それらを詳しく学ぶ「系」に進めるのは2年になってからで、今の段階ではまだ詳しいことはわからないという。

③若林理絵の場合

若林は、短大の英語英文学専攻に指定校推薦で進学。映画（洋画）が好きで翻訳の仕事に憧れ、大学で中学校教員免許の資格をとって、将来的には「字幕とかの仕事をやりたい」と語っていた。初回調査時には、「礼儀作法を重視した学校」などと大学の良さをいろいろと語っているが、約1年後の調査では「もともとホントは趣味の方に将来考えたかった（漫画、イラストやゲーム）けど、やっぱり親が反対するから、だったらもう1個まじめにできる英語の方

行こうかなとか」思っていたと明かしている。また彼女の友人も、彼女が「就職しようか、大学に入ろうか迷っていた」といっている。

実際入学後は、入学前に思い描いていた姿とのギャップに悩まされている。「まず、入った大学を間違えましたね」「速過ぎて授業に追いつけないし、吸収したいけど自分の力じゃ、吸収しきれないほどの量だったし。もういくつも授業落として」という。出席が非常に厳しく、授業もとても忙しい状況であるとともに、授業中の居眠りは怒られるだけでなく後日面談などで注意される、といったように学習面以外での規定も厳しい。さらに目指していた中学校教師の免許取得は、前年のうちにとらなければならなかった英検準2級をとることができなかったために現状況では不可能となってしまった。やりたいといっていた翻訳の仕事も、「今は文法も無理だから和訳もきついな、と思うし、今はどっちかっていうとちっちゃい子たちに教えたいな」と語っている。

また彼女は、家庭的にも様々な困難を抱えている。母、弟、妹と暮らしているが経済的に苦しく、母は病気がちで家事などを彼女に頼っている。家での勉強については「日中なんて集中できない」といい、「一生懸命、必死こいてがんばってんのに」単位を落として叱られたことに不満をもらしている。母の目がうるさく外出も厳しく規制され、趣味も母には理解されず反対されている。家庭への不満が、学校への不満以上につのっている様子で、「就職したらどうなってたんだらうとか」を「ひたすら今は考えてます」との状態だという。卒業後は「(四年制に)編入しようか」「それとも辞めて、お金貯めてから別の大学入るか」「海外に留学行っちゃおうかなとか。っていうか親元離れたいんで」と迷っており、「趣味の方に走るのはやっぱし選べないから」、「あきらめようかな」と語っている。

2) 困難の要因

以上、3人のケースを見てきた。彼ら彼女らの抱えている困難には複合的な要因があると思われるが、三つのケースを丹念に見てみると、大まかには三つの要因があることが推測された。以下、その要因について考察していく。

①「新規参入層」

丸川は、最初から就職希望であったが失敗して短大進学に志望を変更した。

2節において、本調査における大学進学者のケースは、大学進学を視野に入れた時期によって大きく二つの層にわかれることについて述べた。そのうちの一つは、高校に入ってから大学進学を考え始めた、本稿では試みに「新規参入層」と呼んでいる層であるが、丸川のケースはこの層に入る。そのことと彼が抱える困難とは関係しているのではないか。

大学について丸川は、授業が面白くなく出席していないと話している。他の「新規参入層」のケースはどうかというと、平川は、「(大学生活には) やっと慣れたって感じですよ」、「やっぱり勉強面が(慣れるのに時間がかかった)。いちおう行ってたのがB高校だったんで、やっぱB高校の学力から大学の学力に上げるまで相当時間かかったんで」と話している。B高校の進路指導担当教員によれば、B高校の進学者はみな推薦で合格しており、4(2)年で卒業できない者もいるため、合格後に補習を行うこともあるとのことであった。平川は補習を受けたとは話していないが、上述の彼の語りからは、大学進学後に彼が勉強面で苦労したことがうかがわれる。また、人間関係面においても、「大学の人って真面目な人が多いんで……真面目な人とは合わないって感じ」と述べており、大学側によってわりふられたグループ(クラスはない)のメンバーとも上手く付き合うことができていない。また若林は、授業についていくことができなかったり、大学側が設定した英検準2級合格という条件をクリアすることができないために中学教員免許の取得を断念させられたりしている。

以上見てきたように、「新規参入層」には大学生活において、学力面や人間関係面などで困難を抱えているケースが複数見られる。ただし平川の場合、成績は「いい方」で、部活動(野球部)に打ち込んだり同級生の恋人ができたりもしており、充実した大学生活を送っているともいえるだろう⁽¹⁵⁾。ゆえに、「新規参入層」であることと充実した大学生活を送れないこととは必ずしも重ならないようであるが、何らかの困難にぶつかる場合が多いとはいえるだろう。

②「唯一学科」進学者

窪田は、入学前には受講することを想定していなかった科目の勉強に苦心しているうえ、入学1年目の9月の時点でも大学について「新しくできたところなので行っててもよくわからない」と話している。また、将来つく職業について

は、まだ具体的に考えていない。

彼女が通っているのは、3節3項で述べた「唯一学科」(2003年新設。カタカナで分野が大括りにされた名称)である。同じく「唯一学科」に通う川辺も、入学前には数学の授業があると思っておらず、戸惑っていることがうかがえた。また窪田と同様に、当初は一つの専門的な職業につくことを目指していたが、「唯一学科」に進学する⁽¹⁶⁾ことで、進路の選択肢が多様、かつあいまいになっていた。川辺の進学先の場合、資格の取得が可能だということだが、動物にかかわる新しい資格がどれほど就職に結びつくかは定かではない。彼女たちの所属する学科からはまだ卒業生が出ていないので、「唯一学科」を卒業すると実際にはどのような職業につくことになるのかはまだ確認することができない⁽¹⁷⁾。しかし、少なくとも現時点では学科と職業の結びつきがあるのかどうかははっきりとしておらず、就職活動を行う年次になったときに彼女たちが困難にぶつかることが予想される。

③親子間の齟齬

若林のケースでは、学校生活面において困難を抱えていることがうかがえたが、それだけでなく、家庭的にも激しい葛藤を強いられていることが見受けられる。前述したような外出の規制など以外にも、「(娘を)女の子らしくしたいんじゃないですか」「自分ができなかったことをしてほしいとか……」という思いが多いんだと思うんです」と語っており、母親に自分の趣味が理解されず、「子どもっぽいところは全部捨てなさい」といわれ、服なども勝手に買ってくるといった生活面での細かい束縛も感じている状況である。こうした家族との葛藤の様相は、若林だけでなく他の大学進学者においても、いくつかのケースで様々な形をとって表れている。

たとえば君島は、高校の時から親の大学進学への期待が強く、本当は専門学校に行きたかったが反対され、「二人して泣きながら喧嘩し」た末、「(四大に)編入するならいい」ということで、「全く行く気もなく、仕方がなく」短大に進学したという経緯を持っている。彼女は進学後も四大への編入を考えながら、「本当は今でも短大卒業したら専門に行きたい」と語っている。そういった進路の面での葛藤と同時に、夜の外出中に電話がかかってくるなど、生活面

での親の過干渉も感じており、「全然、うるさい」「厳しい。異常だと思う。かなりむかつく。嫌い」と述べている。

短大に進学し保育士を目指す松井も、「家はすごい過保護というか、異常な心配性」という。友人の家に泊まろうとして自宅に連絡した時、父親が「今から迎えに行くから、準備しろ」とその家の前まで来たことや、夜遊びした日に父親が朝まで玄関で待っていたこともある。また母親も、彼女がそのような干渉から逃れようと「しばらく家を出る」と外出先からメールを送った際に、精神的にまいって吐いたこともあったという。そのような家庭環境で苦慮する彼女は、「前に（大学に入ってから）1回『いい子でいるの疲れた、もう』っていったんですよ、親に」、「したら『いい子じゃないじゃない』とかいわれて」と語っている。このような「いい子でいる」ことの苦しさを表す言葉は、若林からも出ている。彼女は「いつまでいい子でいけばいいのかなって」「私的にはそれなりにいい子にしてるつもりなんですよ。別に非行に走ったわけでもないし」と語っている。

丸川は、「（自分の部屋が母親に）普通にのぞかれます。入ってきたりもする」「言ってもなおんないから。困っちゃいます」と述べている。大学入学後に「親とかいると自由っていう感じがしない」「一人になる時間が欲しかったから」一人暮らしをしようとしたが母親に「まだ甘ったれだから」と反対され叱られて、家を飛び出したこともある。

以上、家族との葛藤について見てきたが、このことは本調査全体のなかでも、大学進学者にしか見られなかった。それはなぜなのかを、以下では考察していく。

まず大学進学者の基本的性格を考えてみると、親が学費を負担しているなど、引き続き親の扶養の対象となっているということがある。それから、高校は卒業したものの、社会的身分としてはまだ「学生」である。これら経済的、社会的な要素が重なって、親からまだ「一人前」であるとはみなされていないということが、大学進学者の性格であるといえるだろう。このような性格をもつために、外出を制限する、部屋をのぞくなど、親は子どもを自分の保護・管理下に置きたがるのではないか。また、「女の子らしさ」や「四大への編入」を求

めるなど、自分の期待に添うことを強く要求したりするのではないだろうか。一方、子どもは高校の次の段階へと移行したことによって自分は「一人前」に近づいたととらえており、自立志向を強めているということが「いい子でいるの疲れた」という言葉などから推測される。そのため、親子間に齟齬が生まれているのではないだろうか。

このことを他の進路選択者と比較して考えたい（詳しくは各章参照）。正規就職者の場合、経済的に自立し、身分としても「社会人」となっているため、親は子どものことを「一人前」の存在とみなして距離を置いており、親子間に葛藤が生じ難いのではないだろうか。フリーターの場合は家庭の経済的状况から進学を断念している者が多く、家計を援助している者もいるなど、経済的な自立をしている正規就職者に近い位置にあると考えられる。専門学校進学者の場合、親に扶養されている「学生」であるという点で大学進学者と同じであるが、カリキュラムが大学よりも職業に対応しており、「職業」世界に足を踏み入れているといえるため、親に「一人前」になりつつある存在とみなされ、本人たちの側でも親と距離をとることができていると考えられる。最後に浪人の場合は、進学する前の段階にあり、大学進学という課題を目前にして親の期待と子どもの目標が一致しているため、親子間に齟齬が生まれにくいのではないだろうか⁽¹⁸⁾。

5. まとめ

これまで大学進学者について述べてきたことをまとめると次のようになる。

まず大学進学にいたった背景には、経済的に余裕があるという家庭の状況と、高卒労働市場の縮小、少子化という社会的な状況があった。さらに見ていくと、彼ら彼女らは大学進学を考え始めたのが高校入学の前か後かによって二層にわかれ、前者には高学歴であったり子どもの大学進学を希望・支援する親がおり、そうではない後者（「新規参入層」）は教員に進学するよう働きかけられていた。

次に進学後の状況を見ると、四大進学者は時間をかけて将来展望をはっきりさせていこうとしている傾向が強い。これに対して短大は四大よりは専門学校に近いと考えられた。

最後に進学後の生活において困難を抱えているケースに注目すると、その困難の背景には、「新規参入層」であること、「唯一学科」に進学したこと、そして親子間の齟齬があることがうかがえた。

総じて大学進学者は家庭の経済的な余裕から長い時間をかけて将来について考えることができているといえるが、調査時はまだ大学入学1年目であり、〈学校から仕事へ〉の移行についてはまだわからない。「新規参入層」であること、「唯一学科」に所属していることや家族との葛藤が、大学生活の継続や就職に影響するかどうかということも含めて、今後の調査で検討を行いたい。

註

- (1) 芳澤・上間・渡辺・宮島・椎林「統計から見た東京における若年労働市場の変容」前掲, 6-12頁。
- (2) なお高校入学以前に大学進学の有無について考えていたことが明確に確認できなかった大島・和田・木村, および専門学校進学を考えていた原島の4人はこの分類からは省いている。
- (3) 専門学校進学者全員の親の学歴を見ると, 11名のうち, 父親が大卒3名(不明3名), 母親が大学・短大卒3名(不明4名)と大学・短大卒を持つ親は大学・短大進学者に比べ少ない。正規就職者の親の学歴は, 多くが不明であるが, A高校で二人しかいない就職者のうち, 大野は両親とも中卒である(黒川は母親が大学卒であるが, 彼のケースは就職の仕方自体が特殊である)。
- (4) このことは浪人のケースにより顕著に見られる(5章参照)。
- (5) B高校の大学進学者にとって進路指導の影響が大きいことについては, 杉田真衣・西村貴之・宮島基・渡辺大輔「進路多様校における高校生の進路選択の背景にあるもの」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』20号, 2003年)を参照。
- (6) 木戸口・竹石・杉田「都内高校卒業生の進路状況にみる高卒後進路の構造」前掲, 46-47頁。
- (7) この点に関して原島は, サークル活動を大学生活の中心においており, そこで自らの世界を広げている。
- (8) 黒羽亮一『大学政策 改革への軌跡』, 玉川大学出版部, 2002年, 211-233頁。「『商品カタログ』としての学科名称」『カレッジマネジメント』119号, 2003年, 11頁。
- (9) 前掲『カレッジマネジメント』15-16頁。市川昭午は「専攻分野の特化が進む結果, 大学が専門学校化し, 短期大学はもちろん四年制大学でも専修学校と区別しにくいようなどころも生まれてきている」と述べている(『大学大衆化の構造』, 玉川大学出版

- 部, 1995年, 27頁)。
- (10) 天野郁夫「高等教育の構造変動」『教育社会学研究』第70集, 2002年, 48頁。
 - (11) 韓民『現代日本の専門学校』, 玉川大学出版部, 1996年, 152-155頁。また, 短大は研究業績や教職歴が教員となるための資格要件であるのに対し, 専門学校は教員をより自由に採用することができるため, 短大よりも実務経験のある教員が多いという違いもある。
 - (12) 高校教員である大里晃之によると, 以前は, 勉強のできる生徒は四大, 次にできる生徒は短大, 次は専門学校に進学するというイメージが存在したのに対し, 現在の生徒はそれらを並べて比較, 選択するが, 今でも親は大学に行かせたがることが多い(「教師から見た生徒の専門学校指向」『高校生活指導』2004年夏号, 70頁)。
 - (13) 近年, 短大卒の大学編入学希望者は増加している。
 - (14) 神崎も, 専門よりも短大がよいと教員にいわれて受験した短大に進学している。また, 短大の専攻科に進めば「大卒と同等の資格がとれる」という松井の発言にも, 「世間的な評価」の影響が見受けられる。
 - (15) 同じく「新規参入層」である川本のケースを見ると, 彼は高校時から教員など大人に可愛がられることを志向する傾向があり, 高校に比べると大学は教員との距離が遠いと話しつつも, 学会に参加して教授に名前を覚えられたりしている。成績も, 「(授業が) 全くわからずに, どうなるのかな, とか思ってた」といいつつもほぼ「A」であるといい, 高校時代とあまり変わらない行動パターンのまま, 大学生活を楽しむことができているようである。
 - (16) 二人は獣医・薬学の免許取得を大学の不合格によって断念した後, それに近い領域である四大の「唯一学科」に進学しているが, 以前ならば医療系などの短大か専門学校に進学した可能性もあることが考えられる。というのは, 「唯一学科」は90年代以降に急増している学科だからである。窪田の姉は歯科衛生士の専門学校に進学しているということからも, このことは考えられるのではないか。あるいは2節3項で述べたように, 現在であっても, 男性ならば浪人していたこともまた考えられる。
 - (17) 平川もまたそういった学科に進学した一人だが, そこは既に卒業者を出している。卒業した先輩は「普通の会社」に入る人が多いと聞いており, 自分は学科で勉強していることにかかわる仕事につきたいというが, 具体的に考えることはできていない。
 - (18) 家族との葛藤には, ジェンダーも影響していることが考えられる。ここで挙げた4ケースのうち三つは女性であり, さらに彼女たちが夜の外出に対して厳しくいわれるのに比べ, 男きょうだいは行動の自由度が高い。また若林は, 服装にまで「女の子らしく」することを要求されている。

第5章 浪人を選んだ者たちの進路分岐

渡辺大輔

1. はじめに

大学・短大進学率の高まりなど高卒者の進路動向が大きく変化している現在、浪人をしてでも進学を希望する者も少なくないと推測される一方、過年度卒大学・短大入学者（浪人して大学・短大へ進学した者）数は減少している。このことから、浪人生活中に進学から進路変更している者が少なからず存在することが考えられる⁽¹⁾。

本稿では、本調査時において浪人生活を送っている者を取り上げ、その進路選択過程およびその後の状況を、インタビュー調査をもとに詳細に検討して、浪人という進路を選択し、その生活を維持または変更させている背景的要因を探ることを目的とする。

本調査時において浪人生活を送っている者は、A高校から3名（男性2名、女性1名）、B高校から3名（男性3名）の計6名である。それぞれ前回調査時の状況は以下の通りである⁽²⁾。

〈A高校〉

金山克也：四年制大学（体育学科）AO入試に落ち一般入試受験予定。野球をやりたいために大学希望。将来はスポーツトレーナー志望。

木戸貴司：四年制大学一般入試受験予定。家業の雪駄販売を継ぐために商法・経営などを学びたい。

本田都美子：美術大学に公募推薦で受験予定。将来ビジョンは特になし。

〈B高校〉

足立英之：公務員試験不合格後、公務員試験を目指す専門学校へと希望進路を変更。将来は「ビジネス系」サラリーマン。

北沢直樹：有名大学への憧れから六大学などへの進学希望。

伊藤涼：短大（環境建築学科・夜間）進学のため、アルバイトで学費を貯めながら浪人する。将来は建築・土木・測量関係の仕事につきたい。

2. 浪人までの経過と共通点

ここでは前回調査以後の彼ら彼女らの経緯を、今回のインタビュー調査をもとにまとめてみる。

1) 体育学科を目指す金山克也

金山は校内推薦で行ける大学があったにも関わらず、野球をやりたい、身体について学びたいという理由から関東難関国立大学体育学科のAO入試を受けるが不合格となる。続けて一般入試でも受験するが、前期入試で不合格となる。後期は高校の教員と相談の上、関東に近い東北圏の国立大学を受験する。また体育関係学科のある難関校を含む関東私立大学を3校4学部受験するが、私立大学教育学部のみ補欠合格という結果だった。しかし教育学部はあまり希望していなかったため、補欠合格通知を手にしたあと大学側に連絡をせず「しらんぷり」して、浪人生活に入る。親からは大学を受験する前から1年間の浪人を許可されており、現在は個人学習が主な利用形態である予備校で週2回2科目受講し、その他予備校、図書館で予備校からの指導に沿って自学している。学費は親が払っている。

2) 経営学を学びたい木戸貴司

私立中堅四年制大学を受けるが不合格となる。その後専門学校進学も考えたが、やりたいことがはっきりしないため浪人を決める。親からも浪人を勧められ理解を示される。現在は、親も自分も安心するからという理由で地元から近い大手予備校を選び通学中。経営学を学ぶことは引き続き考えている。学費は親が払っている。

3) 美術大学を目指す本田都美子

都内美術大学を公募推薦で受験するが不合格。親には浪人はさせないといわれていたが、兄が一浪していること、自分のやりたいことを説明し、一浪だけの許可を得る。現在は美術大学のための予備校に通い、油絵コースを専攻している。学費は親が払っている。

4) 公務員を目指し専門学校に通う足立英之

高校在学中、公務員試験を受けるが不合格となり、引き続き公務員を目指すため、高校の先生に教えてもらった都内専門学校の行政学科へ進学する。もと

もと公務員を勧めたのは親でもあり、学費は親が払っている。高校在学中は大手会社などの「ビジネス系」のサラリーマンも志望していたが、現在では来年の公務員試験に向けて勉強中である。本来なら専門学校進学という分類であるが、公務員試験を目指す専門学校の性格上、「就職浪人」という意味合いが強いため、本グループに分類した。

5) 大学進学を目指し自宅浪人する北沢直樹

六大学を夢見ていたが成績が足らず受験せず、都内私立中堅大学二部を受験したが不合格だった。親、教師とも、学力不足から就職を勧めるが、本人の意思で1年間考える時間をつくるため浪人を選択する。親からの金銭的援助は望めないこともあり、自宅浪人。卒業後、アルバイトとともに宗教活動にも参加し、そこでの仲間からの助言もあり、約1ヶ月後には大学進学は諦め、夏には次年度からアニメ専門学校へ新聞奨学生として入ることを決める。

6) 短大入学を目指し浪人・アルバイトをする伊藤涼

高校在学中、私立四年制大学の建築系学部へ学校推薦で行けたにもかかわらず、本人の希望から建築系短期大学への入学を希望したところ、四年制大学を勧める親からの反対にあい、短大進学ならば学費は自己負担しなければならないということで、その費用を稼ぐため1年間アルバイトをしながら自宅浪人をする事が決まる。スーパーでのアルバイトの中で仕事に楽しみを見つけ、店舗経営などに関心を持ち、就職という進路も視野に入れるようになる。また経済学系の大学への進学希望もあるが、その準備は現在していない。

これらより、本調査において浪人を選択している者は、大学進学（足立のみ公務員就職）という前回調査時での進路希望を引き続き実現させるために、浪人を選択していることがわかる。

次に彼ら彼女らの基本的属性を示し、それと共に浪人を選択する者にみられる共通点を見出したい（表参照）。

ここでは、浪人を選択した者の基本的属性にある大きな傾向があることがわかる。彼ら彼女らの多くの高校での成績は、評定平均の上位に位置している。また父親の学歴も大卒が多く、父親の職業もホワイト職系が多い。さらに彼ら彼女らの住居種別も借家や団地ではなく持ち家である。前述の浪人選択経緯を

	成績	父職業	母職業	父学歴	母学歴	家形態
金山克也	4.8	商事（海外勤務・コーディネーター）	老人介護サービス（NPO） 発起人	大卒	大卒	持ち家
木戸貴司	3の上	自営業	自営業	大卒	不明	持ち家
本田都美子	4.2	大学事務 （課長クラス）	サービス業	大卒	高専短大 卒	持ち家
足立英之	4	公団勤務	デパート勤務 （パート）	不明	不明	持ち家
北沢直樹	2.7	サラリーマン	パチンコ店 （パート）	大卒	高卒	持ち家
伊藤 涼	5	トラック 運転手	縫製会社 （パート）	高卒	高卒	不明

みてもわかるように、予備校に通う者はすべてその学費を親からの援助でまか
なっている。

それに対し、高校在学中に進学（大学・短大・専門学校）を希望していたが、
卒業後就職やフリーターとなっていた者は、自分で家計を支えなければなら
なかったり、まずは学費を自分で工面しなければならないなど、経済的な理由
でその希望を変更・断念している（1章、2章参照）。

以上より、浪人という位置を選択する者の本調査における大まかな傾向とし
て、次のことがいえる。一つに、本人の学業成績がある程度上位にあること。
二つ目に、親の傾向として、特に父親の学歴が高く、また職業階層も低くなく、
それによって子どもへの経済的支援が可能だということである⁽³⁾。

3. 浪人継続型と進路変更型の分岐

本調査時点において、この6名には浪人生活を継続している者（金山、木戸、
本田、足立）と、大学進学へ向けての浪人生活を辞め、進路を大学進学から別
のものへと変更している者（北沢、伊藤）がいる。ここでは、それぞれの特徴
や傾向をまとめ、浪人を継続するか進路を変更するかに分岐する際の背後に見

られる要因を探りたい。

1) 親の経済的支援と感情的支援

前節において、親からの経済的支援があることを予備校を選択する者の大まかな特徴として述べたが、ここでは、経済的支援だけではなく、浪人への理解や応援など感情的な支援についても各ケースに沿ってみたい。

金山克也は1年間ではあるが浪人することについて親からも理解されており、予備校の学費など経済面においても、親からの支援を受けている。また、感情的にも次年度の進学を後押ししてくれるような声をかけられている。これらの支援は、本人のこれまでの成績や勉強への姿勢からくる信頼が基盤となっているものだろう。

「全部終わって、ダメだって知って、じゃあ、もうやることねーなって。浪人しかねーなって。1年だけだったらいいって（親に）いわれてたんで。……そんなには（家計）苦しくないから。『わかってたわ』みたいな感じで。……いや、お前なら出来るだろう、みたいな感じでいわれたり。あんまり心配されてないというか」

木戸貴司は在学中に大学を受験し不合格となった際に、本人は専門学校進学も考えに入れたが、親から浪人を勧められ、浪人することを決定している。予備校の学費は後に本人が返済するとしながらも、まずは親が払っている。

「一応二次はどうしようかなってなったんですけど、親の方が、そんな中途半端な大学行くくらいだったら、浪人した方がマシだっていったんで、浪人をして。（親に）一応相談して、専門学校にしようかなとかいったんですけど、あんまりやりたいことがはっきりしてないんで、1回チャンスあげるからもう1回勉強してみて、今度はちゃんと勉強できるから、決め直しなさいっていうことで」

本田都美子は、親に一度は浪人を反対されたものの、自分のやりたいことと

調査時点で浪人生活を継続している上記の4名は、親からの経済的支援だけでなく、親からの勧めや応援、浪人への理解を得ている。その中で浪人して進学準備をするという希望を現実化させている。

では、浪人から進路を変更した2名についてみてみよう。

北沢直樹は、この6名の中で唯一学業成績が低い位置にある者で、在学中から親や教師に進学は無理だといわれ、浪人することにも反対を受け、就職等を勧められていたが、大学入学への強い憧れから、自宅での浪人に踏み切った。浪人に対する経済的支援もなく、コンビニエンスストアでのアルバイトで収入を得ている（特に家計の支援はしていない）。

「(卒業時は)焦ってたみたいで、(浪人以外は)何も考えられなかった。自分の中では親にいろいろいわれて。人生とか、この後バイトしたりとか、就職考えた方がいいよっていわれたんで。それはそうなんですけど。……ほんとに大学行きたいんだったら中学の頃からやり直せとか。じゃないと受からないぞっていわれて。そりゃそうだと思って。そういう凹むことばかりいわれたんで、体調崩しちゃって」

「(予備校に通おうと)思った。通うことはできるんですけど、やっぱり、学費の問題とかも出てきて。当時奨学生わかんなかったし、親にもやっぱ話してなかったから、思ったことを。予備校に通いたって」

このような状況の中で、浪人生活を開始するが、進学に対する支援をどこからも受けていないため、進学準備としては「漢字の勉強とかは中学生並みにしとこうかと思って、ちょっと本見て書いてはいたんですけど」という段階である。唯一、都内有名難関私立大学を受験したが浪人することとなった中学時代からの友人と「一緒に頑張ろうって話してた」がその友人からはそれ以上の情報は得ていない。

伊藤涼は、在学中にすでに浪人することを決定していた。四年制大学の建築系学部を推薦で受験できる成績をとっていたが、四年制より短期大学の方が自

分のやりたいことが集中してできるという本人の考えにより、建築系短大受験を希望する。しかし、四年制大学進学なら賛成していた父親が短大進学には厳しく反対し、短大へ進学するなら学費は自己負担することが言い渡され、その学費を工面するために1年間アルバイトをしながら浪人することとなる。本調査時では自分を「フリーター」と位置づけながら、卒業後のことを次のように語る⁽⁴⁾。

「勉強は、最初けっこうしていたんですけど、学校行きたくて、いろいろ親と話し合ったりしてて、で自分でお金貯めるってやってたんですけど、今自分のバイトしてるところが楽しくて、そっちの方で、販売。……そっちのが興味あるから、もし学校進むとしたら、前までは測量をやりたかったんだけど、今は、経済学とかそっちの方を勉強したいかなって、傾いてるっていうか。……うん、お金貯めて。で、今、そっちのバイトが楽しいから、もうちょっと続けたいなあって」

以上の2名には、浪人生活に対する親からの経済的支援だけではなく、1年後の大学進学を支援するような感情的な支援も見受けられない。進学を希望しながらも、予備校などに通うことができず、勉強など進学準備もままならない状況がつけられていたとみていいだろう。

これら、浪人を継続している者と進路を変更した者への親からの支援をそれぞれ比較すると、次のことがわかる。前者には経済的支援だけではなく、家庭の文化的背景から来る浪人への理解や後押しなど感情的な支援があり、1年後の大学受験に向けて勉強に集中できる環境がつけられていること⁽⁵⁾。一方、後者には経済的支援も感情的な支援も期待できず、予備校に行けない、アルバイトをしなければならないなど、大学受験準備に集中することが大変困難であるということだ。

2) 予備校通学と自宅浪人の浪人生活

金山は、週2回予備校に通い、2科目受講している。その他は予備校からの指導に沿い、自習室や図書館で自学している。学習ペースに関しては予備校か

ら参考書の範囲と期間が指定されるので、それを「毎日やっていく感じ」である。時間の使い方などかなり自己裁量に任されているが、それを不安に感じることはなく、定期的に模試を受けるなど、かなり自己コントロールができてい

「そんな辛くないですよ。時間も自由だし。いつ飯食おうが、いつ起きようが、全部自由だし。そんな辛くない」

「なんかおもしろいっすね。古文とか、おもしろいんですけどね。まー、おもしろいっていうか、基本あんまり高校の時よくわかんなかったんですよ」

成績も「伸びてることは伸びてる」と志望校合格へ近づいていることを実感している。また、浪人することで高校の時よりも勉強の理解が深まり、そのことに楽しさを感じている。予備校では「話す相手もないし」といいながらも、他の浪人生とのちょっとした会話から刺激を受けている。

「友だち、微妙ですけど、話すくらいは一応二人いて。そのお陰ってのもありますけど、そいつら、東大なんですけど、目指してるのが。話してて『こんな感じなんだ』って。そこ（予備校）レベル高いんですよ、結構」

このように周囲の浪人生からも刺激を受けつつ、こつこつと進学準備を進めることに集中して生活している。

木戸は、予備校に通うことについて次のように述べている。

「（自宅浪人は）絶対無理だなと、家じゃ。やっぱ予備校行った方が親も安心だったし、自分も安心するから。で、予備校に。自分から予備校行きたいんですけどって言って、いいよって」

地元近くの大手予備校に通い自分の志望校にあったコースを選択しているが、その予備校を選んだ理由を「一番有名だし、そこでいいんじゃないってことで」

と述べている。彼の中になんか一般的に流布しているような浪人像があり、その道に乗ることで「安心」を得ているものと考えられる。生活はかなり「規則正しく」、9時からの始業に合わせて起床し、帰宅後も「普通に予習復習なりをして」いる。

「(勉強は) たまにっていうか、あんましてないっすけど(笑)。でも結構、いっぱいあるから遊んでないです。ま、宿題としてはあんま出ないですけど、予習もしなくちゃいけないし、復習しないとわかんないんで、結構消化するのが大変で」

「最近(偏差値) 55あたりとか。3教科で。まあ、プラス3ぐらいで、だいたいそのランクにいくんで、もう少し超えれば(志望大学の)安全圏に入れるかなって感じ」

成績の上昇も模擬試験の結果から実感している。それに合わせ、将来展望にも変更の兆しが見られる。前回調査では、経営学を学び親の自営業を継ぎたいと述べていたが、本調査では次のようにいう。

「今勉強してて、大学のランクによっては、普通の企業とかも入れると思うんで。あんま家の方も継がなくてもいいよみたいな雰囲気になってるんで。だから大学のレベルしだいで、結構変わってくるんじゃないかなと。やっぱ浪人するんで上の方行きたいと思って、私立難関大学行こうかなと思ったんだけどやっぱ無理で。で、私立中堅大学だったら今偏差値でだいたいなんとか射程範囲内に入ってきたんで。やっぱ経営のほうで」

受験情報等は、予備校チューターにはあまり相談せず、講師の授業中のアドバイスや予備校にある本などで自分で収集している。また予備校での友人は「全然できない」「あんまりできるような雰囲気でもない」。高校の友人とは「一応連絡はとっている」が、部活のイベントがある時にたまに顔を出す程度

である。

本田は、美術予備校に通う。一般的な進学予備校とは違い、実技指導中心となる。9時から16時まで授業があり、その後も自分で作業や自習ができる。予備校では講師（現役美術大生）や先輩（3、4年浪人している者）から技術を学び、画集や個展などの情報を得ている。予備校内では、画集の貸し借りや情報を交換できるような友人グループを持っている。

「やっぱり話してて、『あ、わかるな』とか『あ、ここまでわかるな』とか、意外と『自分ちゃんと、もってたりするんだな』とか。みんな目標をそれなりに多少なりとも知識を持ってたりとか、やっぱ話してて、向こうから返ってくる言葉っていうのが、『あ、意外と面白いな』とか、すごい素直に聞けたりする仲なんで。いろいろと自分たちを刺激し合ってるっていう感じで。画集交換したりとか、美術館とかギャラリーとか、よく一緒に行ったり。でも、基本的にみんな意外と一人ひとりが〔志向が違う〕、そうですね。だから、一人ひとり、全然違うんで、あんまり固まって行動したりはしないんですけど、『この前行ったんだけどさ、一人で』とか」

ここでは、互いの趣味趣向の違いを尊重しながらも、情報交換などを通じて切磋琢磨している姿がうかがえる。それぞれが一人で集中できる時間を確保しながらも教室や廊下でおしゃべりができる環境を、「意外とあの場所がいい感じになったから、自分のためにも」と位置づけている。また、放課後や休みの日には美術館や図書館になるべく行き、外部からの刺激を得る機会も持つようにしており、この浪人生活を「すごい充実はしてますね。高校の時より」と評価している。

足立は、公務員試験用の専門学校に通うが、その内容は漢字や政治、経済、自然科学、日本史、世界史、適性試験対策など、一般的な進学予備校と大きな差異はないと考えられる。朝から夕方まで授業があり、帰宅後も3時間ほど勉強をする生活である。専門学校のイメージについて次のように述べる。

「入ってから厳しいとは思っていたんですけど、やってみるとできるものになって感じですね。勉強が。B高校だったじゃないですか。あんまり勉強しなかったじゃないですか。だから。半分よりも上くらいの（成績）。わかんないけど、たぶん。でも一応自信はついてきたんですけど」

毎日テストもあり、その中で実力の向上を自分で確認しながら、この先の公務員試験に対しては「絶対に受かります」と力強く述べている。また専門学校の担任の講師を「本当に偉い人」「貫禄があるっていうか、自信がある」と高く評価し、この講師からの「教えていうのが結構入っていますね」と、大人のモデルの一つとして見ている。専門学校生活での交友関係については次のように述べる。

「（新しい友人は）いない。寂しい。なんか、聞いてくれないじゃないですか。高校の友だちに電話するんですけど、なんか忙しいみたいで。やっぱ、つくっていけばよかったなって思います」

「だから教室に居づらくなってしまったんですよ。学校の周りに公園があって、やばいんですけど、（昼ご飯は）コンビニで買ってます。……なんか昼ご飯の時とかみんなしゃべってるのに、自分だけ一人ではおかしいかなって。一人で食べてると気分が沈んでいく。一人で食べてると明るくならない気がして。せめて、外に出て食べようかなって。……高校の時とは全然違う。高校の時は、遊び仲間だったから、やっぱり今は勉強しに来てるじゃないですか。だから話しにくいですね」

気軽に話せる友人がいないことに寂しさを感じながらも、この専門学校の予備校的な特徴から、その現状を受け入れている。交流が持てない厳しさから退学する者がいるかという質問に対しても、「いません。だってみんな公務員受かりたくて来るわけだから」と答えるなど、この専門学校に通う期間を、公務員試験合格という目標達成のための短期的手段として捉えていることがわかる。

以上、浪人生活を継続している4名の浪人生活を見てきたが、いずれも予備校（専門学校）に通い、その中でそれぞれに実力の向上を自覚し、自分が目標とする学校（職）へ一歩ずつ近づいていることを実感している。そこでは「浪人生」という位置づけからくる感情の不安定さはあまり見られない。むしろ勉強に追われながらも目標に向けて充実した生活を送っている。予備校において交友関係が希薄であっても、浪人期間というのは大学進学などの次のステップへの短期的架け橋として位置づけられているため、孤独でいることが意味づけられ、浪人に付随する一つの形として受け入れられている。本田に関しては、美術予備校というものが実技を中心としたある種専門学校的な要素を多分に含んでいるため、交友関係の持ち方に違いが見られるが、「基本は一人」という感覚もあり、やはり一般的な予備校と通じるところも持ち合わせていると考えられる。

では、進路を変更した2名はどうであろうか。この2名はともに予備校には通わず、アルバイトをしながら自分で進学準備をする予定であった。その中で進路を変更するに至る過程を見ていこう。

北沢は、大学進学、浪人に対して親から反対を受け、浪人生活への経済的支援が受けられない中で、もう一度自分の進路について考える。そこでこれまでとは違った道を見出すこととなる。

「ずっと凹んでたんですけど、1ヶ月ぐらいですね。それで開き直って考えてみて。で、自分の本当に好きな道は何かとか考えて、あっという間でした。やっぱり専門行きたいって思うようになって。4、5月の終わりぐらいに。アニメーションとか好きなんですよ、僕。それで、音楽も好きなんで、その音を作る会社に就職できたら嬉しいなと思って。制作会社みたいな、それに入りたいと思って。で、アニメーション専門学校に来年度から入学するんですけど。……頑張ります。悔いはないように頑張ろうかなと思って」

浪人生活を始めて最初の1、2ヶ月で、大きな進路変更をし、8月半ばにアニメーション専門学校への入学を決定した。この専門学校に必要な学費も親か

らの支援はなく、新聞奨学生でまかなうこととなっている。これらの決定には、「いろいろ宗教団体の人とか先輩とか話す機会があって、いろんな人の話とか聞いて」と、卒業後から深く関わりだした宗教団体（両親が昔から信者である）での交友関係に影響を受けている。

「(専門学校が決まったのは) 8月半ば。大学行きたいって気持ちがあったから。でも、宗教団体の先輩に相談して、それで決めました。アドバイスですか？ 自分で決めたことは、ほんとにやりたいことならば頑張ってみたらって言ってくれましたけど。やっぱり父親とは違うんで、友だち感覚みたいな感じで。いつでも話せて打ち解けていけたんですよ」

「アニメーション専門学校に通ってる人が宗教団体にいたんで。描く方ですけどね。コミックとか、漫画家目指すとか、そういう方なんですけど。僕は音の方なんで、分野が違うんで。どういう感じですかとか聞いてみて。なんか評判悪いみたいなこといわれてショックでしたけど」

その後、体験入学や「就職率とか100%超えてる」というスタッフからの説明も受け、最終的には「自分で見てみて納得した」と語っている。また宗教団体との関係については次のように述べる。

「高校卒業してから、会いに来てくれたんです。高校の時は宗教嫌だったんで。ですけど、変わったってというか、いい人たちに会えたってことで。……すごいなんか楽しくなって。いろいろ先輩たちと話したりとかして、いろいろ遊びに行ったりとか、同じ趣味の人たちとかも、一緒のサークルみたいな感じで」

彼は浪人という立場に自分の位置を見つけるのではなく、宗教団体の仲間の中に自分が安心していられる場を見出している。専門学校入学後は新聞奨学生をしながら一人暮らしをしたいという希望を語る中で、地元ではなく、宗教団体の「友だちが近くに集結していて、近くにいっぱいいて、その人たちと一緒に

に頑張りたい」と述べていることから、彼ら彼女らとの関係を大きなものとして位置づけていることがわかる。

伊藤は、進学資金を蓄えるためにアルバイトをしながら、自分で勉強も進めていくということであった。卒業後はバラエティストアで週5から6日というハードなスケジュールで仕事をしている。その中で、前述のようにアルバイトでの仕事に楽しみを見つけ、進学という希望を持ちつつも、これまで興味があった建築関係ではなく、経営学に関心を持ち、そちらへと進路希望を変更している。

「勉強は疲れもためてたし、(バイト) やってて楽しかったから、いいかなーって。夏ぐらいかな、それぐらいから、けっこう本格的にレジ以外のことやり始めて楽しかったりとかあったんで」

「1年後はきっと、就職してるかな？ もしちゃんとやりたいことが決まって、目標とか、今だったら自分のお店持ちたいなとか、普通のスーパーとか、そういうのやってみたいと思ってるから。10年後だったら、自分でいろいろ経験積んで、お店を持てたらいいなー。1年後はどっか、勉強してるか、就職してるか」

アルバイトでの仕事内容は、商品の発注や陳列であり、それらを社員から任されている。並べ方により「商品の流れが全然違う」ことなどの点に楽しみを見だし、それを社員から任されていることに「好き勝手やれるから、楽しいしやりやすい。あんま気遣わなくていい」と述べている。またここでの人間関係も良好のようである。

「社員とかも、けっこう仲良い。みんなフレンドリーだから、けっこう、普通に顔とか知ってて普段とかも、たまになんか、すげー大変なこととかあったら、あとで飲み会とか。あとバイト同士とかで、夏休みとか花火とかやってた。……バイトとかも、パートとかも仲よいんで、楽しいです」

高校卒業後新たな職種で週5から6日でアルバイトをするなかで、進学に向けて勉強を継続していくことは大変困難だろう。また仕事にも楽しみを見つけ、仕事仲間とも良好な関係を見出した中で、自らを浪人という地位に位置づけ続けることはますます難しいだろう。本人が今回のインタビュー調査時点では、自らを「フリーター」と位置づけていることもそのことを物語っている。

4. まとめ

これまでみてきたことから、高校生が卒業時に浪人を選択し、卒業後、浪人生活を継続または進路変更をしていく背景には、以下のような要因が影響していると考えられる。

高校生が大学（もしくは短大、専門学校等）への進学に失敗し、もしくは延期したときに、浪人を選択する層では、本人の成績がある程度高いこと、また、親（特に父親）の学歴と職業レベルが相対的に高く、家庭からの経済的支援や文化的支援または感情的な支援を得ることができるということが重要な傾向としてみられる。これらが満たされている層は、1年後の目標に向けて勉強や情報収集などの進学準備に集中することができ、たとえそこで人間関係が希薄になったとしても、浪人というのは進学準備のための短期的、手段的な期間であるというある一定の浪人イメージに支えられ、また成績向上という数値的な基準によって充足感を得るなど、学力主義に乗ることができることにより、自らを浪人という立場に安定して位置づけることができる。しかし親からのいずれかの支援が欠けたまま浪人生活に入るということは、親も本人も明確な浪人イメージを持たず、アルバイトをしなければならないなど、勉強に集中できる環境をつくりだすことが難しい状況となる。そのため自らを浪人という位置に安定させる要件を得ることが困難となり、外部で自らの居場所を見出し、そこから進路を再考し変更していくきっかけを得ることとなる。

註

- (1) 芳澤・上間・渡辺・宮島・椎林「統計から見た東京における若年労働市場の変容」前掲。本田由紀はフリーター析出の契機を〈組織から組織への移行の失敗〉という観

点から整理しているが、その観点からも浪人は不安定なポジションとして位置づけられる（本田由紀「トランジションという観点から見たフリーター」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第55号第2号，2004年）。

- (2) 前回調査は都立A高校，都立B高校にて，2002年10月より実施。詳細については東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』20号を参照のこと。
- (3) 進学を希望していたが就職やフリーターとなった者は女性に多く見られ（1章，2章参照），浪人の可否はジェンダーによる偏りもあると推測されるが，ケースの少なさもあり，さらなる調査が必要であろう。
- (4) そのため伊藤涼については1章でも言及している。
- (5) ただし，親の支援・後押しの方にも差異がある。金山克也は，成績や態度などから本人の希望が認められるかたちで感情的な支援を受けているが，足立英之は公務員という道を半ば押しつけられ，本人も仕事に明確なビジョンを持たないまま，その道を受け入れている。本人の志望の内発性や親の感情の持ちように差異はあるが，いずれにせよ親の感情的支援が浪人継続に大きな影響を与えているとはいえる。

終章

乾彰夫・杉田真衣・竹石聖子・西村貴之・渡辺大輔

1. 本論のまとめ

本調査では，前回に引き続きインタビュー調査を行い，高校卒業から各進路を選択し，そこでの生活を確立してゆくプロセスを確認し，そこに働くさまざまな要因を明らかにすることを目的とした。本調査でインタビューに協力してくれた53名を，その進路別にフリーター，就職，専門学校，四大・短大，浪人と5グループに分け検討を行った。それぞれから見いだされた知見は以下の通りである。

フリーターとなった者の生活は非常に多様ではあったが，そこには，高校卒業時点でフリーターを希望していた者と，進学や就職した後に離脱してからフリーターになる者の二層があった。前者は「やりたいこと」を語りながらも家庭の経済的な問題から進学を断念もしくは引き延ばしており，その要因はこんにち多く語られがちな若者の進路意識の希薄さに還元されるものではない。後者は進学，就職後に何らかの困難に直面しており，離脱後の数少ない受け皿と

してフリーターが位置づいていることがわかった。また、彼ら彼女らはアルバイト代から家計に支出しており、家庭からの感情的な支援を受ける側ではなく支援をする側にいる者も見られるなど、「子ども」という地位ではなく一家の「稼ぎ手」としての地位にあるといえる。しかし、収入も少なく、「やりたいこと」への目標を達成し「一人前になる」ことは大変困難な状況にある。その中でなお仕事を将来展望につなげたり、地元ネットワークでの支え合い、伝統的ジェンダー構造への適応などによりこの移行期の困難を乗り越える可能性も見られた。

正規就職者をめぐっては、卒業後1年たらずで4割を超える離職率が目立った。しかしインタビューで語られた離職にいたる一人ひとりの事情や状況からは、「安易な離職」という以上に劣悪な労働環境や職場の雰囲気、人間関係の中で、精神的肉体的限界のぎりぎりまでがんばったうえで「自分を守る」残された選択として離職を決意するケースが多数を占めていることがわかった。その背景としては彼ら彼女らを職場で支えるネットワークの欠如なども指摘できるが、何よりも彼ら彼女らが、少なくとも自分の気持ちとして「もうこれ以上は耐えきれない」中で辞めているという事実こそがここではまず確認されるべきだろう。また、現在高卒求人数が激減する中で就職を選ぶ者の多くは「やりたいこと」のためではなく、就職することで経済的、精神的に「一人前になる」ことを目的としていることも確認できた。その背景には家庭の経済資本の低さが大きな要因としてみられるが、「やりたいことを早くから育てる」というような最近の進路指導言説とは逆に、「やりたいこと」にこだわらないから就職できるというパラドックス的な状況こそが高卒就職者の現実であることは重要だろう。

これらフリーター、就職層の不安定さに対し、進学層、特に専門学校進学者の生活の安定ぶりは対照的である。専門学校を選択した者のうち、「やりたいこと」をはっきり持っていた者は忙しい学校生活にも十分適応し、また「やりたいこと」があいまいなままだった者も、職業能力形成に必要な専門的スキル・知識を修得しうる環境の中で自分の将来展望も描けるようになっていた。とくに家族の経済的、文化的、感情的な支援を受け、専門学校特有の技能実習を含

む授業形態によってつくられる支え合い、切磋琢磨するような人間関係を持つ者は、職業世界のイメージをかなり明確に持つことができていることがわかった。

四大・短大進学者は相対的に高い経済資本・文化資本を持っていたが、その中でも親の高い学歴と進学を勧める感情的支援を受け高校入学時以前から大学進学も視野に入れていた者と、高卒労働市場の縮小と少子化から大学入学への門戸が開き、高校入学後に教員の勧めにより進学を考え始めた「新規参入層」があることがわかった。その中で四大進学者は大学生活の中で時間をかけて将来展望を模索していこうとしている。その一方で短大進学者は、専門的・実技的な科目を通じて短期間に将来展望を明確にするなど、専門学校に近い安定した移行プロセスがうかがえた。しかし、専門学校より専門性に特化していないカリキュラムのため、そこで学業意識の差が生じたり、短大を含む大学と専門学校に対する外的評価の差が進路選択に影響していることもうかがえた。また、出席・学業不振や意欲減退など困難に直面する状況も一部にあったが、その背景には、「新規参入層」の中に、これまでとは違った学習方法や人間関係づくりに戸惑いを感じる、あるいは「唯一学科」という新興的なものもつイメージのあいまいさなどの影響がうかがえた。また、親と子における関係性の転換に対する意識の齟齬に葛藤を抱くケースが、今回の調査では四大・短大進学者だけに見られたことも一つの特徴であった。

これら四大・短大進学に失敗し、浪人を選択する者の多くは、進学者同様、家庭の経済的支援を受けている者が多く、また親の学歴が高く、本人の成績も上位にあることがわかった。また、浪人生活を継続できるか、進路を変更するかの分岐点に、親の経済的支援だけではなく、文化的な支援や感情的な支援があること、そのことが本人が持つ浪人イメージに大きな影響を及ぼし、不安定な浪人という位置づけを維持できるかどうかの要因としてあることが明らかになった。

以上、今日の高卒労働市場の縮小、四大進学者の増加、フリーターや進路未定者の増加に見られる高卒移行過程の変容がおこっているなか、若者の労働意識、進路選択意識等の希薄化、そしてその強化の必要性が語られることが多い

が、現実にはそこに還元しきれない要因があることが本調査より明らかになった。第一に家庭の経済的支援の有無が彼ら彼女らの「やりたいこと」意識を超えて進路選択プロセス、そしてその後の進路変更・維持などに大きな影響を与えていたこと。第二に、家庭の文化的支援、感情的支援も含めて家族の階層的な位置が移行プロセスに影響を与えていること。第三に職場内の集団づくりやソーシャルネットワーク、学校（授業）形態、カリキュラムなど、人々を支える社会システムの有無が、いずれの進路でもその後の生活を支える重要な要因になっていること。これらが大きな要因としてまとめることができよう。また、各章で深く触れることのできなかつたジェンダーや家族、地元ネットワーク、仲間関係などにみられる階層的制約構造とそこでの抵抗については次節で詳述する。

本調査は第1回調査からの半年から1年間弱の期間を継続的にみることで、彼ら彼女らの移行プロセスを縦断的に検討することができた。高校という場から次のステージへと踏み出した彼ら彼女らは、それぞれの場でこれまでとは大きく違った価値観や関係づくりと対峙していた。また社会という周囲からのまなざしも大きく変化した。その中で精神的にも身体的にもぎりぎりのところまで自らを追いつめ（追いつめられ）、深く苦悩し、傷つき、葛藤している者がいた。またそこでの自分の立ち位置を自覚し、多くのことを背負いながらなんとか生活を切り開いていこうと奮闘する者もいた。さらには環境に助けられながらも自分の新たな道を模索しようとする者もいた。そこでは家族や地元などでの関係を必死に構築し直し、自らの居場所をつくりだし、仲間とともに支えあい立ち直っていく姿も見られた。この“高校卒業1年目”という期間は、私たちが想像するよりも遥かに大きな変化を彼ら彼女らに与えるものであった。そしてここではまさに“高校卒業1年目”を「生きぬく」彼ら彼女らの姿をみることができた。本調査後も就職から離脱する者がすでにみられている。また、進学者も次の進路を選択しなければならないなど、さらなる変化が待ち受けている。今後の継続調査は重要な課題である。

2. 若干の考察

以上が私たちのこれまで2回のインタビュー調査から明らかにされたおおよ

その状況である。以下ここでは、いくつかの問題に焦点づけて若干の考察を加えたい。取り上げる課題は次の3点である。

〈①社会構造的な制約〉

第一は、社会構造が若者たちの移行過程に与えている制約の問題である。フリーターに象徴される若者たちの〈学校から仕事へ〉の移行過程をめぐる変容について、その主たる原因が社会構造的要因にあるのかそれとも若者たちの意識の変化にあるのかをめぐっては、未だにマスコミなどでは論争的状况にある⁽¹⁾。変容の主たる原因が若者たちの意識変化にあるとする議論の多くは、彼ら彼女らの職業意識や勤労意識の未熟さを問題にし、またそれを放置する「親の責任」を問題にするなど、“若者バッシング”と“家庭責任論”へと向かっている。こうした議論に対し、私たちは基本的に社会構造的な影響に主たる原因があるという立場をとる。その際、“社会構造的”ということには、次の二つの視点が含まれている。

一つはいうまでもなく、フリーターなどの増加が、90年代以降の日本社会の産業・就業構造のドラスティックな変化の中で生み出されてきているという点である。もう一つは、そのもとで、一体誰がフリーターになりやすいのかという点においても社会構造的な要因、つまり若者たちの諸属性間に社会的格差を生み出す要因が存在しているという点である。

このうちの前者については、私たちはすでに昨年、諸統計データの再分析⁽²⁾を通して、過去10年あまりの間に日本の中に非常に大きな産業・職業・就業構造変化が生じておりその中で非正規雇用の割合の増大などが急速に進行していること、そうした変化とくに非正規雇用の増大などはとりわけ若年層に大きく生じていること、さらに東京都における変化は全年齢層においても若年層においても全国的な変化をさらに先取りし拡大する形で広がっていることなどを明らかにした。

他方で後者については、家庭の社会階層という点についてマクロレベルにおいては耳塚寛明らの研究⁽³⁾においてその兆候が一定程度示されているほか、私たちの第1回調査でもその兆候が認められた。この点について今回の第2回目調査においてはその傾向はさらに顕著になったといえる。また今回の調査にお

いてさらに浮かび上がった問題は、ジェンダー間格差の問題である。したがって以下では、社会階層及びジェンダーに着目して、私たちが対象とした若者たちが、その移行過程においてどのような社会的制約を受けているのかについてさらに検討したい。

〈②移行過程の個別化とそれへの抵抗〉

もう一つの問題は、移行過程の不安定化とりわけ“個別化”という問題とそれに対する彼ら彼女ら自身の“抵抗”ということである。今日生じている移行過程変容は、今回の私たちの調査にも表れているように、その過程の中にいる彼ら彼女らを大きく不安定化させている。そしてこの不安定化は、非正規雇用の増大など雇用の不安定化ということもさることながら、移行過程にある若者たちにとってより大きな問題は、これまで「学校斡旋による新規学卒採用慣行」というシステムのもとに“標準化”されていた〈学校から仕事へ〉の移行ルートのかなりの揺らぎの中で、移行過程のいわば“個別化”が大きく広がっていることである⁽⁴⁾。すなわち、このシステムの揺らぎのもとで、一方ではフリーターなどに代表される、システムの枠外に押し出されしたがって移行に伴う社会的な支援をほとんど受けられない層が大きく拡大するとともに、他方では今のところはまだシステムの中にいる者たちにとってもその信頼性の低下から常に不安を抱え、あるいはその過程で生じる困難をシステムに依存することなく個人的に引き受けなければならない状況が広がっている。例えば四大経済学部に進学しながらF1ドライバーや調理師・マッサージ師を将来の可能性として考えているという和田の例(4章)などは、そうした状況の反映かもしれない。また正規就職者の場合も、かつて高卒就職者が比較的規模の大きな職場に入職し、「集団主義的企業文化」のもとで強力に企業内・職場内の公的私的な人間関係に組み入れられていたのと比べ、私たちの今回のケースでは就職先が小零細企業であったり、配属先が正社員1-2名程度の小規模店舗であるなど、彼ら彼女らを含むわずかの正社員とパート・アルバイトなど身分も年齢もバラバラな人びとで職場が構成されている等、職場での仲間関係・人間関係を取り結ぶことが非常に困難な状況におかれていた。これもたまたま偶然であるよりは90年代以降の高卒就職者の置かれた状況変化を概ね反映しているものと思われる。

その際、移行過程にある彼ら彼女らの安定性という点については、一方では所得や安定した仕事など、いわば広義の経済的あるいは「道具的」⁽⁵⁾側面とともに、他方では移行過程にある一人ひとりのアイデンティティの確保といういわば精神的または「表出的」側面という二つの側面が指摘できる。そのうち前者については、フリーターや失業など、雇用の不安定化している層への社会保障や職業紹介・職業技能形成などの支援といった、主として政策的な対応が重要な課題となる。しかし同時に、私たちの今回の調査からは、前者とともに彼ら彼女らの表出的な側面を支える後者もまた大きな課題になっていることが浮かび上がった。移行過程の個別化は、経済的側面ばかりではなくて、長期化複雑化する移行過程を“生きぬく”ためのこのような側面の重要性を一層大きくしているといえる。

ところで、若者たちの〈学校から仕事へ〉〈子どもから大人へ〉の移行過程においては、表出的関係の不安定化はある意味ではこれまでも本質的な問題の一つだった。それは第一に同輩関係などの面では、ホームルームやクラスという「居場所」がありそこに一人ひとりに気を配る担任教員がいる学校という場から、職場という多かれ少なかれ自分でその関係を築いていかなければならない場（人によっては大学や専門学校などがそこに挟まるとしても、そこでも高校までとは「居場所」を得る点でかなり様子が異なる）への移行に伴う不安定化である。また第二に家族（親子）関係の組み替えという、表出的な関係という点では極めて大きな課題がその過程の中には含まれている。さらにこうした諸関係の組み替えの人格内面への反映でもある“アイデンティティ・クライシス”をこれに加えることもできる。これら二つないしは三つの課題とそれに伴う不安定化は、これまでも存在した。しかし現在多くの若者たちは、それに加えて上述のような移行過程の長期化複雑化と個別化という、いわば三重ないしは四重の不安定化にさらされているといえる。

こうした不安定化に直面している状況のもと、私たちはこの調査の中で、個別化に対して自分たちの移行過程の中でのアイデンティティを支え合う関係性を彼ら彼女ら自身によって創り出しているいくつかの例に行き当たった。一つはB高校を卒業した主にフリーターになっている女性たちが地元のなかに創り

出しているネットワークであり、もう一つは看護や自動車整備などの専門学校に通う者たちがその学校の中で創っている仲間関係である。両者はある意味では非常に対照的である。一方はフリーターといういわば就労上最も不安定な層であり、他方は国家資格を介して専門職市場に結びつく今日の状況のもとでは相対的に安定した位置にいる層である。しかし両者とも、移行過程の中で直面する様ざまなしんどさや不安を受け止め合い、不安定な移行過程にある“自分のアイデンティティ”をお互いに承認し合い支え合う、そういう機能を果たしている点が重要である。これらはいわば「個別化」への彼ら彼女らの一つの「抵抗」といっていい。そこで次にはこれら二つの仲間関係ネットワークに注目し、その意味について検討したい。

〈③家族をめぐる問題〉

最後に家族をめぐる問題である。ボールらはロンドンの若者たちの移行過程を調査・分析する中で、「個人化・個別化」を伴う今日の移行過程変容のもとで、家族のもつ“資源”は一人ひとりの若者の移行過程を今まで以上に左右するものとなっていることを指摘している⁽⁶⁾。私たちの調査でも、同様のことが確認された。しかし、家族のもつ意味は、単に家族のもつ経済資本や文化資本が彼ら彼女らに大きく影響するというだけでなく、特定のグループ（私たちの調査では大学進学者たち）のなかで、家族（親子）間葛藤がとくに顕著に見られるなど、もう少し複雑な諸問題を含んでいるように思われる。そこでここでは最後にこの問題にも若干の考察を加えたい。

1) 社会構造的な制約

①社会階層による制約

若者の移行過程における階層的制約構造についてはこれまでも指摘されてきたが、本調査においても対象者の進路をめぐるいくつかの社会階層的な制約が大きく働いていることが確認できた。まず高校卒業前のインタビュー調査では、偏差値ランクで中位のA高校では進学志望が多く、就職希望やフリーター予定はごく限られており、一方偏差値ランクで低位のB高校では進路未定者が一定存在していたなど、学校ランクごとで違いがみられた。これはたんなる「学力の違い」ではなく、高校入学選抜時の「学力」を通した両校生徒の家庭

の間に生じている階層的格差の表れといえるだろう。とりわけB高校では一人親の生徒が目立って多く、生活保護を受けていると思われる者も少なくなかった。そしてさらに高校3年秋の時点の進路選択でも母子家庭にフリーター予定や進路未決定者が多いなど、家庭の経済状況が規定要因として働いている傾向が見出せた⁽⁷⁾。

高校卒業後のインタビュー調査では、このような階層的経済的制約が進路選択意識だけではなく実際の進路の実現・断念・変更の過程にいつそう顕著に表れていた。例えば、「大学に合格しながらも経済的な事情で進学を断念し、就職した」村岡のケース（2章）では本人は明確に大学進学を希望し合格もしていたものの学費が用意できず断念せざるを得なかった様子をはっきり表れている。また高校卒業後フリーターになった庄山（1章）は卒業前のインタビュー段階では調理師の専門学校を希望しながらも家の事情との兼ね合いでギリギリまで親に相談することもなく一人で悩んでいた。彼女は結局、そのまま卒業を迎え、「とりあえず1年考えよう」とフリーターになっていった。こうした卒業間際までズルズルと悩み進路が決定しないまま卒業する傾向について、荻谷グループの調査では、その要因として家族の関与が弱いことや「若いうちは自分のやりたいことを優先したい」という本人の意識の問題を指摘していた⁽⁸⁾。庄山のケースも卒業間近まで決めかねていたという現象だけに着目すれば荻谷らのような解釈も成り立つかもしれない。だが母子家庭である家の経済状況を気にすることで親に相談できないまま未決定になっているという事情からは、むしろ本人の意識の背景に経済的制約要因が強く働いているとみるべきであろう。さらに荻谷らがあげる家庭の関与の度合いについても、次に詳しく触れるように、家族の大きな支援と支持のもとにもっぱら自分の希望進路実現のために専念できる条件のある若者たちがいる（A高校に多く見られる）一方で、高校在学中やフリーターでも家族に対する経済的物理的（家事など）あるいは精神的な支えの役割を担わざるを得ない若者たちがいることを見れば、これもたんなる親の意識や態度の問題として扱うことが可能かどうか、十分な検討が求められるものである。

次に進学率が相対的に低いB高校でも大学進学をしている若者が一定いた。

しかし同じB高校の中でも、進学をめざしながら結果としてフリーターになった者たちの事情と比べてみれば、進学できるかフリーターや無業者になるかには経済的要因が明確に働いていた。さらに進学ができた者に着目してみると、経済的要因以外の規定要因を見出すことができる。それはまず進学者のなかには高校入学以前から大学進学が視野にはいていた者とそうでない者が存在しており、親の学歴をみると前者のほうが高学歴であるということである。また後者の進学者のほうが、進学後の大学生活になんらかの困難を抱えている様子がうかがえた。こうしたことから経済的要因だけではなく家族の文化資本も将来イメージの持ち方や実際の学校生活においてなんらかの制約として働いていることが推測される。

以上のことから、高校卒業前の進路選択とともに卒業後の進路実現・断念・変更過程で階層的制約があり、特に経済資本、文化資本が進路選択とその後において大きく影響していること、さらにその影響は社会的に不利な層により大きな制約と困難を蓄積する方向に働いているといえよう。

②ジェンダー的な制約

次にもう一つの社会構造的な制約要因として、ジェンダーの問題をあげることができる。今回の結果では、フリーターに女性が多く、大学進学者に男性が多いという傾向が見い出せた。これは私たちがすでに昨年の段階で明らかにした全国及び東京都の全体的傾向⁽⁹⁾とも一致する。そこでここでは、ジェンダー的要因が具体的にはどのように移行過程に影響しているのかをもう少し詳しく見てみたい。

女性にフリーターになる可能性が高いことの第一の要因は、高卒労働市場の縮小が、とりわけ女性において著しいということである。従来は高卒女性就業者の中でかなりの割合を占めていた事務職が急激に高学歴化したことや、それに替わる飲食・小売などで若年就業者が非正規化したことの影響で就職が厳しくなったことから、多くの女性がフリーターにならざるを得なくなっている。このような高卒労働市場に発生しているジェンダー格差の拡大が多くの女性フリーターを生んでいるといえるだろう。

しかし第二に、女性の方がより就職が厳しいとはいえ、なぜ男性ほどには進

学に向かわずフリーターになる者が多いのだろうか。そこには労働市場における格差とは別の次元でのジェンダー的要因がさらに働いていることが確認できる。それは具体的には以下の二つのジェンダーバイアスである。一つ目は、親の持つジェンダーバイアスである。たとえばフリーターである吉川綾は、両親に「働かないでもいいよ」「焦らずゆっくりと見つけな」といわれていた。その一方で、大学に進学した川本裕には二人の姉がいるが、ともに高卒であり、うち一人は結婚して子どもを出産していた。吉川や川本のケースからは、女性は家庭に入り男性は外で働くという性役割観を親が持っており、またそれゆえに男性であれば無理をしても進学させよう、しかし女性の場合は、というような親たちの子どもへの期待のあり方をめぐるジェンダーバイアスが移行過程に影響していることがうかがえる。二つ目のジェンダーバイアスとしては、高校の教員によるものが挙げられる。B高校の大学進学者はほとんど男性だが、B高校の生徒が大学進学という進路を選択するにあたっては教員による勧めが大きく影響していた。このことから男性であれば成績によって大学進学を勧める（女性には勧めない）ような進路指導観を教員が持っていることが推測される。もちろん教員たちの進路指導スタンスには、親たちの意識も影響していることが考えられ、このジェンダーバイアスが教員たち自身の個人的な価値観の表れと見なしうるとは限らない。しかしとりわけB高校では教員のアドバイスがA高校以上に大きな影響力を持っており、結果として教員のこうしたアドバイスが進学をめぐる男女間の違いの一定部分に直接関与していることは明らかである。男性に浪人が多く、女性は浪人を避ける傾向があること背景にも、これら二つのジェンダーバイアスがあるであろう。

最後に、本人たちの意識においても、女性は結婚して子どもを育てるという性役割観が存在していることがある。たとえばフリーターの庄山真紀は「結婚が向いているんじゃないかなって」、「将来はパートしながら専業主婦」といっている。他にも結婚願望のある者は複数おり、性別役割分業を肯定するような価値観を自らも持っていることがうかがえた。このような価値観も移行過程に影響していると考えられる。

以上述べてきたことをまとめると、労働市場におけるジェンダー格差、親と

教師の持つジェンダーバイアス、そしてそれらと関係しているであろう本人たちのジェンダー意識という三つのジェンダー的要因が、移行過程に影響していることが推測されるのである⁽¹⁰⁾。

2) 個別化への抵抗

①地元ネットワークの中で生きる若者たち

移行過程の個別化が生み出す困難に対する一つの「抵抗」として、彼ら彼女らが創り出している仲間関係やネットワークとして私たちが注目した一つの例は、B高校を卒業した女性たちの地元ネットワークである。1章および2章では、荒れた雰囲気職場の中でしんどさを誰にも相談できず自分をぎりぎりまで追いつめながら離職したあと、高校時代の友人との結びつきの中でようやく自己回復しながら生きていこうとする若者の姿をみた。さらに、B高校を卒業してフリーターなどを続ける彼女らの中に形成されている、ライブ通いを中心とした関係を形成している「ビジュアル系ライブ」つながりグループと、互いに「お泊り」をしあい繁華街で「オールする」なかで関係を形成している「地元ネットワーク」つながりという二つのグループを紹介した(1章4節)。しかしこの二つのグループは、実はまったく無関係な二つではない。この二つのグループを含め、B高校を卒業した女性の多くは「高校1年のとき同じクラス」「部活が一緒」などいくつかの媒介項を通じて10数人が入り組んだ関係を形成しており、「なんとなく」つながっている大きなグループあるいはいくつかのグループのネットワークとして存在している。その様子をインタビューで聞き取った範囲で示したものが図1である。

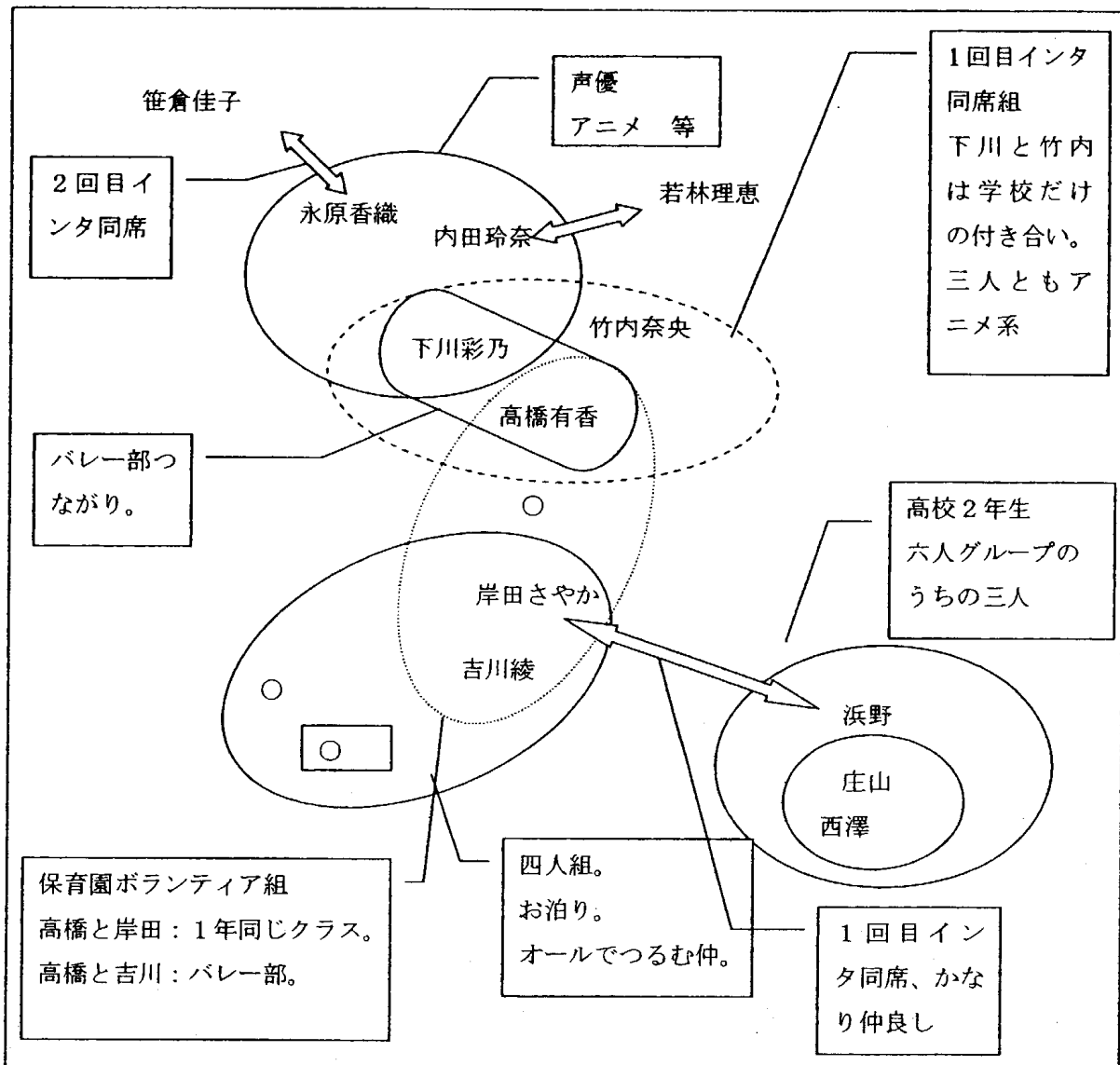
この図をみるとわかるように、彼女たちは高校時代から「ライブつながり」であったり「お泊り仲間」であり、卒業後も関係が続いている点では高校時代の友人関係でもある。彼女たちはほとんどが、アルバイト先は「近いところ」を優先的に選択し、遊ぶ場所も地元の駅周辺がほとんどであるなど、極めてローカルな場に自分たちの居場所を形成していた。図1で示すように「ライブ」「アニメ」「お泊り」と共有しているサブカルチャーが異なったグループを形成しながらも、そのグループを超えて誰かが誰かとつながっているといった関係が形成されていること、また地元で展開されているという特徴を持っている。そ

ういう意味で、まさに「地元ネットワーク」を形成しているということが出来るだろう。

このような特徴をもつグループの中で彼女たちはどのように生きていたのだろうか。大きな精神的ダメージを伴いながら離職した西澤には、このつながりの中で「ライブ」という空間に足を運んだときにはじめて「ここだ」と自分の「居場所」と感じられる場所を見つけ、そこで自己を回復していく様子がインタビューからうかがえた。そして彼女はその後、ライブの衣装を作ったりライブに出かけるなど「ライブ通い・活動」中心の生活をスタートさせていた。ま

図1 B高校の女性を中心としたネットワーク

※ ○は卒業後のインタビューができなかった女性をあらわす。



た専門学校を退学した吉川は、その後「地元つながり」の仲間と一緒に過ごすことで、次は「友人と一緒に花屋でバイトをしたい」という当面の希望（見通し）を持つまでにいたっている。

こうした若者の地元ネットワークで生きる姿から、彼女らにとって、高校時代の友人を中心とした地元ネットワークがもつ意味を大きくは二つ指摘することができるだろう。一つは不安定な移行過程を生きる若者にとって、このネットワークがいわば「表出的な場」として大きな支えとなっていることである。とくに労働市場からはじき出された彼女らの精神的ダメージを癒し自己を回復させる場として機能していた点は重要である。二つ目に、それが単なる癒しの場としてではなく、一時的に避難する場所としてでもなく、自分たちで自分たちの独自の空間を創造しながら「生きられる空間」として「そこで生きていく」という積極的な面も持っていることである。このネットワークの中で生きている若者の多くは、以前はなんらかの「目標」があり、その目標をめざして進学やフリーターという指向を持っていたが、退学や退職後にネットワークのなかで自己を回復させる過程で、「ライブ活動に関わる仕事をしたい」「とりあえず働きたい」など現在の自分の生活の場を起点に将来を語る指向へと変わっていた。こうした将来展望の変化からは、彼女たちが現在生きている場がまさに今自分が「自分自身を」生きている空間であり、そこにいれば将来も自分はどうにかやっていけるという感覚を得ていることがうかがえるのである。

しかし一方でそうした将来展望の変化の中には、「将来はこのままパートしながら専業主婦かな」など、伝統的ジェンダー構造に再回収される負の危険性もはらまれている。

だがこうした負の危険性をはらみつつも、ここで形成されていた地元ネットワークのなかで生きる若者たちが今後、自らの階層的経済的（ジェンダー的）制約構造を乗り越えて、新しいライフスタイルを形成していくことができるのかどうか、引き続き追跡しつつ検討していくことは私たちの大きな課題であろう。また卒業前のインタビューでは男性にも「地元」つながりといえるような仲間関係を形成していた者が存在していた。卒業後のインタビューでもB高校のバレー部出身者は今でも時々連絡を取り合う仲であり、他にもバイク仲間な

どの存在が確認されている。それ以外にも宗教のネットワークや「あしなが育英会」のネットワークなどを重要な場として語る若者もいた。それらは本論で扱ったB高校女性グループと同じように存在しているのか、あるいは関係の作られ方に差異がみられるのかも今後の検討課題としたい。

②専門学校に学ぶ若者たちの仲間関係

移行過程のただ中であって、お互いの見通しを支え合い、ぶつかるさまざまな悩みや不安を受けとめあうことのできるもう一つの例は、看護や自動車整備などの職業資格取得を目的とした専門学校に通う者たちがそこに創り出している関係である。すでに3章に詳しく見たように、それらの学校の中では実技を含む学習や実習などお互いが協力し合わなければならない学習形態の中で、否応なしに関係が創られるだけでなく、その関係が飲み会など学校の外にまで広がり、お互いの悩みや不安を聴きあい励ましあうような「表出的な関係」にまで及んでいた。そしてそれは、その職業経験を持つ教員や実習先の看護師などをモデルとしながら、その職業世界に直接結びつく「正統的周辺参加」の場でもあった。

彼ら彼女らの中に形成されているこうした関係は、一面では先に見たB高校を卒業した女性たちがつくる「地元ネットワーク」とは、かなり性格が異なる。専修学校生たちのそれは、明らかに個々の専門学校という枠組みに媒介されているという点では制度が深く関与している。またこうした関係の形成は、おそらく専門学校教員らの期待にも添ったものであろう。そしてこの関係全体は大きくは、職業別に階層化された専門職労働市場に向けて彼ら彼女らを選別・誘導していくシステムのもとにしっかりと組み込まれている。さらにこのルートは、急速に変容する移行過程の中では、相対的には依然としてもっとも安定しているルートの一つのように見える。

しかし彼ら彼女らの創り出している関係は、決して外から与えられたものではなく、彼ら彼女ら自身がその移行過程と格闘する中で創り出しているものであり、そのような関係を創ることで、「移行過程を生きぬく場」になっていることが重要である。もちろんこの関係は、お互いを安定させ、その過程につき止めるだけではなく、時には関係の中にその仕事への向き不向きや仲間たち

に比べた自分の技能修得のつたなさなどを浮かび上がらせることで、彼ら彼女らの一部を「淘汰」するという機能を果たす可能性も同時に持っている。だがそのような側面を含むとはいえ、移行過程の持つ本来的不安定さを補完できるものは、このような彼ら彼女ら自身が創り出す仲間関係であるということが浮かび上がっている点では、現在の移行過程全体の課題を考える上で重要な示唆を与えているといえよう。

3) 家族をめぐる問題

最後に取り上げたいのは、今日の若者たちの移行過程にとっての家族という問題である。移行過程において家族はすでにみたようにそれが属する階層というものを通して若者たちの進路を大きく規定する要因となっている。しかし家族は、そのような意味で若者たちの移行過程の背景的要因となっているばかりでなく、家族からの自立を含む関係の組み替えという問題として、それ自体が移行過程における重要なテーマの一つとなっている。

家族の問題についてまず指摘したいことは、家族の感情的な支援・支持が移行過程に大きく影響しているということである。家族の経済資本と文化資本が移行過程に影響していることはすでに述べた。しかし家族が若者たちの進路選択に影響を及ぼしているのは、その経済資本・文化資本によってであるばかりではない。家族が彼ら彼女らの進路選択に与える積極的承認と支援、あるいは否定と不支援などもまた非常に大きな影響を与えている。家族によるこのような感情的な支援・支持の移行過程への影響が最も顕著にみられたのは、浪人の場合である。すでに5章において詳しくみたように、浪人を選んだ6人の半年後の状況は、感情的な側面を含む家族からの支持・支援の有無によってくっきりとわかれていた。また大学進学者の中にも、父親が大学の資料を集めたり(窪田千秋)、母親が大学見学に同行した(福島珠希)というようなケースがあり、専門学校に進学した者にも、父親が整備士になるという息子の夢に早くから賛成する(小玉勇人)といったケースがあったが、これらのケースでも家族の感情的な支援・支持は進路選択に大きく影響している。

ただしここで確認しておきたいことは、家族の感情的支援・支持という要素は、決して階層的要因と無関係ではないことである。それはフリーターを選ん

だ若者たちの中に見られる状況をみれば明らかである。彼ら彼女らの少くない部分にみられたのは、家族から支援・支持を得ることが難しいだけでなく、逆に家族から支援・支持を求められているということであった。たとえば竹内奈央は月10万円の収入の半分を家に入れているうえ、病気がちの母のことを気遣っていたように、経済的にだけでなく感情的にも家族を支えていた。こうした中では、彼ら彼女らにとって家族は自分らが支援を受ける源泉であるよりも自分らが支援しなければならない存在となっている。そういう意味では、家族の感情的支援・支持もまた、経済資本・文化資本と切り離された単なる「親の意識・態度」の問題ではなく、経済的階層構造のもとに深く組み込まれた要素の一つであるといっている。

しかし、上述のことと関わって本項で指摘したいもう一つのことは、家族の感情的支援・支持と、親子関係の組み替えや家族からの自立という事柄との複雑な絡み合いである。今回の調査の中で私たちが注目したこととして、大学進学者の中に親との間に葛藤を抱えているケースが複数見られたことがある。たとえば松井由里は、両親による過干渉、拘束に悩んで家出を試みている。また若林理絵は、インタビューの中で母親との間の激しい葛藤を1時間近くにわたって強く訴えていた。こうした親との間の葛藤は、他の進路の者からはほとんど語られておらず、大学・短大進学者の一部にだけ見られることであった。ではなぜ大学・短大進学者の中にこのような傾向が存在するのだろうか。それは大学・短大進学の場合、親による経済的感情的支援・支持が、親が子どものことを「保護する対象」と認識し続けること、つまり他の進路に比べて親子間関係に転換が起こりにくいことと関係しているのではないか。まだ子どものことを「一人前」とはみなしていない親と、高校を卒業して精神的には「一人前」に近づいているという自己認識を持つ一方で社会の中で自分の属すべき世界が曖昧である彼ら彼女らとの間に葛藤を生むこともあると考えられる。

これに対して就職者の場合、すでに2章において詳しく触れたように、多くのケースで就職ということ自体が「一人前」になることの象徴として選ばれていた。そこでは生徒・学生から「一人前の社会人」へという社会的ポジションの明確な転換が、親子関係を組み替える大きなきっかけとして働いていると考

えられる。また同じ進学でも専門学校の場合、これもすでに見たように少なくとも若者たちの中では、大学・短大進学者に比べて入学後はるかに早期にめざすべき職業世界に「周辺参加」しはじめているという意識や感覚が生み出されている。このことが自ずから若者たちが家族との間のこれまでとは違った距離をとることを容易にしているのではないかと考えられる。他方、フリーターの場合、「常識」的に見れば「中途半端な子ども」と「それにいらだつ親」との間の葛藤が当然存在するのではないかと思われる。しかしそうした葛藤はほとんど見られなかった。それはすでに指摘したように、少なくとも私たちが捕捉したケースの場合、家族のおかれた諸状況の中で、彼ら彼女らの多くがすでに家族に支えられるよりも家族を支える立場に立たされているということによるのではないだろうか。

いずれにしても、若者たちの移行過程の中で、家族との間の関係の転換が、今日どのような問題を含んでおり、そこに今日の移行過程変容と階層等の社会構造がどのような影響を与えているのかは、今後さらに検討が加えられるべき重要な課題である。

註

- (1) たとえば「NHKスペシャル フリーター417万人の衝撃」(2004年3月放映)にコメンテーターの一人として登場した北城格太郎氏(経済同友会代表幹事, 日本IBM会長)は、フリーター増加の原因をもっぱら若者たちの問題とした上で、親や大人たちが若者たちをしっかりと育てることの重要性を強調する発言に終始していた。なお、ジャーナリズム・アカデミズムの中でのフリーター問題をめぐる近年の言説を整理・紹介したものとして、平塚眞樹「フリーター・青年の移行(トランジション)問題をめぐって」(季刊『ポリティーク』5号, 旬報社, 2002年12月)。
- (2) 木戸口・竹石・杉田「都内高校卒業生の進路状況にみる高卒後進路の構造」前掲。
- (3) お茶の水大学教育社会学研究室『高卒無業者の教育社会学的研究』2000年。
- (4) 1980年代以来、急速な移行過程変容に見舞われている西ヨーロッパにおいては、変容の特質を“移行過程の個人化・個別化(individualisation)”とする認識が青年研究者らの中に今日広く共有されている(例えば Furlong, A. & Cartmel, F. (1997) *Young People and Social Change*, OUP)。その際、“個人化・個別化”とは、ベックやギデンスらの理論をもとに次のように捉えられている。すなわち、1970年代までの移行過程は階級やジェンダーなど毎に標準化されていたとともに、例え

ば労働者階級の子どもたちは同じ社会背景を持つ仲間たちとともに地域の学校に通い、義務教育が終わると親たちと同じ地元の仕事につき、職場でも地域コミュニティにおいてもともに生まれ育った仲間たちと共に生きていくというように、いわば移行そのものがコミュニティと結びついた集団的なものであった。これに対して80年代以降の変容は、教育期間の延長やユース・トレーニングなどの職業訓練、さらにしばしばの失業や一時的仕事というように、その移行過程が長期化複雑化した結果、親たちが経験したこともなければ、義務教育終了まで一緒に学んでいた仲間たちの中にさえ自分と同じルートをたどる者を見いだせない、あらかじめ敷かれたレールのないもとの一人ひとりの努力と判断でその過程を乗り切らなければならないものにしたというのである。こうした西ヨーロッパにおける“個人化・個別化”概念に照らして、ここで用いる“個別化”の意味はやや限定的である。すなわち産業化の歴史的経験の時期・期間の違いから、西ヨーロッパにおける70年代までの移行モデルの基本構造がすでに幾世代にもわたって積み重ねられてきたものであるのに対して、日本の場合、その蓄積は本格的には高度経済成長の開始以降90年前後までのほぼ1世代半程度であったこと、また高度成長期前半にはむしろ「集団就職」に象徴される地域間移動の方が常態であったこと、こうした歴史的経験の深度とも相まって「階級意識」などの集団的自己認識を支える意識の社会的浸透が西ヨーロッパなどに比べてはるかに弱かったことなど、80年代までの日本の移行モデルは、西ヨーロッパの集団主義的移行モデルとはやや異なる性格を持っていた。しかし日本の場合も、学力別に階層化された高校教育の大衆化と「学校斡旋による新規学卒就職慣行」とが組み合わされた移行システムが標準化されるもとの、事実上階層性を帯びながら標準化され、親たちにとっても若者たち自身にとってもあらかじめおおよその見通しを持つことが可能ないわば「システム化された移行モデル」が一旦は定着していたといえる。それに対して90年代半ば以降の変容はこのシステムを大きく揺るがすことで、システムの外に押し出されざるを得ない層を大量に生み出すとともに、システムの中にあってもその信頼性が著しく低下することで、システムに頼ることなく自分（たち）個人の努力で個別に対応せざるを得ない領域を大きく拡大している。

- (5) 「道具性」「表出性」についてはパーソンズ, T. (佐藤勉訳)『社会体系論』, 青木書店, 1974年, および同(武田良三監訳)『社会構造とパーソナリティ』, 新泉社, 1981年。なおこの点については新谷周平「フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能—現在志向・『やりたいこと』志向の再解釈—」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』55巻2号, 2004年より示唆を受けた。
- (6) Ball, S.J., Maguire, M. & Macrae, S. (2000) : bid.
- (7) 杉田・西村・宮島・渡辺「進路多様校における高校生の進路選択の背景にあるもの」前掲。

- (8) 荻谷・粒来・長須・稲田「進路未決定の構造－高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究－」前掲。
- (9) 芳澤・上間・渡辺・宮島・椎林「統計から見た東京における若年労働市場の変容」前掲, 6-8頁。
- (10) 本稿では詳述しなかったが, 女性に保育系・看護系進学者が多く, 男性に工学系や自動車整備関係の進学者が多いというように, 進学する分野にもジェンダー要因がはたらいっている。